

金の星

十月号



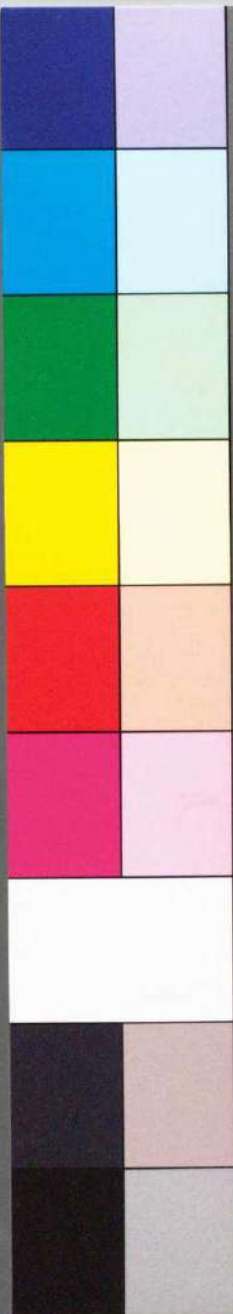
第十號

第七卷

Z32-B88

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM, Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

世界少年少女名著大系 (18) 金の星社編・装幀寺内萬治郎畫伯

ギリシヤ英雄物語

原作・英國文豪
キングスレー著

日本で初めて紹介されるギリシヤの英雄の物語りである。本書の發行は日本兒童文學の偉大な誇りである。

【本書の内容】 本書はギリシヤの英雄の物語りを傳説に従つて書かれてゐますから、その面白さは格別です。本書にはギリシヤの英雄達の中で、最も有名でもあり、又最も面白いお話を持つてゐる三人の勇士、デューソン、ペルシウス、テシウスの一生が書かれてゐます。どの勇士のお話も實に面白くて、胸をおどらせるものばかりです。かういふ面白い話があるのに、知らずに済ますのは實に残念です。

【本篇の著者は如何なる人か】 原著者は英國の有名な文學者であるばかりでなく、世界第一流の作家として立派な作品を海山に残してゐる人であり、この人は大層子供を可愛がつて、自分の子供が一人生れることに一つづつお話を書きました。この「ギリシヤ英雄物語」もその内の一つで、最も有名な著者の一つであります。

四六判箱入美本
内容一九〇頁
挿畫三色版外數頁
定價九拾錢
送料六錢

東京本郷動坂町
金の星社
振替東京五九五六番

世界少年少女名著大系 (19) 金の星社編・装幀寺内萬治郎畫伯

アンデルセン童話

世界第一の童話作家として、誰でも知つてゐるアンデルセンの童話の中から、最も面白い、いゝ作を集めました。童話を研究される方々のために、最もよい指導書であることは勿論ですが、少年少女の方々がお読みになつても、こんな上品な面白い童話は、先づ世界を通じてありますまい。成る程、これでこそ、本當の立派な童話だ、と思ひになりませう。ごなたの書棚にも、是非一冊はなくてはならない本です。

四六判箱入美本
内容一九〇頁
挿畫三色版外數頁
定價九拾錢
送料六錢

東京本郷動坂町
金の星社
振替東京五九五六番

英國文豪 キップリング原著・小島政二郎先生譯・寺内萬治郎畫伯裝幀

狼少年

四六判箱入美本
内容三一二頁
插畫三色版外數頁
金壹圓九拾錢
送料六錢

目次

- | | |
|-----------|----|
| 第一 狼少年 | 三 |
| 一 大虎あらはる | 四 |
| 二 狼に助けられる | 五 |
| 三 熊と豹の親切 | 六 |
| 四 虎の野心 | 七 |
| 五 赤い花 | 八 |
| 六 狼會議 | 九 |
| 第二 虎！虎！ | 一〇 |
| 一 モーグリ人間の | 一一 |
| 二 世界に歸る | 一二 |
| 三 鐵砲の名人 | 一三 |

本書は印度の大自然の中で狼に育てられた不思議な少年の物語りであつて、その内容の面白さは目次だけを御覧になつても、おわかりの事と思ひます。

【著者より】本書はイギリス現代第一流の小説家キップリングの傑作である。彼は印度のカルカッタ市で生まれた。従つて生まれた故郷である。著者の語るところによつて、本書もその材料は、同時に、同じ場所、容易に集められたものではない。年月は、同じ専門の學者から下は踊り子の口まで、煩しうば、上はキップリングはかう云つてゐる。夫程努力を惜しまなかつた作品だけに、興味ある動物生活の描寫に於て、實によく、生命ある筆觸を示してゐる（以下略）

町 坂 動 郷 本 京 東
社 星 の 金
番 六 九 五 九 五 京 東 替 振

沖野岩三郎先生著・裝幀 寺内萬治郎畫伯
挿畫 水島爾保布畫伯

童話 金の釣瓶

四六判箱入美本
本文一五〇頁
插畫二色版外數頁
定價金壹圓
送料六錢

よゝあず 必て後だん讀
本るけ頂てん喜とたつか

お待ち兼ねの沖野岩三郎先生の童話讀本の第二輯として「金の釣瓶」が出來ました。日本に於ける最初の童話讀本を作つたのが沖野先生であるだけに、他から發行されてゐる同種類の本とは全く比較にならない程立派なものです。幾度讀んでも面白く、そして讀めば讀む程お話の中から尊い教訓を受ける處に童話讀本としての「金の釣瓶」の値打ちがあります。

本書の發行は「金の星」の愛讀者の方はいふまでもなく、一般の家庭のお母様からも、それから又、各學校の兒童圖書館からもすぐ讀みたいから送れといふスバラしい申込みを受けてをります。どうぞ大急ぎで御申込みをいただきたい本です。

九 五 三 町 坂 動 郷 本 京 東
社 星 の 金
番 六 九 五 九 五 京 東 替 振

本書は佛國の文豪マローの原作であつて、世界の少年少女にこれ程深い感動を與へた名作はないと云はれてゐます。重版又重版！絶えず大歓迎を受けてゐる偉大なる姉妹篇であります。是非御一讀下さい。

家なき子

三宅房子先生譯

四六判美本・内容二七〇頁
定價 金壹圓八拾錢
送料 金 六 錢

本篇の主人公である哀れな少年ルミは、名家の生れでありながら不思議な運命にもてあそばされて、捨て子としてバリーの大通りで拾はれます。そして流れ／＼て遂に旅役者に賣られ、旅から旅とさすらひ歩く、その一生を書いた眞に人生の哀れを覺える名篇であります。

家なき娘

三井信衛先生譯

四六判美本・内容三六〇頁
定價 金壹圓九拾錢
送料 金 六 錢

本篇の女主人公である哀れな少女バリンヌスよ！父母によつて手中の玉のやうに愛されてゐたのに、旅の間に悲しくも父と母を失ひ、全くの孤兒となつて、まだ見ぬ祖父を尋ねてさすらひ歩くのです。旅から旅へ！その間に如何なる出来事に遭遇したでせうか。

永橋 卓介 編・裝幀挿畫 高坂元三

世界童話 叢書第四編 佛蘭西童話集

四本挿定送
六文書價料
箱三十冊拾
入〇十冊貳
美九數拾貳
本頁葉錢錢

不幸な大使 魔法の指輪
煙草の入 不思議な羊
母指さん 不思議な鳥
嘘を入れる袋 尻尾のない馬
愚智恵小僧 ムウリとアペイユ
靴をはいた小猫 寶石と蠟燭

佛蘭西の童話は、世界の童話の華と云はれてゐます。その花やかなお話の中から、面白く、さうして爲になるものばかりを、選り抜いたのは本篇です。美しく清い花のやうなお話は、この書をお讀みになる子供衆のお心に、どんな尊い豊かな實を結ばせるでせうか。學校に家庭に、少年少女の讀み物としてお勸いたします。

世界童話叢書 第一編	支那童話集 (再版)	定價金壹圓五拾錢 送料 拾 貳 錢
世界童話叢書 第二編	印度童話集 (再版)	定價金壹圓五拾錢 送料 拾 貳 錢
世界童話叢書 第三編	ろしあ童話集 (既刊)	定價金壹圓五拾錢 送料 拾 貳 錢
世界童話叢書 第五編	獨逸童話集 (近刊)	定價金壹圓五拾錢 送料 拾 貳 錢



目次

可愛い、リス	寺内萬治郎
秋は千切	岡本歸一
下は千切	寺内萬治郎
番ごっこ	野口雨情
同作	本居長世
新聞に書いてあつたお話	沖野岩三郎
人を倒すヒキガヘル	小島政二郎
小鳥は空に	加藤武雄
童謡つまらない	林 きむ子
討たぬ敵	三島 霜川
原の一家	伊藤 元吉
雨の夜に	野口雨情
風荒む満洲の夜に	齋藤佐次郎
雛雀	若山 牧水



四つの幽霊	三井 信衛
お星さん	森 ほたる
化けくらべ	荒井正巳
児童三人眼鏡	若山 牧水
一角仙人物語	久米 絃一
ボゴロツキと虎	野口雨情
スベートのジャック	西川 喜平
先生の指	海達 公子
先生の指	水島爾保布
出讀者	片平喜一郎
版者	齋藤 佐次郎
（特別附録）	山 本 鼎選
ナイヤガラ瀑布奇談	寺内萬治郎・水島爾保布
挿畫	岡本歸一





秋
び
よ
り

金の星畫譜

岡本歸一畫

下は千仞



(第一二三頁の「ナイヤガラ瀑布奇談」を御覽下さい)

寺内萬治郎畫

愛讀家の知れぬ恥

世界有名詩人小曲集

著原ルーデスイテ
譯生先るさま谷水

ハイネ小曲集

袖珍形總英國
製上布表裝
天金模樣入り
特美上製本
金壹圓
送料金拾錢

▽北米の閨秀詩人として當代第一人として好愛されてゐる原著者の作品中最もやさしく美しい
小曲詩篇を選收したるもので英詩研究の第一歩とし又は詩を愛する吾國青年男女の必讀して置
かねばならぬ名詩人の名譯詩双書である。美と良と廉――

生田 春月

先 生 譯

袖珍形總英國
製上布表裝
天金模樣入り
特美上製本
金壹圓

先 生 譯

袖珍形總英國
製上布表裝
天金模樣入り
特美上製本
金壹圓

先 生 譯

ゲエテ小曲集

獨逸詩人中第一の戀
愛人として有名な
なるハインネの優情温雅
なる小曲詩集である
是非一讀するに足る
のと推薦するに足る
大英國詩人中の巨匠
として世界に鳴るテ
ニスン卿の芳麗なる
小詩篇數多を收めて
一巻となし若き人々
の研究に適せしむ
詩事ゲエテを知ら
人年今や全世界に
と情とを各詩篇と
好詩集である。無二の

テニス小曲集

獨逸詩人中第一の戀
愛人として有名な
なるハインネの優情温雅
なる小曲詩集である
是非一讀するに足る
のと推薦するに足る
大英國詩人中の巨匠
として世界に鳴るテ
ニスン卿の芳麗なる
小詩篇數多を收めて
一巻となし若き人々
の研究に適せしむ
詩事ゲエテを知ら
人年今や全世界に
と情とを各詩篇と
好詩集である。無二の

ハイネ小曲集

獨逸詩人中第一の戀
愛人として有名な
なるハインネの優情温雅
なる小曲詩集である
是非一讀するに足る
のと推薦するに足る
大英國詩人中の巨匠
として世界に鳴るテ
ニスン卿の芳麗なる
小詩篇數多を收めて
一巻となし若き人々
の研究に適せしむ
詩事ゲエテを知ら
人年今や全世界に
と情とを各詩篇と
好詩集である。無二の

六十町保神南田神京東
番九七二〇四京東替振

社蘭交

本日代表する大評の金星童謡曲譜集
 一輯二各十六錢 三輯三以下各十八錢 送金料六錢

第八輯 べんべん 鳥 (目曲) 小馬車、紅鼓踏鈴、さみだれ	第七輯 お人形さんの夢 (目曲) お人形さんの夢、釣鐘草、啼いた啼いた雄子、芒の穂、お馬のお耳、草遊び、雪柱	第六輯 子守唄 (目曲) 子守唄、櫻と小鳥、乙姫さま、霜柱、葱坊主、藪の下道	第五輯 夢と (目曲) 夢とり、おしやれ棒、つば子、十と七つ、雲雀の水汲、雀の機織り	第四輯 赤い靴 (目曲) 赤い靴、山彦、三ヶ月さん、姥捨山、朝鮮館屋、眠り蟲の子	第三輯 青い空 (目曲) 青い空、燕、雨夜の傘、でん／＼／＼、雀の酒盛り、呼子鳥	第二輯 一つお星さん (目曲) 一つお星さん、七つの子、鶴と雀、鶏さん、象の鼻、四丁目の犬	第一輯 人買船 (目曲) 人買船、青い目の人形、九官鳥、日傘、歸る燕、十五夜お月さん
---	---	---	---	---	---	--	---

東 京 本 郷 金 星 社 振 替 東 京 小 石 川 五 三 八 番 六 番
 東 京 市 外 白 眉 大 捌 社 振 替 東 京 小 石 川 五 三 八 番 六 番

青眼の人形

野口雨情先生著・装幀 落谷虹児 挿画 寺内英治郎 武井雄 武雄 武雄 武雄
 細表紙箱入美本・定價金壹圓八拾錢
 内容 二三〇頁・送料 拾 貳 錢
 雨情先生の童謡集で目下發行中のものは本書あるのみ。先生の最も圓熟せる時代の傑作のみを集めた本書こそ、童謡研究家の座右に無くてならぬ名著である。好評忽ち五版！

童謡あの町この町

金の星童謡曲譜第九輯
 中山晋平先生作曲 野口雨情先生作詞 竹久夢二先生装畫
 (目曲) あこの町この町・木の葉のお舟・高野山・鼠のおばさん・狸ばやし・雀たどり
 『あの町この町』は中山先生の作曲中で最大の傑作と稱せられてゐるばかりでなく、又日本童謡作曲中での一二を争ふ名曲であります。尚、他の五曲も寶玉の如き作であり、大好評を受けてゐるものばかりです。愛好家に捧げて御批評を待つ。

東 京 市 本 郷 金 星 社 振 替 東 京 小 石 川 五 三 八 番 六 番
 東 京 市 外 白 眉 大 捌 社 振 替 東 京 小 石 川 五 三 八 番 六 番

金の星社 世界少年少女名著大系 編星

四六判箱入頗美本・定價各冊金十九錢・送料金六錢

金の星社の名著大系は少年少女の爲めに書かれた世界的名著を、最も面白く、又最も解りやすく、しかも、クロース製本箱入りの非常に立派な本を、他に例のない安い定価で發賣するので、熱烈な歡迎を受け、増版又増版の有様です。皆さまの愛讀書としては非お揃へ下さい

第一編 ロビンソン漂流記

船乗りになつて、遠い國々へ行きたいとあこがれてゐたロビンソンが、途中で難船に出遇ひ、無人島へ流されて、艱難辛苦して再び本國へ歸るまでの長い物語りです。これ程深山深谷に本はない。この本を読まない者は、一生の不幸です。

第二編 ナポレオン物語

ナポレオンの一代記です。地中海の小島コルシカに生れた一少年がナポレオンが、ナポレオン大帝と稱せられて歐洲を征服する榮華の時代から、遂に南大西洋の一孤島セント・ヘルナで淋しい死を遂げるまでの變化極りない物語です。

第三編 ドン・キホーテ

イスパニヤの有名な物語。毎日騎士の物語りを讀んでゐる内に、氣が少し變になつて、自分が騎士になつたやうに思ひ込んでしまひ、馬に乗つて本當に武者修業の旅に出かけ、到るところで大失敗をして、遂にあはれな死をとげるといふ痛快な物語りです。

第四編 コロンブス物語

アメリカ大陸を發見した大偉人コロンブスの物語りです。コロンブスがあらゆる困難と戦つて、遂にアメリカ大陸を發見するまでの變化極りない運命を畫いた血と涙の物語りです。この偉人の傳記を書いた本は餘りないので、非常にめづらしい本です。

金の星社 世界少年少女名著大系 編星

四六判箱入頗美本・定價各冊金十九錢・送料金六錢

第五編 大人國小人國めぐり ガリバー旅行記

ガリバーが、難船して小人國に漂流して、奇想天外の滑稽なやり、再び航海に出て大人國に漂流し、そこでさんざんな目にあひ、漸く驚にさらはれて、本國に歸つて來るまで實に面白い物語りです。

第六編 ロビン・フッド物語

英國に傳へられた有名な物語りです。もとは伯爵であつたロビン・フッドが悪い男のために國を奪れて遂に義賊となつて、シャーウッドの森にかくれ、王を救ふ戦を起したり、悪い僧正をやつたり、そして最後に毒殺されるまでの變化の多い物語りです。

第七編 アラビヤンナイト

アラビヤン・ナイト程面白い物語りは、世界の童話文學を通じてないといはれてゐます。千年餘の間も語り傳へられた物語りである事を考へても、如何にこの物語りが讀者に興味を與へてゐるかわかります。アラビヤン・ナイトの中でも、特に面白いのばかりが集つてゐます。

第八編 ギリシヤ神話 オデッセー物語

ギリシヤの詩聖ホーメーの作であつて、世界中で一番古い、そして又一番面白い物語りです。トロイの戦争に遙々海を越えて出征した勇士オデッセーが神の怒にふれ、途中ありとあらゆる困難に出遇ひ、遂に乞食となつて本國に歸る迄の物語りです。

第九編 シエークスピア物語

有名なシエークスピアの芝居の中で、面白いものばかりを選んで、物語り風に書いたものです。テンバースト「御意のまゝ」「エニエの商人」「がみく女」等、夏夜の夢「冬の夜はなし」等、是非一度は讀んで置くべき物語りです。

錢六金料送・錢拾九金冊各價定・本美入箱判六四

編九十第

アンデルセン童話

世界第一の童話作家アンデルセンの童話は何人も讀んで置かなければならないほど尊い世界の中で。本書に収めた作は、アンデルセンの作の實で最も代表的なものになつてゐる立派な作ばかりですから、本書一冊を讀めばアンデルセンの作が全部わかるわけです。立派な傑作集です。

編八十第

ギリシャ英雄物語

日本にはじめて紹介されたギリシヤ英雄の物語りで、原著は有名な英國文豪キングスレーです。傳説に従つて書かれたものだけに、その面白さは格別です。どの勇士のお話も、實に面白くて、胸をおどらせるものばかりです。かういふ面白い話を知らずに済ませるのは残念です。

編七十第

奴隸卜乇物語

白人種のために犬猫同様にあつかはれてゐた奴隷の涙の物語りです。偉人リンコルンが現れるまで、米國のあはれた奴隷たち生活を書いたもので、最初、最後の頁から最後の頁まで涙なしに讀めぬ本です。博大、崇高な氣持ちが、この本によつてどんなに養はれることでせう。

編六十第

舊約聖書物語

『バイブル物語』とも呼ばれ、欧米各國の少年少女が、幾度となく繰返し讀む程有名なお話です。日本の『古事記』のやうなお話で、ユダヤの國の昔にあつた、神様と人間との不思議な物語りです。『新約物語』と一しよに讀んだら、聖書のことぐわかつて面白味が深いでせう。

編五十第

ローマ英雄物語

ローマの英雄を中心に、ローマ歴史を書いたもので、それから、面白い一大英雄傳です。ローマを最初
に開いたロミュラスとレムスのお不思議な物語りか
ら、シーザーや、ハンニバルなどの大英雄の合戦
の話など、順々にあらはれ息もつけぬ面白い物語
りです。

錢六金料送錢十九金冊各價定•本美順入箱判六四

第十編

グリム童話

有名な童話に改めて述べたまでもなくドイツの有名な傳説研究家グリュム氏の作ったもので各處ともドイツの各地に傳へられた國民童話である。しかもグリュムの童話は今日ドイツ國のものでなく、少年少女の愛慕として譯されてゐる譯有名人のものに多く、本書の中に集められた作はグリュムの數多くの作の内、最も有名な面白ものばかりである。童話の愛好者及研究家の御一讀を待つ。

編一十第

入 繪
イ
ソ
ツ
プ
物
語

イツツブ物語は古くから知られてゐる話だけに、これまで、隠分澤山の本が出てゐる。しかし本書の如く、一つのお話に一枚づゝの立派な畫を入れて、お話と畫と兩方面白く讀まざる本は他にない。金の星社が最も自慢の本の一つとして、是非皆さんに見ていただきたい。

編二十第

神日
話本
古
事
記
物
語

『古事記物語』ほど立派な神話は、恐らく世界の何れの國にもあるまい。實際驚く程立派な、面白い物語りである。日本の國がはじめて出た話から始めて神々の誕生や、天照大神や、大國主の命の話や、それからすつと末になつて、雄略天皇の御代までの神話である。

第十第

子供キリスト傳

第三十編

新
約
物
語

二千年後の今日まで、世界の救世主としてあがめられてゐるイエス・キリストの一生を聖書に従つて最も正確に書いた本である。この尊いキリストの一生を子供のために書いたもの他にない。本書はわが國にあらばれた最初の子供キリスト傳として廣く世に紹介したい。

第四十

西遊記

支那から印度へ、はるくお經を取りに行つた玄奘三蔵の旅を書いたもので、お供には悟空、八戒、沙悟淨の三人の怪物がついて行き、途中で様々の魔物に出遇ふ奇々怪々の物語。一度讀み出した本を置けない、世界的の名作。この本を讀まぬ者は不幸である。

第四版を特價版として金壹圓で提供!!

又ごなき機會! 此の際は非お申込み下さい。

繪入ブウ太郎鍛冶屋 童話集

武井武雄先生著並畫

四六判箱入頗る美本
本文二度刷二〇〇頁
特價金壹圓
送料六錢

武井先生の繪入童話集『ブウ太郎鍛冶屋』は先生でなければ描けない特別の面白いお話と畫なので、スバラしい評判を受けました。全く一度讀んだら途中で止められない、本です。本社は先生の著書をもっと大勢の方に讀んで頂きたい爲めに第四版を犠牲的出版として特價を以て發賣する事にいたしました。まだお讀みにならない方は、此の好機を失はずに、大至急にお申込み下さい。

東 京 本 坂 郷 町 金 星 社

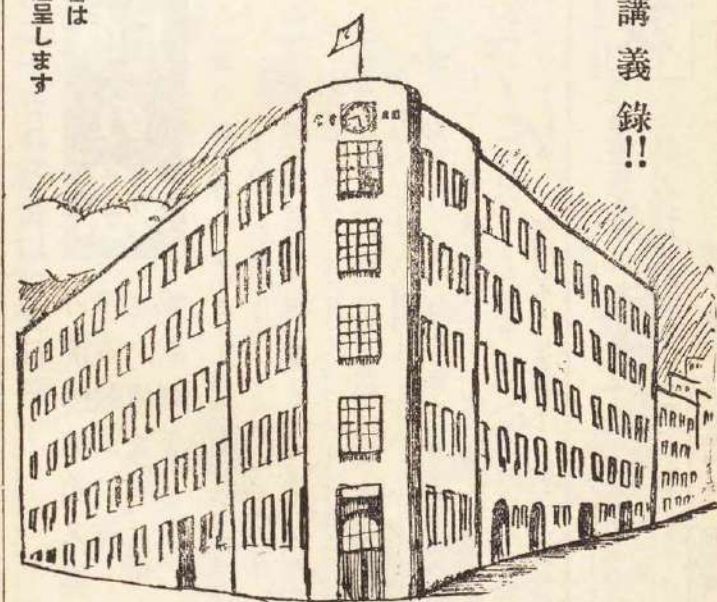
東京 東 本 坂 郷 町 金星社
電話 五五九五六番
小石川 三五七八番

世界一の
中學講義錄!!

創刊は立
大日本國中學會
一は番一は客内古番一は新番
會費は早
ツマヤカ

會員大募集

講義錄見本つき規則書は
申込み次第無代で進呈します



東京 神田 駿河臺
大日本國中學會
電話 五五七七〇番 振替 東京 四二〇〇番

長里きよし氏著 (八月二十五日發賣以來大好評！)

最新刊 童謡と砂の塔
 全色刷 童話集

口繪箱入美装
 四六判貳百頁
 定價金貳拾錢
 送料金八拾錢

▲お話の大すきな

子供だつた著者が

▲お話の大すきな

子供たちに捧げる

▲お話の面白い本

△『波の聲』『砂の塔』等——清らかな子供の世界をたゝ
 えた——美しい童話……

△『毛虫の健吉』『夜明けの歌』等——なやましい人生の爲に
 意味深い物語……

△『熱血の花』『海邊の墓』『桐の花咲く』等戦争の産む——
 勇ましくいたましたしい實話……

△『涙 島』『たゝり岩』等——海上に残されたなみだぐま
 しい——不思議な傳説……

△『かもめ』『山びこさん』『夕煙』『コスモス』『小雪』等
 ——やさしい物語のやうな童話……全二十一篇の創作集

小學之友

每號懸賞大募集
 小學生の作品滿載

定	價
一 部 金拾錢郵稅貳錢	
六ヶ月 金五拾五錢	
一ヶ年 金壹圓 稅不要	

童謡、童話、綴方、書方、俳句、和歌、口繪等

何れも皆さんの作品です、勉學雜誌として皆さんのよいお友達です

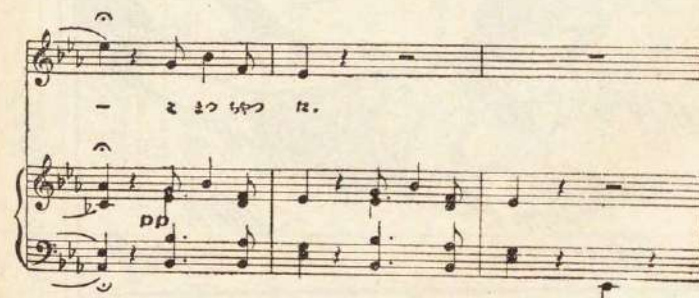
(通卷第七拾壹號)



東京市外 五七番 振替 一〇二番 小學之友社

番 ^は _人 ご つ こ

作曲 本居長世
作 謠 野口雨情



番とつこ

野口雨情

鳥が種蒔く

雀が欲しがる

雀が種蒔く

鳥が欲しがる

鳥は雀を

番してる

雀は鳥を

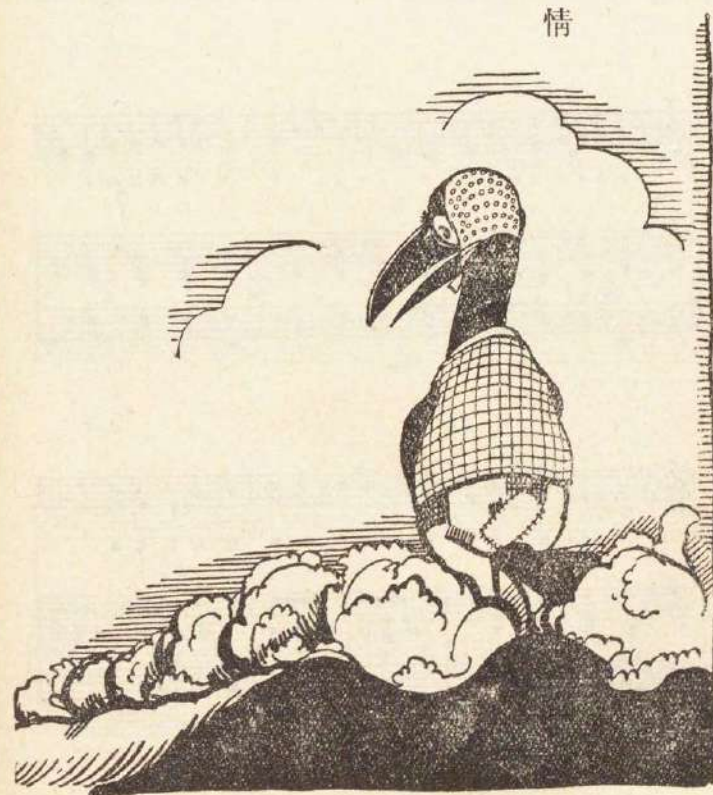
番してる

雀も困った

鳥も困った

雀は鳥を

困っちゃった



新聞に書いてあつたお話

沖野岩三郎

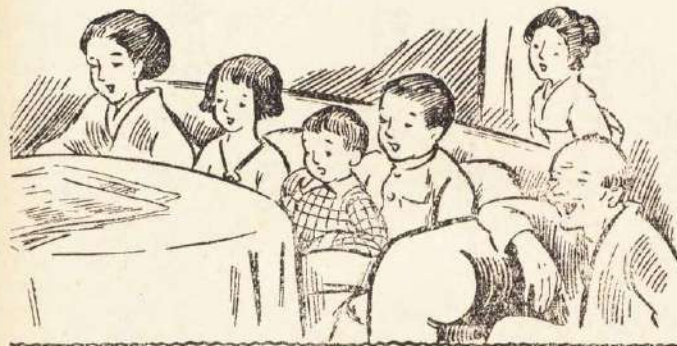
一、二つの夕刊

お父さまは書齋で、其日の朝日新聞の夕刊を読んでゐました。おつ母さんは應接室で、二三日前の日々新聞を出して来て読んでゐました。書齋と應接室との間にある一枚のドアを開けて、そのそばに立つてゐた京二さんは、お父様の方に對つて、

『お父さま、朝日新聞に面白い事が書いてあつて？』とたづねました。

するとお父さまは、新聞を机の上に載せながら、

『面白い事が書いてある。朝日新聞の訪歐飛行機の東風と初風とが、二臺ともノヴォニコラエフスクへ着いたよ。さあ、もう一つウラル山を越えればいゝんだ。』と、申しました。



それを聞いたおつ母さんは、何を思ったか御自分の読んでゐた日々新聞を、引ツつかむやうにして、

『それはノボニコラエフスクと云ふ町でせう？』と言ひながら、書齋へ入つて來ました。

『さうだ、ノヴォニコラエフスクと云つても、ノボニコラエフスクと云つても、どつちでもいゝんだ。』と仰しましたお父さまは、おつ母さんの方にむかつて、

『ノヴォニコラエフスクに、何か變つたことでもあつたのかい？』とききました。

おつ母さんは日々新聞を、お父さまと同じやうに、机の上にのせて、

『此の夕刊に、大へん面白いおはなしが書いてありますから、お父さま、あなたは、それをお読みになつて、京二に詳しく、お話してあげて下さいまし。』と言ひました。

『どうれ、どんな面白い事が書いてあるんだい？』と申しましたお父さまは、おつ母さんの差出した日々新聞を受取つて、しきりに、うなづきながら讀みました。

『お父さま、どんな面白いこと？ 早く聞かして下さいよ。』



京二さんは、お父さまの腕にすがるやうにしました。お父さまは優しい聲で、

「さア、お話をしてあげるから、お姉さまも、お兄さまも、権ちいやも、お松さんも、みんな此所へお誘ひしてゐらつしやい。」と申しました。それを聞いた京二さんは、早速家中を觸れまはつて、

「お父さまの面白いお話が始まります。今直ぐ聞きにいらつしやい。早くいらつしやい。」と申しました。

間もなく齋書の椅子には、家内中が、みんな集まりました。

二、お父さまのお話

何年も何年も汽車の通はなかつた、シベリア鐵道も、もう今は、ハルビンから、すつとヨーロッパまで通ふことになりました。

私のお友だちの、ニイヅマさんと申すお方が、このあひだ、このシベリア鐵道で、ロシアを通過つてドイツへまゐりました。

ニイヅマさんは、五六人のお友だちと、一よにハルビンから汽車にのりましたが、その時汽車に乗る人たちは、みんなめい／＼に、お藥罐を一つづつ買つてきました。それは汽車の中でお藥を煎じるのでも、お茶

を沸かすのでもありません。この鐵道の驛々では、日本のやうに、「お茶、お茶、ビールにサイダア、マツチに煙草、新聞々々……」などと、いろんなものを賣りにまゐりません。

夏のあつい旅に、お茶かお湯を飲まないでは、喉が渴いてしかたがありません。そこで驛々では大きなお釜を据ゑて、それにお湯を一杯沸かして置きます。汽車が驛へ着きますと、みんなめい／＼にお藥罐の小さいのを、手に提げて、其の湯沸し場へ、お湯を貰ひに行くのです。

ニイヅマさんたちも、汽車が停車場に着くたびに、直ぐ其のお藥罐をさげて、湯わかし場へ、お湯を貰ひに行きました。

多勢の人が列をつくつて行くのです。其の列の中には、日本人も支那人も、イギリス人もアフリカ人も、印度人もゐます。白い人、黄色い人、黒い人、高い人、低い人。肥えた人、痩せた人、いろいろさま／＼の人が、並んでゐるのです。それは丁度世界中の人種展覽會みたやうなものです。

さて、ニイヅマさん達の乗つてゐる汽車も、今日朝日新聞社の飛行機が、非常に悪い天氣と戦つて、猛飛行を續けた結果、無事に到着したノヴォニコラエフスクの町に着きました。





「おいニイヅマ君、又た人種展覧會をやらうぢやないか。」と言つて、お友達の一人は汽車を出て、例の湯わかし場の方へ、お薬鐘をさけて出かけました。

ニイヅマさんも、お薬鐘をさけて、あとから出かけましたが、お友達とはみんな、遙か向ふの方にゐます。行列がなか／＼容易に進まない。みんなお湯をとりに行く人と、持つて歸つて来る人達とでずから、日本のお芝居の木戸口のやうに、押し合ひ、へし合ひしましたなら、ひどい火傷をしますから、みんな出来るだけ静に歩きます。

「だめだ、だめだ。此の調子ではとても吾々に順番はまわつて来ない。」ニイヅマさんは、ひとりごとを言ひながら、もうお湯は貰へないものと、あきらめて、列車の方へ歸らうとしますと、後の方から一人の日本人が、

「日本魂を出して、突破してやれ！」と叫びました。けれどもニイヅマさんは、其人の方を振り返つて笑つたまゝ黙つてゐました。

其時ニイヅマさんの傍に、年の頃十三歳の男の子が一人、大きな空のお薬鐘をさげて、やつて来ました。其の少年は、ぼろ／＼に破れた着物を着てゐます。靴も履かないで跣足です。けれども可愛らしい顔をあ



げて、ニイヅマさんに、何だか話しかけて来ます。

ニイヅマさんは、英語もドイツ語も、自由に話せますが、ロシア語は十分ではありませんから、少年の言ふ事が、何を言ふのだから、さつぱりわかりません。

「君もお湯を貰ひに行くのか。」と英語できいてみましたが、少年は英語が、わからないらしい。けれども、わからぬロシア語で、又たしきりに何だか話しかけて来て、左の方へ何度も何度も、指さしをしました。

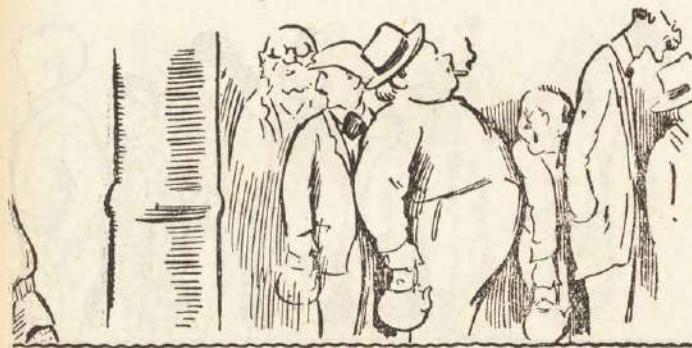
「どこかに、お湯を貰はれる所が、あるといふのですか。」

ニイヅマさんは、ドイツ語でききました。けれども少年はドイツ語を知らないらしい。しかし其の少年の、身振りと手まねとを見ますと、たしかに、

「僕もお湯をくみに行くんだから、ついでに、あなたの其の小さいお薬鐘にも、くんで来てあげませう。」と云ふらしい。

ニイヅマさんは、自分のもつてゐましたお薬鐘を、其の少年に渡しますと、少年は自分の大きなお薬鐘と、ニイヅマさんの小さいお薬鐘とを一しよに提げて、左の方へすんすんと走りしました。

列車の窓から顔を出してみますと、「日本魂を出して突破してやれ！」



と叫んだ日本人は、お相撲取のやうな大きなお腹のロシア人と、煙突のやうに背の高いユダヤ人との間に挟まれて、苦しさうにマゴ／＼してゐました。

五分七分たつても少年の姿は見えませんが、ニイヅマさんは列車を出ました。そしてプラットホームに立つて、少年の去つた方を、見守つてゐますと、一人のお友達が首を出して、

『ニイヅマ君、何を見てゐるんだい?』とたづねました。すると、ニイヅマさんは、

『僕は少年にお薬罐を渡して、湯を汲んで来てくれと頼んだのだが、どうしたのか、まだ其の少年の姿が見えないんだ。』と申しました。

其の言葉を聞いたお友達は、笑ひながら、

『ああ、あのボロを着た、跣足の子供か。僕の傍へも来て、何だか言つてゐたつけ。君はあの子供に大事の湯沸しを渡したのかい?』と言ひました。

『うん、渡したんだよ。正直さうな可愛い顔をしてゐたから。』

『なあにお湯なんか、もつて来るものかい。今ごろは、君のお薬罐を失敬して、にこ／＼笑つてゐるだらうさ。』

お友達は、さう言つて笑ひました。ニイヅマさんは、『人を見れば、盗人と思へ。』といふ言葉を思ひ出しました。けれども、あの貧乏らしくはあるが、正直らしい子供を、そんな悪人だと思ひたくはありませんでした。

カラン、カラン、と汽車の鐘は鳴り響きました。もう直ぐ發車です。しかしボロ／＼の着物も、日に焼けた跣足も見えませんが、

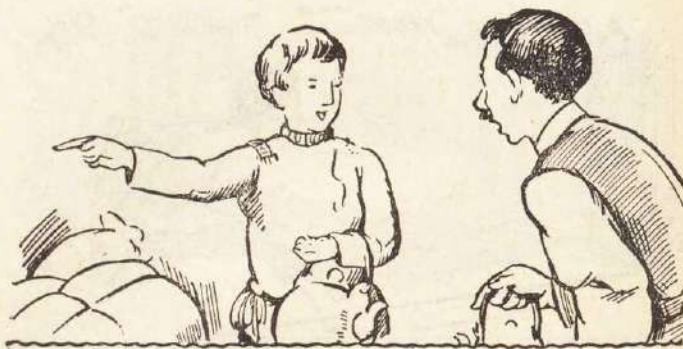
たうとう發車の合圖の鐘は鳴りました。汽車は極しずかに動き出しました。けれども、ニイヅマさんは、まだプラットホームに立つてゐました。

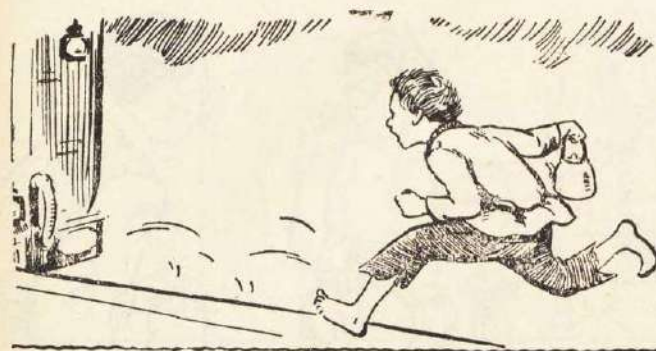
『ニイヅマ君。早く乗り給へ。盗まれた湯沸しぐらゐ、どうでもいいやないか。』

お友達は汽車の中から、嗚鳴るやうに言ひました。

ニイヅマさんは、汽車と一緒に歩きながら、尙ほ消え失せた少年の方を見てゐました。それは自分の小さいお薬罐を、惜しく思つたのではありません。あの可愛い少年を、ボロを着てゐるために、靴をはいてゐないために、旅の人を欺く盗人だと思ひたくなかつたからでした。

汽車は少しづつ停車場を離れて行きます。ニイヅマさんが、汽車と一





一四
緒に一間ばかりも歩いたと思ふ時、遙か向ふに、ちらツと少年の姿が見えました。

『来た〜！』とニイヅマさんは叫びました。

少年は自分の大きなお薬鐘と、ニイヅマさんの小さいお薬鐘とを両手に提げて、一所懸命に汽車を追つて來ます。

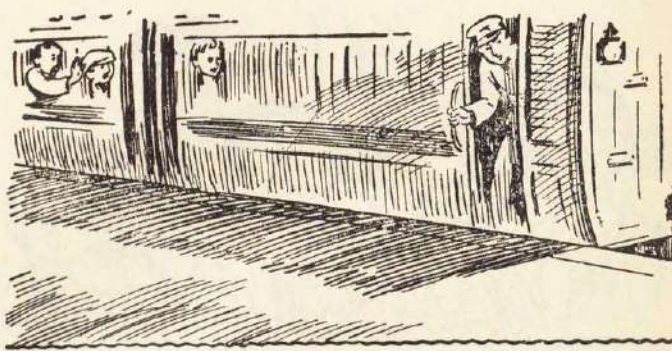
『早く早く……』と叫んでゐたニイヅマさんは、汽車が段々早く動き出すので、乗降口の階段に片足かけて、把手につかまりながら、

『けがをしてはいけない！ もう持つて來なくともい〜！』と日本語で叫びました。

けれども少年は、もうプラットホームまで來ました。汽車と少年との間は十間ばかりです。

少年は少しく前屈みになつて、汽車と駈つこをしてゐましたが、二つのお薬鐘をもつてゐては、どうしても追つつかれないと思つたらしい、自分の大きなお薬鐘を、プラットホームに、投げ出しました。こぼれたお湯が白く光つてみえました。

小さいお薬鐘一つだけになつた少年は、兎のやうに早く駈けました。そしてたうとう汽車に追ひつきました。しかし、どうしたつて、もうニイ



ヅマさんの前まで來る事は出来ません。

少年の顔は眞紅に火照つてゐました。何とか言はうとして、言葉が出ないらしく見えました。汽車は段々速力を強めます。

汽車の一番最後の車の昇降臺に、一人の車掌が立つてゐて、駈けて來る少年を眺めてゐました。

少年は、もう勢が盡きてしまつたと見え、其の車掌さんに、ニイヅマさんのお薬鐘を渡しました。車掌さんが上手に夫れを受取つた時、少年は其場へ、どつかと坐つて、へたばつてしまひました。

『有がたう！ 本當に有がたう！』と叫びながら、ニイヅマさんは、ポケットから銀貨を掴み出して、それを少年の方へ投げましたが、二人の間は、もう何十間も隔たつてゐました。

窓から首を出して、此の光景を眺めてゐた、ニイヅマさんのお友達も、大聲で、

『えらい！』『感心な子だ！』などと叫んで、めい〜に銀貨を投げました。

三、小さい英雄



お父さまのお話は、それだけでした。黙つて聞いてゐた京二さんは、
「お父さま。其の少年は、其の汽車に乗つてゐたお客でせうか。」とき、
ました。

「多分さうではなからう。」とお父さまは答へました。

「では、其の少年は何ですか。」と京二は重ねて問ひました。

「英雄さ。」とお父さまは言ひました。お母あさまは、傍から、

「其の子供さんは、顔色の異つた、言葉の異つた、見ず知らずの外國の
人から頼まれた、小さい責任を果たすために、いのちがけに働いた英雄で
す。人間は夫れだけ、何事にも忠實でなければなりません。どうぞ、そ
のニイヅマさん達の、お投げになつた銀貨が、みんな一つ残らず、其の
子供さんの手に、入つてくれ、ばい。」と言つて眼に涙を一杯うかべ
てゐました。

「えらい、本當に感心な子だ！」と言つたお父さまは、二枚の新聞
を重ねて、折り疊みながら、

「このやうに、世界中の人を、みんな自分の兄弟姉妹のやうに思つて、
親切にする人もえらいが、日本からロシアまで空中を飛んで行く人も偉
いなア。これからさきの英雄といふのは、こんな人達の事だよ。宮本武



藏や、荒木又右衛門や、猿飛佐助ばかりが、英雄ではないよ。」と申しま
した。

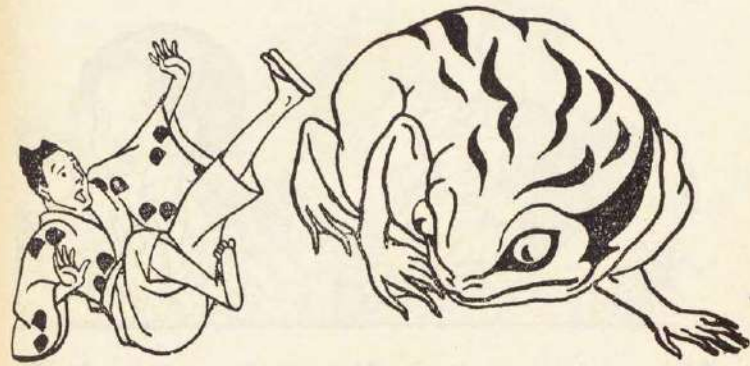
お父さまの重ねて、たゝんだ二枚の新聞紙は、大正十四年八月十六日
の夕刊東京朝日新聞と、八月十三日の朝刊東京日新聞とでありました。
京二さんには、お父さまの最後のお話は、半分だけしかわかりません
でした。

ボロを着て、靴もはかないで、ニイヅマといふ人のために、お湯を取
つて來た少年よりも、やつぱり宮本武藏、荒木又右衛門の方が、すつと
偉いと思ひました。けれども、猿飛佐助や霧隠才藏は、とても、日本か
らロシア、フランスまで、一飛びに飛んで行けなかつたらうと思ひまし
た。

京二さんは暫く考へ込んでゐましたが、ふと思ひついたやうに、
「お父さま、猿飛佐助を飛行機乗にしたなら、墜落しても死なないだら
うネ。」と云ひました。それをきいたお兄さまは、

「さうだ、霧隠才藏を飛行機乗にしたなら、どんな濃霧でも大丈夫だよ。」
と申しましたので、お父さまも、お祖母さんも、お兄さまも、みんな一
度に笑ひました。

(をほり)



人を倒すヒガキル

小島政二郎

一八

一
桓武天皇から孝明天皇まで、京都に皇居を構へて入らした事は貴方方も御存じでせう。その頃の皇居には、一番外に御門が十二ありました。その一つに、近衛の御門と云ふのがあります。

この御門のどこかに、一匹の不思議な墓蛙が棲んでゐて、夕方になるとは往來へ出て来て、まるで石のやうに平になつて寝そべつてゐました。色と云ひ艶と云ひ、どう見たつて墓蛙とは思へません。どうしても石です。そこで、よく間違へて人が踏みます。すると、ツルリ滑つてスツテンコロリと轉がされます。

人の轉がるのを見ると、墓先生、ノソノソと這ひ出してどこへか姿を隠してしまふのでした。

あまり度々轉がされるので、しまひには人も知つてしまつて、

「あすこには人を倒す墓がある、氣を附けろ。」と大評判になりました。

ところが、それと知りながら毎日のやうに人が轉がされるのだから不思議です。中には、同じ人が二度も三度も轉がされてゐます。

二

ところがこゝに、大學校の學生で藤原清成と云ふ青年がゐました。(その頃から大學校はありました)

清成は變な性質で、人が

「右だ。」と云へば、

「いや、左だ。」と云ひたがるし、人が、

「出来ない。」と云へば、

「ナニ出来る。」と云ふと、云つた性で、どつちかと

云ふと、あまり利口な方ではありませんでした。

この清成が、墓蛙の噂を聞くと、

「そりや成程、知らずに踏んで滑つて轉ぶと云ふの

は分るが、今日のやうにあすこには「人を倒す墓がある」と分つてゐながら倒されると云ふのはどうかしてゐる。それも一度倒されるのはこれは仕方がない。が、同じ人が二度も三度も倒されるなどとは聞いて呆れる。」

かう云つて嘲笑ひましたので、これを聞いた人達は、

「それでは一度君近衛の御門のところを通つて、倒されないとところを見せてくれ給へ。」

「いゝとも。」

すると、その翌日、用があつてこの清成君が御門の前を通る事になりました。成程、見ると、今日も墓先生往來へ這ひ出して、平たい足になつてちつとしてゐます。

「なア程、いかさまこれは墓ではなうて、石ぢやが、外の人は瞞せても、この清成は倒されぬぞ。――やつとな。」

一九

掛け聲をして、墓の上を、バツと飛び越えました。ところが、その拍子に、かぶつてゐた鳥帽子がホイと脱げて足許へ落ちました。

この頃の人は皆鳥帽子をかぶつてゐましたが、根が紗絹へ漆を塗つた軽いものですから、頭の上に載つてゐるかゝないか一寸分らない位軽い。そこで清成も、自分の頭から鳥帽子が落ちたのを知らずにゐました。知らずにゐて、墓を飛び越えて地面の上に足が附く拍子に、自分の鳥帽子を脊で踏まへてしまひました。それでもまだ氣が附かずに、墓を踏まへたものと早合點をして、

「おや、此しぶとい奴め。いつの間に脊の下に這つて来てゐたぞ。この手で人を倒すのだな。併しこの清成は駄目だぞ。今日こそお前の命は貰つたぞ。どうだ、これでもか。」と云ひながら、足を上げて踏みつけました。

ところが、鳥帽子にだつて心があります。そこが

なか／＼踏み潰せないものですから、
「聞いてゐたよりも強い奴ぢや。ごり／＼。」と體中の力を足に集めて踏み躪り踏み躪りしてゐると、丁度そこへ御門の中から右大臣がお下りになると、前驅が手に手に松明を持って行列を作つて出て來ました。昔は大臣のお通りの時には、道を明けなければなりませんでした。で、清成も片隅に寄つて膝を突いてゐました。

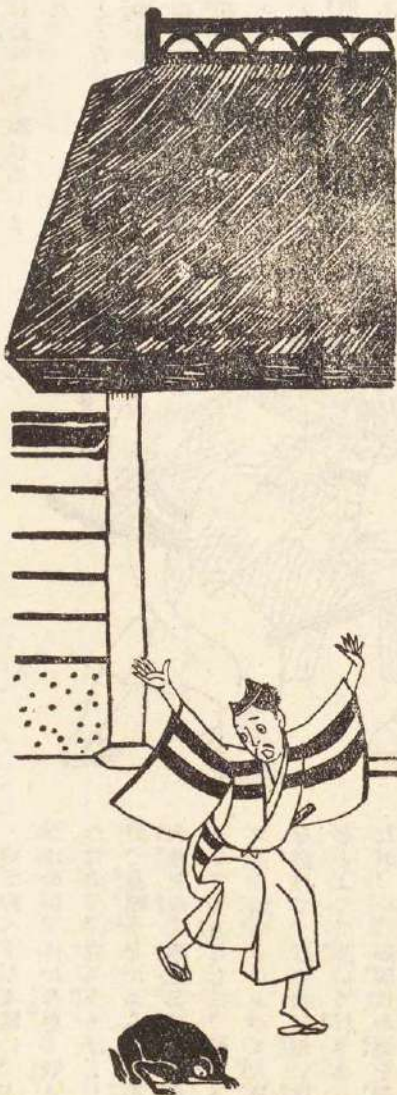
その姿を松明の光が、照し出しました。見ると、着物も亂れ、鳥帽子もかぶらぬ若者だつたので、怪しんで——と云ふのは、この頃の人は家にゐる時にも鳥帽子をかぶつてゐました。寝る時の外、鳥帽子を脱ぐ時はなかつたのです。ですから、鳥帽子をかぶらぬ人を見ると、今で云ふと、裸でゐる人を見る位驚いたものです。ですから、前驅共が清成を見て怪しんだのも無理はありません。怪しい奴と見て取つたので、聲も荒々しく、

「何者だ、何者だ。」と咎めました。

すると、清成はこの時だとばかり聲を張り上げて、
「大學生藤原清成、今この近衛の御門で、人を倒す

るか見てやれ見てやれ。」

大勢集つて来て、袖をつかまへて明るみへ引ッ張り出さうとしましたので、清成も出まいと争つてゐ



墓を物の見事に取つて抑へた勇士です。」と名告りを揚げました。

云ふ事がかしいので、
「とんだ面白い奴が飛び出した。どんな顔をしてゐ

るうちに、ビリ／＼と袖がちぎれてしまひました。はッと思つて前驅共が手を引く、清成も着物が見苦しくなつたので恥ぢて頭へ手をやつた拍子に、初めて鳥帽子のないのに氣が附きました。それでも、ま

だ自分が落したとは気が付きません。前驅共がからかつて持つて行つたものと思つたのでせう、早五六歩向うへ行つた前驅を追ひ掛けながら、
『悪作をせずと、烏帽子を返してくれ給へ。返してくれ給へ。』と駆け出しました。

ところが、この時は臺の事はもう忘れてしまつてゐました。二足三足追ひ掛けたと思ふとたんにツルリと臺を踏んだからたまりません。あつと云ふ間にバツタリ倒れたはずみに、鼻を打つて鼻血をタラタラと出しました
『アイタ、』と云つたまゝ、暫くは立ち上る事



も出来ませんでした。その暇に、行列は行つてしまひました。

三

袖で抑へてゐる間に、どうにかかうにか鼻血も収まつたので、立ち上りましたが、烏帽子をかぶらずに都大路を歩く事は出来ませんそこで仕方なしに、袖をスツボリ頭からかぶつて人目を避けて、なるたけ暗い道をとよつて歩いて行きました、いつの間にか道を間違へて、一度も來た事のな

『困つたな。鼻は痛いし草臥れたし、烏帽子はなし、着物はやぶけてゐるし、早く家へ歸つて休みたい。どう歸つたらいいのだらう。』

まご／＼してゐると、うしろから、

『もし／＼貴方はさつきから其處をウロ／＼してゐるが、どこへ行きなされるのかね』と聲をかけてくれた人がありました。

『僕はこれから烏丸へ歸らうと思ふのですが、道に迷つて困つてゐるんですよ。』

『ナニ烏丸ですつて？ そりや大變だ。こゝはもう羅生門の外ですよ。』



『エッあの羅生門の外？』
『見れば怪我もしてゐられる様子だが、可哀想にその草臥れた足取では、とても今夜中には烏丸までは歸れませんまい。人の困るのを見てはその儘打つちやつて置けないのが私の性質です。よござんす、私がおぶつて行つて上げませう。』

地獄で佛とはこの事です
清成は大層喜んで、この見

も知らぬ親切な人におぶつて行つて貰ふ事にしました。併し道々も、
『濟みませんね、濟みませんね。』と繰返し繰返しお禮を云ひましたが、その人はその都度、
『ナニ、私は力持でネ、右の手が三人力、左の手

が五人力ありますから、貴方一人位何でもありませんよ。」

と、云つてゐました。

そのうちに大きな門の下をくぐる時、

「これが羅生門ですよ。さあ、これを潜る。京都の街です。烏丸まではもう譯はありません。」

「さうですか。」

ところが、成程くぐつた門は羅生門に違ひありませんが、この二人は羅生門をくぐつて京都の街へ這入つたのではなくて、本當はあべこべに羅生門をくぐつて京都の街から寂しい郊外へ出てしまつたのでした。

それを背中の清成は知らないのです。

併し幾ら行つても賑かな街らしいところへは出ずに、だん／＼あたりが暗く寂しくなつて行つて、しまひには、森か林のやうな中へ這入つてしまひました。



清成はびつくりして、

「京都の中にこんな森がありましたかね、一體こゝはどこです。」

「こゝかね、こゝは蘇芳の森さ。」

「えッ、それちや羅生門の外ちやありませんか。」

「さうさ。」

「だつて貴方はさつきもう京都の街へ這入つたと云つたちやありませんか。」

「ありや嘘さ、嘘でも吐かないと、おとなしくお前が此處までおぶさつて來ないからね。」

「一體貴方は何者です。」

「まだ分らないかね。私しやア追剥だよ。」

「あッ、人殺しイ。」と、清成が背中から飛び降りて逃げようとするのを、バタリそこへ投げ倒して置いて、

「蘇芳の森で幾ら喚いたつて、誰に聞えるものか。それよりはおとなしく、お金と着物とをよこしてし

まへ。命まで取らうとはしないんだ。」

地面へ投げつけられただけで、清成はもうすつかり縮み上つてしまひましたが、その上にさつき「俺の右の手は二人力だ、左の手は五人力だ」と云つた追剥の言葉を思ひ出すと、恐くてたまりません。

追剥は、愚圖々々してはゐません。ブル／＼顔へてゐる清成の懐からお金を取つてしまふと、情容赦もなく着物まで剥ぎ取つて行つてしまひました。

後には下着一枚で、清成は夜の明けるまで森の中に泣いてゐましたが、朝になつてから、お百姓さんに助けられてやつとの事で家へ歸る事が出来ました

それ以來、この清成に、

「君は何が一番嫌ひだね?」

と聞くと、いつでもきつと、

「藝蛙!」

と、答へましたとさ。



小鳥は空に

加藤武雄

十

二六

義雄の手紙をうけとつた健吉は事務室の机に凭れて一心に新聞の雑報欄を覗きこんでゐる父の森田巡査に話しかけた。

「ねえ、お父様。義チャンがお池に陥つた子供を救つてそして自分も溺れたんですつて。それから永いこと病氣したんだけれど、もうすつかりよくなつた、と手紙をよこしましたよ。」

きつと驚くだらうと思つた父が返事もしないで新聞を見てゐるので健吉は不平だつた。

「お父さん。だから僕にも水泳のけいこをしると義チャンが云つて

よこしましたよ。」

さう云ひながら父の肩ぐしにのぞきこんだ。新聞には大きな寫眞版が挿入されてゐた。ふと眼にうつつた寫眞の人物は、健吉がかたときも忘れたことのない親友の義雄とその母の姿で、それは義雄達がまだ京都に居たころあの赤い瓦の家で、幾度も見た寫眞であつた。

「オヤッ、お父様。義チャンの寫眞がのつて居ますね。よその子供を助けた勇ましい話ものつてゐるのですか?」

森田巡査は愛兒の言葉には耳をかさなかつた。急いで、新聞を小さく折つてポケットとにねちこむと、板壁につるしてあつた佩剣をとつて、さつさとどつかに出掛けてしまつた。

それから、まもなく、庄助の仕事場へ森田巡査はあはたゞしく訪ねて來た。

「何ですかね、旦那。」

庄助は鋤を片手に、板切や鉤屑の中を飛びだして來た。

「實に大事件なんだが。」

森田巡査が顔色まで變へて居るので、殺人か強盗でもあつたのだらうと庄助は思つた。庄助は村の消防團の組頭をも勤めて居たので、これまで屢々森田巡査に力をかしたことがあつた。

「お前達は、しばらく何處かへ行つて遊んで來るんだ。」

庄助はさう云つて弟子達を遠ざけた。

「庄助さん。此の新聞の記事なんだがね。一體これは何うすれば可いのかね。何か君に可い智慧はないものかね。」

庄助は、その記事を熱心によんで居たが、よんで居るうちに顔の色が變つた。

「旦那。わけはありませんよ。私がこれから東京へ乗りこんで對手の女と子供を叩き斬つてしまひます

よ。」

「馬鹿なことを云ふものではない。其處ことをしなくても法律といふものがあつて、正しい方の味方をしてくれる。どんな邪魔者がとびだして来やうと、奥様や義チャンが負けになるさづかひはない。然しこれは結局裁判になるだらう。さうなると證據といふものが要だ。つまり君が東京へ行つて其の證人になつてはくれまいか。旅費は私が半分持つことにするから。」

「旦那。旅費の御心配は御無用です。私も大工はして居ても其れ位の錢は持て居ます。」

そんなわけで、鹿ヶ谷の大工谷口庄吉は其の夜の汽車で東京へ立つた。新聞には、はたして何處事件が報せられて居たであらう。

だが其の新聞の記事をよんで驚いたのは、鹿ヶ谷の駐在巡查森田平吉、大工谷口庄吉の二人だけではなかつた。線路丁夫の定吉は、もつともつと驚いた



三八

のだ。此の事件の關係者である岩村伯爵よりも、仙石執事よりも、信子夫人よりも、恐らく定吉の驚きは甚だしかつたに相違ない。線路丁夫の定吉。それは貧民窟の長屋で中風の老母と六人の子供をかへて正直に貧乏に暮して居た線路丁夫だ。會社の電車が子供を轢き殺したのを、正直に運轉手が悪いと證言して免職されて困つて居たのを信子夫人が引きとつて養つて居るその正直者の定吉である。

定吉は自分の眼を疑ふやうに一枚の新聞を見直した。四段抜の大標題で書かれた「伯爵家を狙ふ女天一坊」の記事に、挟まれた二ツの寫眞。その一ツは自分達一家が心から神の如く敬ふ信子夫人と義雄坊ちゃんとの姿である。そして別の一ツは確かに、死んだ兄の嫂であつた時子と長男の清一に相違ない。定吉は、病床の母親に其の新聞を見せた。

「ねえお母さん。確に時子と清一でせう。」

母は眼鏡をかけて、しばらく眺めて居たが、

「其れに相違はありません。それにしても何うして新聞に出て居るのかい？」

「ちよつと事情がこみいつて居ますがね。つまり義雄様のお父様は岩村伯爵家の三男で、長男の義朋様も次男の保之様も既にお亡くなりになつて居るのだ。その長男の義朋様が時子と同棲されたことがあるので、それを種に清一を伯爵家の世嗣だと云つて乗り込んで來たわけなんです。」

「では、時子と一緒に逃げた男と云ふのが此のお邸の長男様かい。」

それには斯うした事情があつた。定吉の兄は淺草の歌劇俳優であつた。妻の時子は美しい女優であつた。時子は、いつのまにか伯爵の長男に心を寄せ、生れたばかりの男の兒を抱いて戀人の許に走つた。定吉の兄は其れを知つたが、對手は伯爵の世嗣、自分には名もない歌劇俳優、何うすることもできないので、怨みをのんで自殺した。

清一は勿論定吉の兄の兄に相違ない原籍地の信州へ手紙を出して戸籍を取りよせて見ればわかることだつた。

定吉は信子夫人の室を訪ね、お美津に會つて事情を話した。

「まあ、さうなの！わたし此の間ちう何麼に心配して居たかも知れませんか。でも定吉さんのやうな確かな證人が出たり、それに戸籍をとりよせていただければ、裁判にも何にもなりはしませんねえ。では御苦勞でも仙石の旦那に話して下さいな。ちよつと待つてちやうだい。奥様のお耳に入れて來ますから。」

お美津はいそ／＼して居た。

信子夫人は、お美津から話をきいたけれど些とも嬉しさうにはしなかつた。そしてお美津に呼ばれて入つて來た定吉に、

いつしか梅も過ぎ、櫻の蕾がほころびさうに見へる。

母と兄とが始めて此別邸に着いた頃、まだフレイムの中に芽を出したばかりだつたヒヤシンスやアネモネも、今は花壇をかざつて咲きくづれて居た。

信子夫人は晨の祈禱を終つてから窓に倚つて、むかひヶ丘の本邸の愛兒の室のあたりを空しく眺めてゐた。

そのとき、遠い廊下の彼方に勇ましく輕快な足音が響いて來た。

「まあ、あの兒が訪ねて來たのですわ。こんなに早くから。」

たちまち義雄の姿が現はれた。

空色スコツチのスエーターを着て、小さな鞭をバチンと鳴らしたのは、多分馬を驅つて來たのであらう。

「お母さま、御機嫌よろしう。」

「子供の可愛いことは私だつて、その御婦人だつて同じことなんでせう。どつちが正しいか、どつちが伯爵家の系統であるか、それは神様より他に御存じのないことです。何にもかも神様におまかせして御心の儘にしてくださいのですよ。人間の智慧や力は決して使つてはなりません。」

定吉もお美津も頭をすらあげえなかつた。これが人間の言葉であらうか。

名譽や富を獲んために恐ろしい戦争をまでする人間の言葉であらうか。そしてこれが果して正しい思想であらうか。

定吉にもお美津にも不可解ではあつたが、それかと云つてかへす言葉はなかつた。

その翌朝のことだつた。

朝風は何事も知らず、さはやかに植込の稍を渡つた。

「まあ今朝は随分早いのですね。一體何うしたの。」
信子夫人は義雄の手を握つて、不思議さうにたづねた。

「まだ御飯前なんですもの。あのね、暗いうちに庄吉さんが京都から着いたのです。それで大騒ぎになつて、僕達まで御飯まへなのです。」

「まあ、兄が参りましたのですか。ねえ奥様やつぱり、あの新聞を見たからなのでせうね。」傍に居たお美津が、うれしさうに口を挟んだ。

「やあ大變だ。僕すつかり忘れて居ました。今朝は僕一人ではないのです。もう一人お母様のお客さまがあるのです。」

「わかつて居るわ。庄吉さんでせう。」

「いゝえちがひます。それは大變なお客様ですよ。」

そのとき、扉の外に重い足音がきこえた。

「義雄、何うだね。お母様は僕に逢つて下さると仰言るかの？」



それは、老伯爵の聲であつた。
右脚を引きつゝて、春が来たのに厚い毛皮のチョッキをつけた老紳士が、もう其の室内にゆつたりと現はれて居た。
夫人は手早く椅子をすゝめたが、老伯はそれにはか

「あんたが信子さんか、僕は義雄の祖父の義興だ。」
老伯は信子夫人の挨拶を受けて、何か落ちつかぬやうに室内を往つたり來たりしたが、やがて窓際に立ちどまつて、

「あの匂は何かな。」

「あれは沈丁花でございます。もうすつかり春がまかりました。」

信子夫人は心から老伯の訪問を悦んで、微笑みながら答へた。

老伯は今更のやうに樹々の梢を見た。エメラルド色の梢には小鳥の群ゑ囀つてゐる。

「今度は思ひもかけぬ事件で、あんたもさぞ心配だらう。」

「御前様。あの御婦人が御息を愛まれる御心も、私が義雄を愛する心も、ちつとも相違はないと存じます。だれでも吾が兄の幸福を思はぬ者は御座いません。」

老伯は、また暫く沈黙して室内を歩いた。その後に口を開いて云つた。

「僕を呼ぶのに御前様はいけない。これからお父様と呼んでもらひたい。そして此の室は何うだね。あんなの氣に入つたかね。」

「勿體ないことで御座います。こんな美しい静かなお室をいたゞかうなんて考へたこともありませんでしたもの。」

「そうか、それで僕も満足ぢや。いや此の室は僕にも氣に入つた。これからとき／＼訪ねますよ。」

老伯は扉の外に出た。そして再び振り返つて云つた。

「義雄は、まだ朝飯前だ。久し振りでお母様のテーブルで食べさせて下さい。」

かう云つて、重い脚を引きづりながら、振り返りもせず廊下の方に急いだ。

玄關に送つた信子夫人の眼には、涙がいつぱいだった。(つゞく)

舞踊 童謡

つまらない

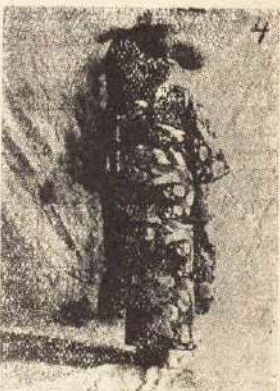
振付 林 きむ子 作 謡 野口 雨情

表現 本居 喜美子 作曲 本居 長世



(1) 『ふくろふが啼くから』

袂の先の尖った所が懐中になるやうに、
肘方を持つて圓のやうに頭より稍、先に
出る位にし、下からすぐふやうに、初め
に右足を入れるやうにして右方を見、
次に左足を同様にして左の方を見る。



(2) 『夜になるホーホーホー』

三度目の右足の時に、正面に少し出る
氣味にして、左足を後にあげる、ホー
ホーホーと同じ手振り、右左又右
左と四度に見ながら、右方に一とま
わりする。

(3) 『電氣が』

真直に立つて左方の上を見る。

(4) 『暗くて』

斜に見まわすやうな心もちで、右の方の
下を見る。

(5) 『つまらない』

圓のやうな形で、三度に少しからだを振
る。





(6) 『御本をよむにも』

はじめ左方に、次に右方にすかし見るやうにうかがす。



(7) 『よめない』

本をとづる心もちで圖のやうにする。
間奏の間は、兩方の袂をもつて一寸からだを振るやうにしながら、ぶら／＼と一とまわりする。



(こと) 拍子に合ふやうに氣を付けて

(8) 『ふくろふは暗くも目が見える、ホーホーホー』

ふくろふの所は前節と同じ目が見えるで圖のやうに正面で右足をふみ、左足を



(9) 『わたしは暗くちや』

胸に手を置きながら、すわる。



(10) 『目が見えぬ』

右手から次に左手とかへて、外へ大きく半月形に目をなでる。

(11) 『お針も』

めどろ通すやうに二度繰りかへす。

(12) 『出来ない』

急に兩手を圖のやうにひざに下ろす。

(13) 『つまらない』

くるりと向きをかへて、ひざをふかくすわりかへる。

討たぬ敵

((篇後記中道ん さ 助目出))

川 霜 島 三



近江國の天津の、つい近所——膳所のお城は梅のやうに美しい、そして名高いお城でした。この城の殿様は、ある時、出目助といふ子どもの馬子がお祖母さんに幸行なことをお聞きになりました。御養美を下されようと、お城へお出しになりました。そして、出目助の馬子をお聞きになりました。

出目助は、生れついて、すぐに馬子唄が上手で、それが評判でした。また、馬が大好きでした。それで、殿様にお願して、馬子唄の御養美に、昔、殿様の乗馬だった駿の馬を譲り、これに「こん」といふ名をつけてみました。

出目助は、「こん」を大事にして、毎日、軽い荷をつけて、駄賃を稼いで居りました。そして、毎日々々、上等の飼料をたべさせて居りました。

出目助は「みなしこ」でした。阿父さんも、やつぱり馬子でしたが、出目助の稚い時分に、東海道の日川といふところの敵

のなかで、何者かに殺されました。殺したのは何者ですか——とにかく、出目助には「親の替」がございました。

ある時、西國の大名無樂家のお姫様——その年十四のお姫様が、大勢のお供の行列を揃へて、江戸へお下りになりました。その途中、天津の宿で、出目助の馬子唄をお聞きになつて、たいそう、それが、お氣に召しました。そして、それから江戸までお供をすることにしまして、水口といふ宿に泊つた其の晩、烏天狗のやうな黒装束に覆面の同勢が、凡そ五六百人、水口の宿を八方から取巻いて火をかけて、お姫様を奪取らうと致しました。お供の衆も皆殺

——恐ろしい騒動が起りました。ちよつとお断りして置きますが「本陣」といふのは、大名や身分のある武士の泊る、格式のある宿屋のことでございます。

「焼ける、焼ける、すてきに焼ける。」

「水口の宿ぢうが、スツカリ火になつて了つて、どこまで焼けるのか解らないほどに焼きました。」

火の紛は、向ふの村から向ふの村へと、村々までも、おツかおせてグツと向ふの、遠くの山の彼方まで飛んで行きました。さうして、空にも大火事があるやうに、涯が知れないほどに空が眞ッ紅になつてゐました。

「恐ろしい火事だな。」

「まったく不思議な火事だよ。」

「一體、こりや何うしたといふのだな。」

「大方、天魔の業だらうよ。」

「何んにしても、凡事ではないなア。」

命から、火のなかを逃出し

た水口の宿の人等は、あつちに一とかたまり、こつちに一とかたまり、思々に避難場を見つけて、お互に、そんなことを云合ッては、ガタ／＼慄へてゐました。そして誰も彼も、ボンヤリ、氣の抜けたやうになつてゐました。

「何んでも、この火事は、三所から一ツ時に出たといふことだ。」

「いや／＼、三所どころじやない」とよ。八ヶ所も九ヶ所も……さう／＼、おれが聞いたのでは、坂の下の方から、大きな火の車が飛んで来て、一ツち先きにお城へ入つたとよ。」

「さうだ／＼。それから問屋場へも飛込むだによ。それから下宿の厩にも……つまり、この三所が

眞ッ先きだったな。それから棒ばなの茶屋へも、穀屋へも。」

「待て／＼……まだ／＼其の前にどえらい騒動があつたのだとよ。あの本陣へ、烏天狗のやうな衆が大勢斬込むで、あすこに泊つてござる西國大名の御家衆と、えらい斬合があつたのだと。」

「すると、この火事も、その天狗のした業かな。」

「さうだ／＼。おれは、現在見たのだが、黒装束をした其の烏天狗のやうな奴は、何ん百人……いやいや、何ん千人ゐたか知れないぞ。皆、兩刀帶して拔身を持つてな。」

「一體、こりや何うなるのだ。」

かうしてめい／＼が、いろ／＼なことを云合ッて、途方に暮れて

居りました。その中には、氣が狂つたやうになつてゐる者もありました。そこへ、出目助さんが、びよん／＼剣上がらうとする「ごん」を押しづめながら、手綱を「ごん」の口のところまで、しつかと持つてそして、自分の顔を、「ごん」の長い顔に、おツつけるやうにして、ひよ／＼くり／＼、やつて來ました。

「好かつたなア、ごん。眞ンとに運が好かつたぞ。もう少し、おいちが遅いと、汝も、焼死んで了つたかも知れないな。もう、大丈夫だ。こゝまで來れア、もう、大丈夫だぞ。」

出目助さんは、さう云つては、「ごん」の鼻づらを撫で、遣りました。

この明方、水口の宿で、火に取圍まれて焼死んだ馬が、何ん頭あつたことでしょう。なかには繋いだ綱を引ッ扯斷ッて、火のなかを狂廻ッてゐる裸馬もありました。まづたく、出目助さんの云ふ通り出目助さんが、もう一と足、遅かつたならば、「ごん」も、他の馬のやうに、煙に咽び、火に卷込まれて、焼死んで了ふところでした。

「ごんよ、おいらは命懸だつたぞもう可い、もう大丈夫だ……さア、落ちつくのだ。これ、落付けといふことよ。」

と、出目助さんは、ハア／＼息を切りながら、何ん度となく「ごん」に、さう云つて聞かせました。そして、そこに、サラ／＼と音を

立て、流れてゐる奇麗な小流へ、「ごん」を引入れて、水を飲ませました。「ごん」は、人ならば、さも喉が渇ききつてゐたやうに、ガブ／＼水を飲むで、それで、いくらか吻ツとしたやうに、ぶるツ、ぶるツと鼻を鳴らして、だいぶ、おとなしくなりました。

丁ど、その時でした。そこらに、ウロ／＼してゐる水口の宿の者が「それじや、この火事も、本陣へ斬込むだといふ、その烏天狗の衆の爲業だな。」

と、云つてゐるのが、ふツと、出目助さんの耳へ入りました。

「や、しまつた！」

と、出目助さんは、どきりツとして、まるで、頭から冷水を浴せ

かけられたやうな思ひしたのでした。

「忘れてゐた、忘れてゐた。すっかり、忘れてゐた。」

と、きよ／＼として、夢中で、「ごん」の手綱を引ッ張りました。

——出目助さんは、その時まで、

「ごん」の方へのみ心を奪られて、本陣に隠して來たお姫様のことをすっかり、忘れて了つてゐたのでございました。

二

「さア、大變だぞ。お姫様が焼けて了つたかも知れない。あの、長持のなかで。」

出目助さんは、下宿の方に火の手の上がったのを見ると、お姫様

を長持のなかに隠して、ていねいに錠までもおろして、そこから駆出したのでした。もちろん、その時は、本陣にはまだ、焚火のやうな火影さへも見えませんでした。で、すっかり安心して、「ごん」の方へ駆けつけたのですが……
 「ア、とんだことをしてッた。もう本陣にも火がついてゐる……とても助りッことはない。お可哀さうなことをしてッた。」
 出目助さんは、まるで自分が、お姫様を殺してッたやうに思ひました。さうして、せめて、本陣まで行ッて、様子を見届けて来ようとした。

「さうだ。あの長持のなかにお隠し申したことは、誰も知らないのだ。もし、焼死ンだら、お姫様が何うなされたのか、誰にも解らなくなッてッふ。こりや、かうしては居られないぞ。」
 丁ど都合の好いことには、すぐ其の傍のところに、小さな森が、こんもりとしてゐました。
 「あすこなら大丈夫だ。誰にも氣がつくまいし、静だし。」
 出目助さんは、さう思ッて、急いで、その森のなかへ、「ごん」を引入れて行きました。思ッた通り森のなかは静で、「ごん」を落ちつかせて置くには好いところでした。で、奥の方へ入ッて行ッて、一本の樹へ、手綱を短くして、「ごん」を繋ぎました。そして、水口の方を目がけて、「さんに」駆出した。

「馬のやうに、長い脚が欲しいなア。」
 それは、すゐん、一生懸命に駆けました。背を丸くして、足を宙に飛ばした。息の續く限り駆けたのですが、それでも出目助さんは、驚のやうに、のろまな足だと思ひました。さうして、二度ほど躓いて、轉びさうになりました。
 「駆けろ、駆けろ、ウンと駆けろ。馬のやうに駆けろ。」
 と、出目助さんは、自分に拍子を取ッて、勢をつけた。が、矢張、思ふやうに走れない——ジリ／＼して、「心」ばかりが先きへ飛ンで、足は、残念にも、驚のやうでした。



出目助さんは、そんなことも考へました。さうして、だん／＼息が切れて来ました。田圃道を突ツきッて、近道をしても、本陣までは、まだ／＼六七町も離れてゐました。

と、そこに、「ごん」のやうに、火のなか／＼、助出されたらしい裸馬が、一頭、これも樹につながれてゐました。馬方は居ませんでした。

「こいつア、うまいぞ。こいつに乗ッてやれ。」

出目助さんは、すぐに然う思ひつきました。そして、ハア／＼息を切りながら、馬のそこへ近よッて、手綱を引ツきるやうに、ほどいて、ヒラリと、飛つくやうに、

その馬の背に乗りました——鎧がなくても、手綱がなくても、出目助さんには、どんな馬でも自由自在に乗りこなすほどの不思議な、「技」がありました。で、馬の背に跨ると前こどもになつて、ぐいと一ツ、前へ押出すやうにして、手綱のはしで、ビシリと、馬の尻を引ッばたきました。馬はたじ／＼と後ずさりする……そして、三度ほど、びよん、びよん、勿上がつたと思ふと、後足で、すつくと立ちました。

と、前の方へ泳ぎ出すやうにして、やがて、四ツの足を揃へて、飛ぶやうに、まっしぐらに駆出しました。そして、出目助さんは、ビシリ、ビシリ、馬の尻を引ッばたき續ける、馬は、さつと、鬣を流すやうにして、飛んで行きました。

だん／＼本陣に近くなりますと顔や脛へ當る風が、氣味の悪いほどに熱くなつて来ました。馬の上から見ますと、もく／＼した煙と紅炎とのなかに、まだ本陣の屋根が、黒くなつて見えてゐました。

「うまいぞ。まだ焼落ちないッ。」

出目助さんは、その胸に、一と筋の光が射込むやうに、吻ツとしました。

とたんに「こら、待て。小僧ッ」と、恐ろしい聲が、出目助さんの頭のすてツべんに、ぐわんと、響いて来ました。同時に、黒装束の怪しい奴が、廿人ほども、バラバラと、行方に現はれました。

「さア、大變だ。」

出目助さんは、びっくりして、危く馬から落ちさうになりました。

三

「こら、何處へ行く。」

と、黒装束の烏天狗どもは、出目助さんを取巻いて了ひました。

「へい……。」

「あツちへ行ッては、危ないではないか。」

「へい……。」

と、出目助さんは、ヤツと馬を乗りしづめて、すなほに、そこに停りました。

「下りろ、下りろ。」

と、黒装束の一人が、けんどんな尖聲で云ひました。

「へい……。」とは、云ひましたが、

出目助さんは、いッそ、馬の蹄にかけて、蹴ちらして、逃げて遣らうかとも思ひました。しかし、何に云ふにも、相手は、夜叉、惡鬼のやうに恐ろしい奴どもです。「も！間違ッたら、首が飛んで了ふ」と、思ッて、愚圖々々しました。

「下りないか、こらッ。」

黒装束の一人が、また怒鳴りま

した。

「それでも、おいらア、これからお祖母さんを探しに行くのだよ。」

と、出目助さんは、落ちついて云ひました。

「ナニ、祖母さんを探しに行く？

……何處へ行くのだ。」

「あすこさ、あの本陣のところさ。おいらの家は、あの本陣の後の方なんだよ。お祖母さんは、目が見えないもんだから、この大火事を知らないでゐるんだよ。」

と、まるで、友達にでも話さうに、無難作に云ひました——これを、誰が、嘘だと思ひましょう。

「何んだ？ 盲目の祖母さんが、あの火のなかに居ると云ふのか。」

「へい…… それにネ、年を老ツて

足が立たないのだよ。だからサ、きつと、まだ火のなかでマゴくしてゐると思ふよ。」

「馬鹿を云へ。いかに目が見えぬと云ふて、あの火のなかに、マゴくして居るものか。誰か、連れて逃げたに違ない。」

「駄目だよ。誰も、連れて逃げてくれる者なぞ無いんだよ。誰も祖母さんのことを知らないのだからネ……うツちやつて置いたら、焼死んで了ふよ。」

「だがナ、あの火のなかへ入って行くと、貴様が焼死んで了ふぞ。」

出目助さんは、ちよつと考へました。そして、キツバリと云ひました『そりや、焼死んでも爲方がないよ。おいらの他に、誰も助け

に行く者が無いのだから、うツちやつて置けないのだよ。』

「もし、祖母さんがもう、焼死んで了つてゐたら、何うする。」

「それア、運賦天賦だよ。おいらア、やるとこまで、やるのだよ。」

と、出目助さんは、いさぎよく云ひました。

「一體、貴様、どっちから來た。」

「おいらかえ……」と、出目助さんは、へどもどして『おいらは、何にさ、石部の方へ行つてゐたんだがネ……』

「石部の方から參つたのか。」

「然うだよ。」

「では、若も、大名のお姫様のやうなお方を見はしなかつたか。」

「大名のお姫様ツて、そりや何ん

だえ。」

と、出目助さんは、うまく、恍惚しました。

「ム、然うだナ。丁ど、芝居のお姫様のやうに、お美しい方だ。」

「ア、然うか。見たよ。」

「見たか。」

と、大勢の黒装束の奴どもが、聲を揃へて、ガヤ／＼云ひました。

「ム、見たく。おいらが、こつちへ来る途中でネ、大勢のお侍様が、そのお姫様のやうな人をおぶつて、石部の方へ行つたよ。」

「ム、行つたか。」

「ア、行つたよ。」

「たしかに行つたか。」

「ム、たしかに行つたよ。」

「さてこそ逃げたか。」



と、黒装束の奴どもは、互に顔を見合はせて、さもなく、ガツかりした様子でした。

「猶豫はならん！ それッ。」

と、頭立った一人は、何にやら指圖をしました。そして、ビ、ビと呼ぶ笛を吹鳴りました。

その隙を見て、出目助さんは、兩の踵で、馬の太腹を、ぼんと蹴つて、手綱のはしで、びしりと、尻を引っぱたきました。馬は、前足を上げて、躍上すると其のまゝ、さつと駆出しました。と、同時にあつちからも、こつちからも、黒装束の奴どもが、ひよつくり、ひよつくり、蟻が、蟻の穴から出て来るやうに、ゾロ／＼、ゾロ／＼、現はれて來ました——その、すば

らしい頭敷、烏天狗のやうな怪しい姿が、眞ッ黒に火影に浮上がつて、まるで大戦争でも始まるやうな有様でした。

『凄いなア!』と、出目助さんはチラと、振向いて見て、さう思ひました。そして、「こりや、うっかりしたことは出来ないぞ。あいつ等が、あんなに頑張つてゐちや、お姫様を助出しても、何んにもならないぞ。』

と、考へました。するうちに、火が近くなつて、もう馬に乗つてゐることが出来なくなりました。火勢に怖れて、馬は、切りに狂ひ出しました。

四

出目助さんは、馬から飛下りると、ズン／＼火のなかへ入つて行きました——いえ、火のなかではありません。恰も火のなかへ入つて行くやうに、炎々と燃えさかつてゐる宿の家並へ駆込むで行つたのでした。

火の紛が、バラ／＼、バラ／＼と飛んで来る。大きなやつは、火の玉のやうになつて落ちて来る。ばら／＼と恐ろしい音を立て、柱や梁が、眞ッ紅になつて燃えてゐる。ぐわら／＼、ぐわら／＼と、屋根や庇が焼くづれては、焼落ちる。火炎が狂ふ、煙が渦巻く。そして、人を撲倒すやうに、熱い／＼風が吹きまくる。

出目助さんは、そこへ駆込むま

四八

でに、急々と——しかし、充分に落ちついて、支度をしました。まづ、破席の捨てゝゝあつたのを拾取ると、今度は、古草鞋を片一方、古草履を片一方、見つけて、それを穿いて、しつかり足にくゝりつけました。それから、井川へ、ザブリと入つて、體ちふを水に浸して、つぶ濡になりました。さうして、破席も水に浸して、雫のたれるのを、すつぱり、頭からかぶりしました。

『かうすれア、大丈夫だ。いくら熱くつたつて、やけどさへしなけア可いや。』

出目助さんは、さう考へました。振向いて見ると、乗捨てた馬が、一町ほど先きのところを、暴れ狂

つて、飛んで行くのが、見えませんでした。そこらは、不思議にヒツソリとして、只、ごう／＼と、火の燃える響が、物凄く聞えるだけで後にも先きにも、人の影も見えませんでした。

出目助さんは、火の手の弱いところを擇つて、裏手の方から廻り廻つて、やつと、本陣の前の街道筋まで出て來ました。向ふの家も焼けてゐる、隣の家も焼けてゐる、そのまた隣の家も焼けてゐる、さうして、本陣の大屋根も、もう棟木までが燃出して、今にも焼落ちさうになつてゐました。それでも、玄關の方はまだ、屋根裏から眞ッ黒な煙を噴出し、紅い炎が、チロ／＼してゐる位のことでした。

『まだ、長持は焼けてゐないぞ。』

出目助さんは、さう思つて、吻ツとしました。が、そこまで來ると、顔も手も、まるで焙られるやうに、ヒリ／＼して、煙で息が塞る、眼が眩むで、ぐら／＼する。いくら／＼もう、少しだ。行けないことがあるものか。お姫様を助けるのだ、人の命を助けるのだぞ。へこたれるな。』

と、一生懸命に踏張つて見ても息が苦しくなるばかりでした。そして、だん／＼「心」が何處へか飛んで行くやうに、フラ／＼、フラ／＼して來て、そこへ、倒れて了ひさうになりました。

『ア、もう駄目だ!……』
出目助さんは、いくら跪いても

もう一足も、踏出すことが出来なくなりました。さうして、よろ／＼穴にでも踏込むやうに、がツくりと、前に踏み出した……『おや!』と、思つた時には、出目助さんはもう、横倒しに倒れてゐました。と、氣がつくと、好い心もちに、體ちふが、ヒヤリとするやうに感じました。

出目助さんは、本陣の前を流れてゐる井川に落ち込むのでした。火の紛が雨のやうに降りそいで、火の玉が飛込むでも、この小さな流れは、いつものやうに、ちよろ／＼と、静かな音を立て、流れてゐました。出目助さんは、頭から、つぶ濡になりましたが、それ

が幸でした。流へ落ちたと氣のついた時には、氣もせい／＼として來れば、息も樂になりました。出目助さんは、二口三口、流を掬って飲みました。そして、今度は、わざと、犬のやうに四ツン這になつて進みました。本陣の店の方はもう、火炎が渦巻いてゐました。玄關前には、黒装束の奴どもに斬倒された侍の死骸が、幾ツも幾ツも氣味悪く轉つてゐました。出目助さんは、その死骸を飛越え乗越えて、玄關へ飛込みました。さうして、長持のあるところを目がけて、がむしやりに躍込むで行きました。

煙落ちる、襖、障子が火になつてゐる、本陣の大きな家は、まるで「火の御殿」のやうでした。長持のあるところへも、もう火が廻りかけて、その天床の隅からも、もく／＼と煙が噴出す、その煙にからまつて、炎のさが、蛇の舌のやうに、チロ／＼、チロ／＼と閃いてゐました。こゝにも、斬倒された侍や腰元の死骸が、淋しく横つてゐましたが、それでも長持だけはまだそっくりしてゐた。出目助さんは、長持に飛ついていきなり、蓋をあげようとして、たが、可けない！長持には錠がおりてゐた。そして、もちろん、出目助さんは、その鍵を持つてゐませんでした。

五〇
出目助さんは、ハツと當惑して困つて了ひました。そして、まづたく夢中で、落ちてゐる刀を取上げると、滅茶苦茶に錠をたき破しました。火の紛が、ハラ／＼、ハラ／＼と長持の上へも落ちて來ました。長持のなかには、ヒイ、ヒイと、蟲の啼くほどの、悲しい泣聲がしてゐました。出目助さんは、眼が眩むで、息も塞がりさうになりましたが、それでも、やつと、錠が破れて、長持の蓋があきました。お姫様は、まだ猿轡をされたまゝで、狂人のやうになつて、出目助さんに取りつきました。出目助さんは、破席をお姫様の頭から被せると其のまゝ、その手を肩にかけて、二人は轉るやうに、玄關の方へ出て行きました。(つづく)

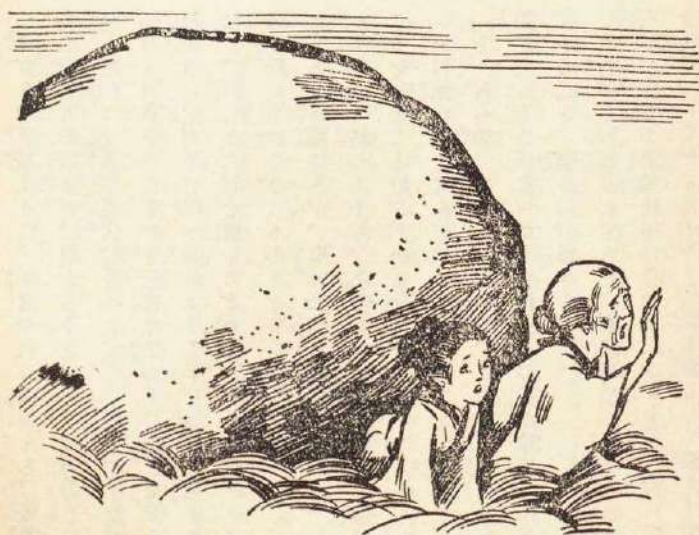
原の一家

伊藤元吉

三吉は疲れた足を引すりながら、毎日知らぬ國々を歩いてゐたのです。

三吉の父は、ちよつとしたことから友達と口論して、腹立ち紛れにその友達を刀で斬り殺しました。そして三吉や母を置きざりにしたまゝ、何處かへ隠れて了つたのです。

後に残された三吉と母とは、父を尋ねて國々を廻つてゐましたが、ある日、母は旅の疲れと、長々の心配で、とう／＼知らぬ土地で亡くなつて了ひました。で、一人ぼつちになつた三吉は、淋しい思をし



ながら、矢張り當途もない一人旅を續けてゐたのでした。

三吉は今日も疲れた足を引すり／＼、夕暮近く廣い原へと差しかりました。その原は薄や蒼などが一面に生ひ繁つてゐる上に、何處を見ても家らしいものと云つては、一つもない淋しいところで、それにもう落ちるに間もない飴色の夕陽が、薄の穂先に鈍く照つて、何となく冷たい氣味悪い空氣が流れてをりました。けれども三吉は、この原一つ越せば向ふには今宵泊まる町もあるだらうと思つて、その原の一本道を辿つてゆきました。

やがて原の真中程まで來かゝると、何處からともなく、人の呻き聲が聞えてまゐりました。三吉は吃驚してその呻き聲のする方へ眼をやると、薄の一面繁つてゐる窪みの影から力のない聲で、
『もし／＼坊つちやん。どうぞ救けて下さいませ。』と云ふものがあるのです。

きました。

三吉は餘りの不思議に、暫くぼんやりとしてゐま



したが、やがて氣がついて、
『さあ、お二人さん、お立ちなさい。どこもお怪我

見ると、可哀さうに、年老つたお婆さんと、可愛らしい一人の娘とが、腰から下を、大きな石の下にひしがれて、今にも潰れさうになつてゐるのでした。
『あ、可哀さうに！』と三吉は思つて、急ぎ足でその大石に近づき、取り除けようと手を掛けて見ましたが、何しろ六七十貫もある大石のことですから、仲々除けられさうにもありませんでした。

するとお婆さんが、唖れた聲で云ふのには、
『もし／＼坊つちやん。あなたは今迄に一度も悪いことをしたことがございませんか。』

『私は悪いことなんて、一度もしたことがないよ。』
『そんなら坊つちやんの両手で、この石の周りを三遍撫で、下さいな。さうすればこの石は除けられますから。』と、婆さんが頼みました。

三吉がその通りにすると、不思議なことにその大石は、まるで電氣仕掛けのやうにポツカリと宙に浮き上つて、やがて霧のやうに影も形もなく消えてゆ

はありませんでしたか。』と、尋ねました。

するとその婆さんは、急にシヤンと立ち上つて、俄かに恐ろしい聲になつて、
『えゝッ！ 喧ましい！ この智慧なし小僧の馬鹿野郎め！』と咆鳴りつけました。そして、

『この原へ知つて來たのか、知らずに來たのか。ここは安達ヶ原と云ふ恐ろしい原だ。この原へ迷ひ込んだが最後、どんなに泣いたつて、生きて歸れつこないのだ。妾はこの原の鬼婆だ。先刻は坊主を一人見つけて、こりや好い獲物だと早速殺しにかゝつたら、その坊主のからだから、碌でもない御光が射して、妾の魔法は役立たなくなつた上に、これ見ろ、こんなに甚い目に遭はしをつたのだ。……その腹癢せに、これからお前を料理してやるからさう思へ。』と云つて、ブル／＼と身一つ震はすと、見るも恐ろしい鬼の姿に變りました。

三吉は大變に驚いて、

「お婆さんそれは餘りです。どうぞお許し下さい。」と頼みました。けれども鬼婆は、

「お許しも糞もあつたものか。」と物凄しい形相をして今にも一掴みにしさうな有様でした。すると今迄黙つて傍にゐた娘が、矢庭にその鬼婆さんの袖にすがりついて、

「おつ母さん、いけないく。いくら何でもそれだけはいけない。」と、叫びました。

「どうしていけないのだ。」

「だって、私達を救けて呉れた人を殺すなんて、そりや餘りだよ。」

「馬鹿！そんなやさしいことを云つては、生きて行けるか。」

「何と云つてもそれはいけないよ。それではこの子が可哀さうだよ。もしどうしても殺すのなら、妾も死んで了ふからい——。」

娘が我がことのやうに鬼婆さんの前にすがつて止

めるので、流石の鬼婆さんも、それを無理にとも云へないので、不承々々に我慢して、

「ほんとにお前は、きゝ分けのない子だね。折角今夜は旨い御馳走にありついたと思つたのに。」と云つて「併し、只では救けられぬ。兎に角今夜はその子を家へ連れておいで。好いかい、もし逃がしたらそれこそお前も承知しないぞ。」と言葉を残して、その儘そこを立去りました。

鬼婆さんが往つて了つたあとで、娘は、餘りの恐ろしさに物も云へないで泣いてゐる三吉の肩に手をかけて、

「心配したでせう。だけど最ういゝのよ。妾がついてゐるから大丈夫よ。さあ涙を拭いて……ね！ね！……男の子は泣くもんぢやないわよ。」と優しく撫めて呉れました。

三吉は漸く涙を拭いて、どんなに恐ろしいことに遭遇つても、それは辛棒するけれど、私は父を探さ

ねばならない身だから、どうか此處から逃がして呉れるやうにと頼みました。娘はそれを聞くと、大變に同情して、

「まあ可哀さうね。」

「だけど坊つちやん。」

「今逃げちや却つてお

つ母さんが腹を立て

るから、もう暫く我慢

してらつしやい。

その中に妾が、屹度

うまく逃がしてあげ

るから。」と云ひまし

た。



と云ふ離れ小島がある。そこに住む狐の王様が、毎年猪を二匹と白鷺を三羽とを貢物として持つて来るのだが、どうしたものか今年はまだ届けて来ない。

だからお前はその島へ行つて、それだけのものを明日中に受取つて来い。もし明日中に持つて歸らなかつたときには、立ちどころにお前を喰ひ殺す。

そして途中で逃げられないやうにと云つて、三吉の足に魔法の鐵輪を嵌めました。この鐵輪を嵌められると、いくら逃げようと焦つても、逃げられないのです。

三吉は鬼界ヶ島と云へば、名こそ聞いてはゐたが、何處にあるかも知らないし、その上五十里あるか百里あるか、何にしても海一つ隔てた離れ小島を、一日に往復する

その夜、三吉は、鬼婆さんからこんな難題を吹きかけられました。

——これからすつと、南の方へ行くと、鬼界ヶ島

なんて云ふことは、とても思ひもよらないことだと思つたのですが、一度云ひ出したら、何と云つてもきゝさうにない鬼婆さんの顔を見ると、厭だと云つて斷ることは出来ないでした。

明る朝早く、三吉が起き上ると、枕元に一枚の檜の葉と、一本の松葉とそして小さな袋とが置いてありました。三吉は不思議に思つて、それを取り上げてゐるところへ、娘がやつて来て、

『この原を出たら、檜の葉を二度振つて、その上にお乗りなさい。そうすれば鬼界ヶ島まで目を閉ちてゐても行きます。貢物はその袋へ詰めれば好いのです。それから途中もし危いことに遭つたら、松葉を太陽に向けて、下れ下れと二度お稱へすれば好いのです。』と教へて呉れました。

三吉はお禮を云つて、やがて原に出ると、娘に教へられた通りに、二度檜の葉を振つてその上に乗りました。するとどうでせう。忽ち檜の葉の兩側から

驚の翼のやうな大きい羽が生えて、ハタ／＼と三度風を切つたかと思ふと、そのまゝフワリと地を離れて、空高く西へ／＼と飛んで行くのでした。下を見ると、野も林も山も川もまるで箱庭のやうに、小さくどん／＼後へ消えて行きます。どこを見ても限りない大空の真中を、三吉を乗せた檜の葉は、大鵬のやうに飛んで行きました。そして、瞬く間に陸地をかけきつて、やがて青々とした海原にさしかゝりました。海原は目も覺めるやうな紺青色を湛えて、その波頭の一つ／＼に陽の光がキラ／＼と砂金のやうに輝いてをりました。餘りの麗しさに、三吉が暫く見惚れてゐると、やがて何處からともなく一羽の大鷲がやつて来て、三吉の乗つてゐる檜の葉を一突き突きました。

おそろしい勢で突かれたものですから、あつと思ふ間に檜の葉は眞倒様になつて、下へ下へと落ちて行くのです。餘り突嗟のことに、三吉は非常に面喰



ひましたが、思ひ出したのはあの松葉のことです。早速取り出して、太陽の出で居る方をさがしましたが、何しろ倒しまになつてゐたので、思はず知らず海に映つてゐる太陽に向つて『下れ下れ』と二度云ひました。

すると今迄恐ろしい勢で落ちてゐた檜の葉は急にビタリと止まつて、妙なことには、倒しまになつたまゝ進んで行くのです。それでも、もう落ちる心配はないので、漸く氣の落ち付いた三吉は、今度はほんたうの太陽に向つて『下れ／＼』と云ひました。すると檜の葉は、又元通り水平になつて進んで行くのでした。

やがて、遙か向ふの海原の中に、ボツリと黒い鳥影が現はれました。それは紛れもない鬼界ヶ島だつたのです。

三吉はその島につくと、すぐ狐の王様に會つて、鬼婆さんの言葉傳へ、三羽の白鷺と二頭の猪とを

貰ひ受け、それを袋に詰めました。するとその小さな袋は不思議なことに、それだけのものが、こつそりと入つて了つて、それでゐて少しも重くならないのです。

漸く、色々の恐しい思ひをしながら、三吉はそれでも、その日の暮れ近く歸ることが出来ました。そして原まで來ると、袋の中から貰つて來たものを取り出して、縄で縛り、さも／＼重さうに、エツサラオツサラ引きすつて歸りました。

鬼婆さんは、とても三吉の奴、そんなに早く歸れるものかと、たかをくくつてゐたところへ、突然三吉が歸つて來たのですから、大變驚いて、暫くは不思議さうに三吉を見てゐるのです。併しちやんと云ひ付けたものは、持ち歸つて來てゐるので、いくらか機嫌を直して、

『御苦勞』と只一言云つたきりで、別にあの足の鐵輪を取り外して呉れさうもありません。三吉は、大

變失望して、

『お約束通りどうぞ歸らして下さい。』と頼みました併し鬼婆さんは、

『馬鹿を云へ、まだ／＼用があるのだ。』と云つて、少しも取り合つては呉れないのです。

三吉は仕方なく翌日になると娘に向つて、

『どうぞ歸らして下さい。私は父を尋ね、はなりませんから。』と頼みました。すると娘は、

『お父さんと云ふのは、一體どんな方なの。』と尋ねました。

『しつかりしたことは私も知らないんだけど、死んだ母の話によると、右の眼の下に大きなほくろが一つ、それから左の手の指が二本ないのが證據ださうです。』

『ぢや、此度あのお坊様だ。あのお坊様だ。』

と、娘は口早に云つて、

『妾こそお坊様だつたけれど、おと／＼妾達を石の

下にひしひだお坊様は、確かにそれに違ひないわ。何故と云つて、右の眼の下には、ほくろもあつたし、それに珠數をつまぐりなされた時には、確に左の手の指が二本なかつたもの……』と、云ひました。

三吉はそれきくと躍り上る程喜んで、

『それなら尙のこと、この家から逃れさせて下さいお願いです。……私は一時も早く父に會ひたいのです。』と云ひました。

娘は三吉の嬉しさうな顔を見ると、急に悲しい顔をして、

『妾は今お坊様がどの邊を歩いてゐらつしやるか位は魔法でよく知つて居ます。だけれどそれは貴方に云ひたくないわ。』

『それは一體どうしてなんです。』

『だつてあなたは、お父さんにお會ひなすつたら、その儘妾達のことなんか忘れて了ふでせう。妾はこんな淋しい一つ家で、あんな悪いおつ母さんと二人

きりで住まつてゐて、誰も友達になつて呉れる人はないのですもの。折角好いお友達が見付かつたと思つてたのに、この儘往つて了つては、妾淋しいわ。』と云ふのでした。

『いゝえ、いゝえ、私だつてあなたの御恩は忘れません。父に會ひさへしたら又きつと戻つて來ます。』と、三吉は答へました。

さう云はれると、娘も無理にとも云へないので、『ではほんたうに是非戻つて來て下さい』と云つて三吉の鐵輪を外してやり、其の夜、鬼婆さんの寝てゐる隙に、そつと三吉を原の出はすれまで送つて行きました。そしてお坊様の行つたところを委しく教えてやりました。三吉も名殘惜しさうに幾度も／＼振り返り、原のはづれにしよんぼりと立つてゐる娘の姿の小さくなるまで、聲を限りに別れの合圖をしてやがて去つて行きました。

(をはり)



童謡

野口雨情選

(大人篇)

雨ふり

臺北 芳香 睦美

お春戸に お春戸に

啼く雀

今日は 雨ふる

とほしいぞ

畑も お山も

雨降りだ

びんちり 小鳥も

啼いてゆく

お春戸の お春戸の

雀の子
お春戸に 雨降る
とほしいぞ。

飴賣りさん

大阪 東淀みなみ

伸ばして まるめて
ふくらして

そらそら ぼつぼだ

鳩ぼつぼ

こんどは この子に

下さいな

そらそら ぼんぼこ

子狸だ

飴賣り 小父さん

四つ角で

子供に 飴賣つて

大繁昌。

つばくらめ

大阪 阪野

潤

秋が来たので
ふるさとの

お家へ歸る

つばくらめ

河原やなぎを

くどりぬけ

皆さん さよなと

言ひました

また春が来て

花が咲きや

歸つて おいでよ

つばくらめ。

こんぼの尾つぼ

臺中 日高 紅椿

とんぼの尾つぼに

糸つけて

とばそ

ながい尾つぼは

おかしいや

六〇

とんぼの尾つぼに
花ゆうて

とばそ

尾つぼのおしやれば

おかしいや

かなかな蟬

東京 湊 一訓

かなかな蟬の

大工さん

かなでけづつて

板つくる

かなかなかな

日暮れまで

板をたういて

家建てる。

青草坂

大阪 名方 和郎

青草坂へ

朝行きや涼し

雀も早よから

遊びに来てる

青草坂へ

朝早よおいで

雀と一緒に

起きておいで。

はね釣瓶

和歌山 檀上春之助

ぎーッこ ぎーッこ

はね釣瓶

お春戸はからしの

花盛り

赤いとんぼが

とんで来る

釣瓶はぎーッこ

はねつるべ。

蝙蝠

熊本 四國 八狐

麦ふみ

長野市 岡村

勝

麦をふみく

飴賣さん



どれん、麦ふみ

止めようか

母屋に母さん

待つであろ。

からす

東京 小林 重義

夕立やんだ

夕焼空を

かんかん鳥が

啼き啼きとんだ

夕焼まつかだ

真赤な空を

からすは啼き啼き

遠くへ飛んだ。

機おり虫

福岡 與田 準一

機おり虫が

機おつてた

あをい胸がけ

機おつてた

お地藏さんにたのまれて

機おつてた。

六一

風荒む満洲の夜に

齋藤佐次郎



六二

(前夜の晩、廣漠とした満洲の野に「張天虎」といふ恐ろしい馬賊が横行してゐました。日本の探偵は彼を捕へる爲めに風荒む或る夜出かけます。途中で老練に變装した悪漢の顔へました。その内に道に迷つて困り切つてゐる處へ一軒家を見出したので、その戸を叩かせました。)

小屋の中から聲がしました。

「泊めるわけには行かないよ。誰だか知らないが。」

如何にも無愛想な返事です。私はムツとしました。

で、今度は自分で戸口まで行つて、泊めてくれ

と頼んで見ようと思つてゐるところへ、例の私の掴

へた泥棒が、また戸をドン／＼と叩いて、

「おい、お願ひだ、全く道に迷つた旅の者なんだか

ら、そんな事をいはないで泊めておくんない。」と、

いひました。

その聲は澄みわたつて響きました。と、間もなく、

戸を開けようとする音がして、

「よろしい。道に迷つた方なら泊めませう。乞食か

と思つた。」

と、いひながら百姓らしい男が出て來ました。

百姓は女裝した男の姿をたまげたやうに見まし

た。しかも、手錠がかつてゐるので、いよく驚

いた様子をしました。そこで、私は戸口のところへ

行つて、

「私は日本の探偵です。これは私がつかまへた泥棒

なんです。われ／＼は暗闇の中で道を見失つてしま

つたので、奉天へ行くつもりなのが駄目になつたの

です。しかし、お世話になる以上は、決して御迷惑

はかけません。今夜一と晩泊めて貰つて、食べる世

話を下されば、十分にお禮はします。」

私の口上がはると、百姓は改めて私の姿を見直

すやうに見て、それから云ひました。

「日本の探偵さんですか。よござんすとも。では、

その乞食野郎も家の中へお入れなさい。その間に、

私はあなたの馬を厩へ入れて來ますから。」

六三



私は馬車から降りるのがどんなに嬉しかったでせう。怪我してゐる私の足は、寒さを感じてズキンズキン痛んで堪らなかつたのです。百姓は如何にも正直さうに見えますので、私は手綱を百姓に渡ししました。それから、泥棒と一しよに家の中へ入りました。部屋へ入つた時に、先づ最初に私の目についたのは、壁にかゝつてゐる大きな時計でした。それは十一時を指してゐました。十一時といふ時間は、私が張天鬼をつかまへに行く時間であつたのです。私は、とうとう一萬圓を取り損くた事を思つて、溜息をつきました。しかし、今更悔んだところでどうにもならない事です。張天鬼のゐるといふ小屋は、ここからは未だ随分遠いことでせうし、それにどつちの方角にあるのかさへ分らないのです。

「しかし、小さな鳥でもつかまへたのだから、せめて、これだけでも逃がさないやうに注意しよう。」と、私は獨り言をいひました。



そこへ、主人の百姓は、自分の息子だといふ二人の青年を連れて出て來ました。二人とも二十四五歳

位に見える屈強の若者ですが、しかし父親の百姓に比べれば到底比較にもなりません。まづたく父親は素撲取りのやうな體格をしてゐるのです。歳は四十五六歳でせうか、髪の毛が白髪に變りかけてゐます。身長は六尺位もあつて、如何にも力の強さうに見える恰好です。

部屋の中はさつぱりと片附いてゐます。真中に粗末ながらも大きなテーブルがあつて、椅子も五六脚据てあります。そして、隅の方には、着物でも入れるらしい箆笥のやうなものさへ置いてあつて、例の大きな時計はチタタ／＼動いて、部屋の中を賑してゐます。ふと見ると、壁には、ライフル銃が一挺と、獵銃が二挺と、二連銃が二挺と、ピストルが二挺も掛けてありました。

餘りに調つた武器なので、私の大きな注意をひいたことは勿論ですが、しかし特に私の注意を呼び起したのは、それ等の武器には何れも彈丸がこめてあ

て、いつでも発砲が出来るやうになつてゐることでした。しかし、よく考へて見れば、こんな淋しい森の中のことですし、それに悪漢どもが常に徘徊してゐることですから、これだけの準備をしてゐる事も、さう不思議なことではないかも知れません。

暖爐では、大きな丸太が燃えてゐました。火の上には、お茶をわかす釜と鍋が二つ掛けてありました。そして、鍋からはいゝ香が立つてゐます。私の身体は冷え切つてゐました。疲れてゐました。お腹は非常に空いてゐました。

『おい、子息達、お夕飯にしよう。』と百姓は息子達を呼んで、それから私に向つて、

『あなたの馬にはもう飼料をやつて置きましたから、こんどはあなたに上げる番です。しかし、この泥棒野郎と一しよに食事はなさいますまい。この野郎には丁度いゝ穴倉がありますから、そこへ追ひこくりませうや。』と、いひました。

穴倉といふのはどんな處かと思つて、私が自分で行つて見ると、そこは暗くつてじめ／＼はしてゐますが、しかし大丈夫な處です。そこで、私は泥棒の網を解いてやつて、しかし、手錠だけはそのまゝにして、穴倉の中へ追ひやりますと、主人の百姓も出て来て、中へ幾らかの葉を入れてやつたり、むすびのやうなものをこしらへて、それを彼に與へたりしました。

その後で、私は漸く夕飯のテーブルにつく事が出来ました。鶏を丸煮にしたのや、馬鈴薯を油でいためたやうなものが鍋から出ました。支那特有の強い酒なども出ました。私は思ふさま御馳走になりました。酒も無理にすゝめられて、二三杯は飲みました。主人の百姓は、私に向き合つて坐つて、油ぎつた赤い顔をテラ／＼させながらボツリ／＼と話し出しました。自分のお妻さんを近頃亡くした事や、豚に悪い病氣が流行つて困つた事や、自分の娘が日本人と結



婚した事や、森の山火事の事や——それからそれへと何時までも話がつきまでするので、とうとう私は眠くなつて了ひました。で、主人に向つてどうか寝させてくれと頼みました。

私がさういつた時には、もう随分おそくなつてゐたのです。爐の火はすっかり消えて了つてゐるし、時計は午前の二時を指してゐました。で、いよいよ一同がテーブルから立上らうとすると、ふツと蠟燭が消えて了ひました。全くの真暗闇になつてしまひました。

『これは困つたことが出来たぞ。』主人の百姓は何かを手探ぐりするやうにカタ／＼いさせて、『もう蠟燭がないんです。日本の壇那。相済みませんが、暗いまゝ、寢床へ行つて下さい。』と、いひました。

『ナニ、決して心配して下さらなくとも、月が照つてゐるから、わかりますよ。』と、私は何氣なく答へました。

た。なほ、椅子が二三脚と、外に覺のついた化粧棚のやうなものがありました。

私は旅行には慣れてゐますから、先づ部屋の戸をしつかり閉める事を忘れませんでした。戸には錠前も鍵もありませんが、掛金だけはありました。そこで私は戸の開かないやうに化粧棚を持つて行つて、その上に椅子をのつけて、誰でも戸を開ければ直ぐに椅子が倒れて、目の覺めるやうにして置きました。これで、まあ漸く支度だけは出来ましたので、今度はビストルを検べて、それを自身の枕の下に入れしました。それから、着物は脱がないで、そのまゝ寢床にごろりとなつて、さて眠らうとしました。

しかし、私は眠ることが出来ませんでした。床に入つてゐると、いよいよ神経が冴えて来て、ちつとも眠くならぬのでした。風の轟々とうなる音と、庭でなく犬の遠吠とが殊更らに私の耳につきました。でも、漸くにしてうとうとなつたかと思ふと、

『壇那のお荷物や武器は、このまゝ、此處へ置いて行らしめては如何です。』主人の百姓が又いひました。『いや、私のビストルと私は、決して離れない事になつてゐるんでしてね。』私は笑ひながら答へました。

私は青年達にお休みなさいをいつて、それから主人の百姓の後について寢に行きました。

しかし、それはなか／＼樂なことではありませんでした。ガタ／＼いふ梯子段を手さぐりに上つて、それから眞暗な廊下を歩かなければならなかつたからです。廊下の突當りが部屋になつてゐました。

部屋の中は勿論暗いのでした。しかし、幸と小さな窓から、蒼白い月の光が射込んでゐました。

『ゆつくりお休みなさい。』主人の百姓はさういつて、私一人置いて出て行つてしまひました。

私は部屋の中を見廻しました。そこは二階の小さい部屋で、隅っこには小さな寢臺が置いてありまし

忽ち醒めて了ひました。隣の部屋で私語き合つてゐる聲がするではありませんか。しかも、たしかに私の事で話してゐるのです。話聲の中には、私が捕へた泥棒の聲だと思はれるのさへ混つてゐます。私はそろ／＼と寢床から起上りました。そして、壁に耳を押當てました。皆なのしやべつてゐるのが、はつきり聞えました。

悪漢どもは、——しかも、私が捕へた例の悪漢がその主腦者となつて、如何にして私を殺さうかといふ事に就て相談し合つてゐるのです。私を寢床の中で撃殺さうといつてゐるではありませんか。

あゝ、とんでもない家へ泊り込んで了つた。しかし、もう何といつても後の祭りです。

私にはビストルがあります。しかも、十二發の彈丸がこまつてゐるのだ。よろしい。私は起き上りました。だが、彼等もまた銃を持つてゐるのだ。しかも、一人に對して四人なのです。(つゞく)

雛雀

若山牧水

雀の雛つ子

きれいだよ

羽根が煤けてないで

きれいだよ

啼いた、啼いた

啼いた、啼いた

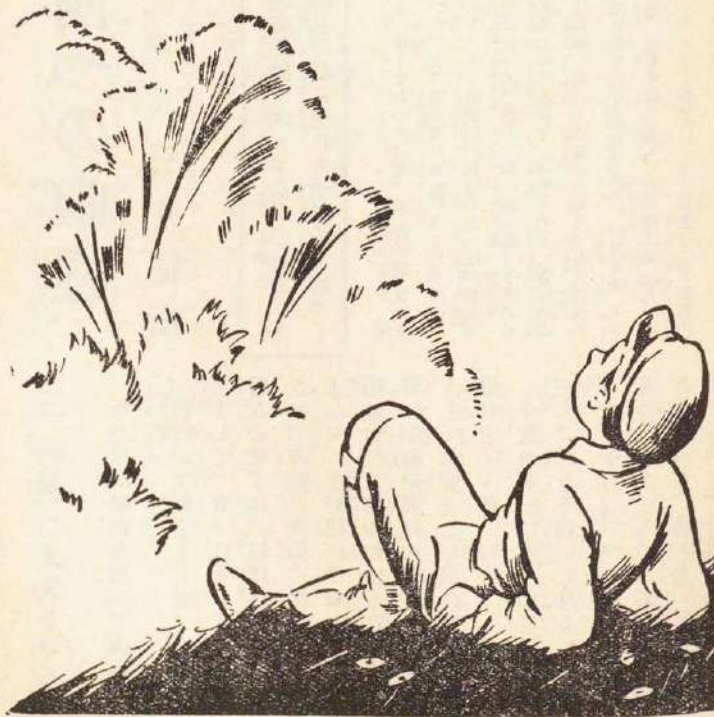
アラ啼いた

啼いてくすがたが

かはいゝよ

ふわふわこんでく

かはいゝよ





四つの幽霊

三井信衛

映畫俳優トオマス高田の行方は？
園見の邸に現れる幽霊の正體は？

【前號までの梗概】
東京市外代々木の園見家に、奇怪な事件が起つた。それは貢一の兄純郎が急死して後、夜毎に純郎と父の亡霊が現れることだ。貢一の恩師波多野牧師は、この事件については何等か思ひ當る事があるらしいが、それは未だ疑問の中にある。貢一は實は純郎の本當の弟ではなく、まだ園見の主人が生きてゐた頃、童先で拾はれた

哀れな子であつた。が、純郎の遺言によつて、彼は園見家の相続人となつたのである。而も園見家の親戚と言へば、伯父の香川只一人、邸も下男、宗兵衛と下女のお喜美との三人暮しだつた。そして貢一の心は夜毎に現れる亡霊のために、今は恐怖の底に落されてゐた。死んだ園見の主人の姿を目の當り見て、その場に氣を失つてバツマリと倒れた。といふ處で前號は終つてゐる。

三映畫「ゴオストマン」

一、兄はお前を恨んでゐる

何日か経ちました。あの夜を境として、貢一はまるで永い間の病人のやうに、頬は日に／＼と蒼ざめ、身體は次第に痩せ衰へて來ました。夜が訪れて來る度に、恐怖はいつも定つたやうに、小さい貢一の胸を襲ひつくすのです。さうしては惱ましい眠れない夜が、幾日も／＼續いたのでした。
今夜も貢一は、この應接間に只一人、煌々と輝いた明るい電燈の下で、いつまでも／＼起き續けてをりました。もうすつかりと神經が高ぶつて、窓の外にほんの小さく「ことッ」と音がしても、貢一

はバツと耳を聳て、ちいつとその方へ目を配りました。
彼の目には、この間から續けさまに見た父と兄の亡霊の姿が、拂つても／＼、はつきりと浮んで來るやうでした。あれが幽霊の色とでもいふのか、無氣味な灰色に透きとほつた姿……。そして父は、同じ灰色のモオニングを着て、兄も亦灰色の背廣を着てゐた……。ぐつたりと疲れたまゝ、貢一は籐椅子に身を寄せて、うつら／＼と惱ましい考へに浸つてゐたが、いつの間にか又、うと／＼と眠つたものと見えます……。
……水のやうな冷たい物が、貢一の頬を撫で、通りました。
ハツと氣がついて首を擡げる

と、いつの間にか電燈は消え果てて、ば／＼と青い燐の光の中に、あゝ又も兄純郎の姿！
「貢一よ……。」
おゝ、何といふ無氣味な聲でせう。この世のものとも思へない、乾からびた哀しい、微かな慄へ聲。
「貢一よ……。」
「うゝ……。」と言つた切り、貢一はその場に顔を伏せてしまひました。
「兄はお前を恨んでゐるよ……。」
「えゝッ！」と言つたが、それも亦聲には出なかつた。
「……思へばあの病室で……お前は一時も早くこの兄を死なしたさ……いゝや、一時も早く園見

家の後をとりたさに……この兄に死を告げたのだ……兄はそれを信じて力を落し……たうとうこんな姿になり果てた……兄はお前を恨んでゐるよ……兄はお前を恨んでゐるよ……。」
「おゝッ！」と初めて貢一が聲立てた時、早くも亡霊は掻き消すやうに消え、只暗がりの中に灰色の壁が、夜目にもハッキリと見えてゐたのでした。
二、生の父親
初めて貢一は思ひ當りました。兄が病床にゐたその折、今となつては嘘を言はないで明らかに容態を話せと言はれた時、ついそれを包みなく話したのは貢一でした。

けれどもあの時、『それで僕も落ちついて死んで行ける』と兄は言つたではないか。その兄が今となつて、貢一を恨まうとは……。だがそれも皆、今では只恐ろしい後悔の裡に、閉ざれて行きました。

『あゝ兄さん……どうか許して下さい。決して僕は、そんな悪い企みをして、あんなことを言つたのではありません……。』

と暫くはかう言つて祈り續けてゐたが、不圖目を開くと、いつしか又明りは消えて、目の前にはスーッと、幻像のやうな姿が立つてゐたのでした。

「えい？……」

「貢一よ……園見家を去るがよい。園見家を去るがよい。園見家を去るがよい……こゝはお前の幸福の家ではない……今は亡きお前の父の……これが只一つの願ひぢや……貢一よ……園見家を去れ……園見家を去れ……園見家を去れ……園見家を去れ……園見家を去れ……」

……その聲は次第々々に微かになつて、絶え入るやうに消えてしまひました。

三、波多野牧師の謎の言葉

「波多野先生、世の中には亡霊といふものが、本當にあるのですか？」

今日、小石川の黎明教會を訪れた貢一は、牧師波多野に向つてか

う言ひました。

「先生、何うすればいいのですか？ 夜な／＼園の父の姿や、純一郎さんの姿や、又昨夜は私の生みの父だといふ、見知らない姿が現れまして、園見の家を出て行けといふのです。亡霊といふものは、本當にあるのでせうか……？」

「うむ……」

波多野牧師は貢一の言葉に、しばらくはちいつと考へてをりました。だが、やがて嚴かに只一言かう答へたのでした。

「ゴオストマン……」

「えい？ ゴオストマン……？」

「ゴオストマン……」

「先生、それは一體、何のことでございますか？」

貢一は不審さうにかう言つたが、牧師はもう一度はつきり「ゴオストマン」と言つただけで、そのまゝ、禮拜堂の彼方へ、靜かに立ち去つてしまひました。

「先生、先生……」

貢一が尙も、その方へ追ひ縋らうとすると、禮拜堂の向方から一節のオルガンが聞え、靜かに讚美歌の聲が洩れて來ました。

「先生……それでは僕に、何のことかよくわかりません……。どうかもつと、はつきりと仰有つて下さい……」

がらんとした圓天井に、貢一の聲は高く反響しました。やがて再び禮拜堂の彼方から嚴かな牧師の聲が聞えたのでした。

「ゴオストマン……！」

四、牧師の謎は解けた

ゴオストマン——一體それは何のことか、貢一には想像さへつかなくつたが、兎に角波多野牧師の聲は、嚴かに、何事かを深く信じてゐるやうでした。譯は分



らぬながらに、波多野牧師に會つてからは、何故かしら貢一も、元氣が増して來たやうでした。

牧師に會つてから暫くの間は、只一度兄と父の亡靈が現れただけで、もうばつたりとその姿も見えなくなつたが、恰度五日目の真夜中、うとうと眠つてゐる貢一の前に、又すつと音もなく現れたのは、この間生みの父だと言つた、あの青白い無氣味な姿でした。

「あッ！」

と彼はさう叫びかけたが、今夜はいつになくベッドの上に起き上つて、ちいッと、ちいッとして、その幽霊を眺めたのでした。

「園見家を去れ……園見家を去れ……」

さう言つて亡靈は、再び音もなく、影のやうにドアから出て行つたが、それから稍長い間経つと、貢一は俄かに起き上つて、

「おッ！ さうだ！ さうだ！ 確かにさうだ！」

と口に出しました。いつになくその目に、あり／＼と輝きの溢れた貢一。彼は一體何を思つたのでせうか？ 外でもない、この間牧師の言つた「ゴオストマン」——その言葉を思ひ出したのです。

おッ、ゴオストマン！ それはかつて貢一が、兄と二人で見た活動寫眞の表題でした。しかもその活動寫眞には、ゴオストマン（幽霊人）といふ、幽霊姿の怪賊が現れて來ました。その映畫の幽霊と、

今現れた生みの父の幽霊とが、何となく似通つてゐるやうに思はれました！

その映畫を見たのは、もう彼は二年の前にもなるから、その細いところは忘れてゐましたが、たしかに／＼、その恐ろしい白衣の姿といひ、又そつとドアから現れた恰好といひ、「ゴオストマン」に出る幽霊と全く似てゐる。

「では、假にあの「ゴオストマン」の中の幽霊が、今現れた父の幽霊としたら……？」

さう考へた貢一は、思はずちつと拳を握つたのでした。

「おッ、あの「ゴオストマン」の幽霊人になつたのは、トオマス高田だ！ トオマス高田だ！」

讀者諸君はこの物語の最初にあつた、名優トオマス高田が突如として、行衛不明になつた事件を御記憶でせうか？

「トオマス高田……！」

さう考へた貢一は、ぶる／＼と身を慄はせたのでした。

では假にトオマス高田が、今の亡靈だとしたなら、一體高田と亡靈とに何の關係があるのせう？ いや、一體何のために亡靈になつたのせう？ 更に園見の父の亡靈は？ 純郎兄さんの亡靈は？

五、失望と希望は隣り同志

こゝは東京のとある目貫の交叉點です。がらん／＼とベルが鳴つて、一人の新聞賣子が立つてをり

ました。さうしてその前には、日本全國の新聞が並べられて、「なつかしい故郷の新聞」と書いたビラが出してあります。今、人込みを押して分けて、その新聞賣子の前につと現れたのは、一人の少年貢一です。

「君、新聞をくれたまへ。」

「へい、何處の新聞でせう？」

「日本全國すつかり貰ひたいんだ。」

「へえ？ 全國……」

驚きながらも新聞屋は、三十八ほど並べてあつた各縣の新聞を、すつかり取り揃へて貢一に渡ししました。貢一はそれを抱へると、人目につかない横町のミルクホールへ入つて、慌しくその新聞の一つ

／＼を調べ始めたのでした。

外でもないが貢一は、あの「ゴオストマン」といふ映畫を、もう一度見る必要があると思つたからです。だがその映畫は、世間に知られたフィルムではあるが、もう何しも二年も三年前に封切されたのですから、今は何處で上映されてゐるやら、その見當さへつきません。それが何んな遠い處であらうと、事件の真相を突きとめる上に、今は躊躇してゐる時ではありません。

跳り上る胸を抑へながら、貢一はミルクホールのテエブルの上で、一つ／＼新聞を擴げては、側に積み重ねてをりました。

「いばらき」「河北新報」「福岡

日々『北海タイムス』『京城日報』……次から次へと調べて行つたのでした。

『おや／＼、ジャパン・タイムスまで入つてらあ。何だ、これは？は／＼、貸聞新聞か……』

笑ひながら元氣よく調べて行つたが、三十幾つの新聞のどれもどれも、『ゴオストマン』の広告は、一つもなかったのです。

『あ、……困つた！』

急に貢一はぐつたりとしながら、冷たくなつたコホアを不味さうに飲みましたが、深い吐息の中に不圖目の前を見ると、

『は／＼、何のこつたい！』

と俄かに彼の目には、さつと輝きの色が充ち溢れて來ました。外

でもない、目の前には色刷のビラが吊してあつて、そこには文字もあり／＼と、『トオマス高田主演・ゴオストマン（全八巻）』と書いてありました。しかもその上映館は、現在東京の鶯谷にある、オリエンタル・キネマの特約館東洋俱樂部でありました。

六、『ゴオストマン』第八巻

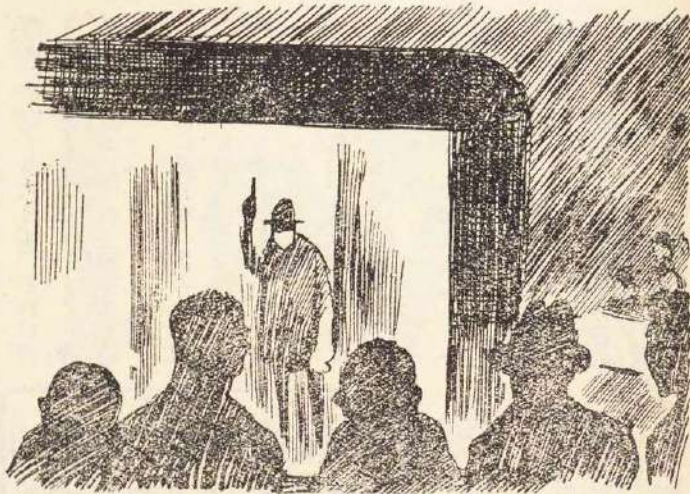
燈臺下暗しといふのはこの事でせう。まさかこの東京の映画館に、上映されてゐようとは思ひませんでした。

貢一は上野で電車を降りると、近路を選つて鶯谷に出ました。ごく／＼とした町並を通つて歩いて行くと、ほんの小さな汚い活動小

屋が目につきました。バラック式のその建物にも、赤や青の旗が立て／＼あつて、看板には『ゴオストマン』の色んな場面が、あくどいペンキ書で描かれてをります。

恰度今は、書間第一回の始つたところらしく、貢一が中に入ると、まだ四分の三以上も席があいてをりました。その時、白いスクリーンの上には、『フランダースの犬』といふ外國映画が映つてゐましたが、やがてそれが済むと、今度はいよ／＼『ゴオストマン』。

もうその頃は、この狭い活動小屋にも一杯見物が入つて、人いされで蒸せ返るやうでしたが、貢一は一心に正面を見つめてゐたのでした。



デリ、／＼、とベルが鳴ると、騒しいオーケストラの音と共に、目の前にバット映つたのは、トオマス高田主演の『ゴオストマン』——あの高田の姿が、はつきりと映つてをりました。

見ながらに貢一は、不圖この映画を、死んだ純一郎兄さんと一緒に見た日を、思ひ出しました。あの時、封切されたばかりであつたこの映画も、今では畫面に餘程疵がつきました。

貢一は何故ともなく、懐しいやうな、又哀しいや

うな思ひに浸つてゐたが、やがて映画は容赦なく進んで、第一巻、第二巻、第三巻、さうして第四巻の中頃となりました。

『あ、……！』

貢一は人込みも忘れたやうに、思はず聲に出しました。そこに映つた幽霊、幽霊人に扮したトオマス高田、それこそは團員の邸に現れた生みの父の幽霊と、その表情、その恰好、その衣裳——どれもこれも、同じだとは思はれなかつた！

『さうだ、確かにさうだ！』

貢一は尙もちいつと幽霊を見ながら、わな／＼とプログラム持つ手を僕はせたが、然し假令このゴオストマンの幽霊と、生みの父の



お星さん (推薦)

愛知縣 森 ほたる

お星さん

お星さん

天から下りな

草には露が

びかびか光る

お星さん

お星さん

天から下りて

螢になつて

あの露すひな

幽霊とが似てゐたとて、それが何うしたと言ふのだらう……？ 今更ながら貰一は、行き詰つてしまひました。

そのうちに第五巻、第六巻、第七巻は順々に済んでしまつたが、貰一は亂れて來た頭を抱へて、深く考へを廻らせてゐたのでした。只二つの幽霊が、似通つてゐることをだけ確めたとして、それが何の足にならう……？

力のない目で、何氣なくもう一度映畫に目を移した時、

『お、ッ！』と貰一は、又も聲を出してしまひました。

恰度その時は、第八巻最終篇の終り、不圖眺めたスクリーンには、次のやうな字幕が現れたのです。

偵探名木崎人は幽霊賊の
手よつて、やうやく
警視廳に捕へられた—
~~~~~  
やがて幽霊人は、警視廳  
の一室で指紋を取られた

字幕が消えるとその次は、警察の場面となりました。さうして今そこに、幽霊人は多くの警官たちに取り巻かれて、しほ／＼と入つて來たのでした。

やがて彼の前には、一枚の指紋紙が置かれて、指紋を取られるこ

とになりました。そこでバツと大寫しになつて、現れたのは幽霊人の、大きな右の手、即ち名優トオマス高田の右の手、その右の手は大きな指紋を残して、つと消え去つたのでした。

貰一は大きく目を輝しながら、映畫に映つてゐる大きな指紋に、ちい／＼と注いだのでした。

つい忘れてゐたが、たしかに二年前に見た折も、その指紋の大寫しがありました。

『うむ、高田の指紋！ 高田の指紋！』彼は心に強く叫んだのです。

『既に事件には光明が現れました。映畫の指紋を見て、貰一は何を考へたのでせうか？ 果して彼の想像は適中したでせうか？ 次巻には更に更に、事件に一體化をします。』





幼 年 詩

若山牧水選

こども (賞)

福岡縣 金子チエ子

こともがちを

のんでゐる

足をもぢもち、させてゐる。

評、實に面白い調子だ。少しもわざとらしくない自然の調子だ。(牧水)

あぢさい (賞)

福岡縣八女郡 下川トシエ

大きなまゐる

あぢさい

かびんがかくれてゐる。

評、繪よりも美しい寫生です。(牧水)

待つてゐるダリヤ (賞)

香川縣木田郡 野島ミツエ

學校には早や

ダリヤが咲いてゐるけど

内にはまだ

つぼみだ

もう明日ぐらいいは

咲くかいの

つぼみが三つぐらい

あるらしい。

評、いかにも賑々らしい言葉であり調子である。(牧水)

風

朝鮮京城 河野正三郎

若草町一〇六 (十三)

風吹くな

ほうせん花が

化けくらべ (推薦)

荒井正己



八二

昔、或る森に古狸が住んで居りました。大分

年を老つたのでそろ／＼息子に自分の後を譲らうと思つて、ある日のこ

と、狸六、狸七、狸八の三人の息子達を自分の前に呼びよせて申しました。

『俺もこの通り随分年を老つたから、誰かに後を譲らなければならぬまい。

そこでお前達の中で一番人を化かし方の上手な者に譲らうと思ふがどう

だ。で今日は皆これから里へ行つて、自分の腕を試して来て、俺にその

土産話を聞かして呉れ。その中で一番面白いのを後継ぎとしよう。』

すると、狸六、狸七、狸八等は皆化け方にかけては自慢なものばかり

なので、自分こそと喜んで家を出て行きました。

親狸は暫く息子達が行くのを見送つて居りました。やがて、皆の影が見

えなくなつてしまつたのを見届けると、立ち上りながら、

『どれ、俺も一つ出掛けて行つて、奴等の化け方を見て来やうかな。』と

獨語を言たかと思ふと、一人の百姓に化けて、とば／＼と出て行きました

二

さて狸六は、家を出掛けて途中までやつて来ますと、すつかり草臥れ

てしまひました。そして、

『あーあ、すつかり疲れてしまつた。どれ、此處らで少し休んで行かう

かな。はあ、どつこいしよ。』と獨語を言ひながら、道傍に腰を下して休

んで居りますと、向ふから一人の百姓がやつて参りました。すると之を

見た狸六はハタと膝をたいて、さも何かうまい考へが浮かんだ様に獨

り合點しながら、道の真中に出てごろりと横になつたかと思ふと、一つ

の鯀俵に化けてしまひました。

すると此方の百姓に化けた親狸は、そこへ通りかゝると早速それを見

つけて、

『おや、鯀俵がおいてあるぞ。一つ家へもつて歸つて御馳走にならう

かな。』

と言つてすつかりほく／＼してしまつて、狸六が化けたものとも知ら

ずに、うんとこしよとそれを擔いて、てく／＼歩き出しました。

三

八三



ちるよ  
ちつたらお庭は  
さびしくなるよ。  
群、ハイ、吹きません。

風

東京市外 粗山きん子  
風よふけ〜  
私の髪のかわくまで  
風よふけ〜  
お人形の着物の  
かわくまで。  
群、サテ困つた。河野さんは吹くなといひ  
粗山さんは吹けといふ。吹くか吹くま  
いか、サテ〜困つた。(取水)

び

福岡縣八女郡 右田まつき  
下妻校(尋四)  
びわの枝と  
びわの枝との間  
きゆうくつさうだね。

朝

横須賀市 山崎千代治  
沙入六 (十三)  
朝、窓の所に  
居たら  
雀の羽ばたきが  
きこへた。  
群、静かです、調子も言葉も。(取水)

夕方

山口縣熊毛郡 埴田君江  
鹽田校(尋九)  
夕日がきれいだ  
かへるの鳴く聲と  
とんぼのかげだけだよ。  
群、これはまた夕べの静けさ。(取水)

福岡縣八女郡 古賀俊次  
下妻校(尋四)  
田ン中で  
うまかつた

八四  
さて此方は狸七です。途中まで参りますと、向ふから一人の百姓が、  
鯀俵を擔いで此方へやつて来るのに出會ひました。  
『よし一つあの鯀俵をうまく化かしてとつてやらう。』  
かう狸七は獨語を言つたかと思ふと、忽ち一疋の馬に化けてしまひま  
した。

そこへ親狸の化けた百姓は、うん〜言ひながら鯀俵を擔いで、汗  
を流し〜やつて参りました。すると、道傍で馬が草を食つてゐるので  
すつかり喜んでしまつて、早速擔いでゐた鯀俵を馬の背中に載せまし  
た。ところが、載せるがはやいか狸七は、こゝぞとばかり早速鯀俵を  
擔いだまう、一散に林の中指して逃げ込みました。これを見た親狸の百  
姓は吃驚したのしないのつてありません。  
『こん畜生〜』と言ひながら、馬のあとを追ひかけて、之も又續いて林  
の中に入りましたが、忽ち馬の影を見失つてしまひました。  
他の一方狸八は途中まで來ますと、喉が渴いたので、小川で水を飲ん  
で居りました。すると林の中から一人の百姓が、悄悄としながら此方へ  
やつて参りました。之を見た惡戯好きの狸八は、早速うまい考へが浮か  
んで、大きな尻尾を小川にわたしたかと思ふと、忽ち尻尾は一本の丸木

橋になつてしまひました。



つて寝て居りました。すると間もなく、  
『只今ッ。』と言つて狸六が歸つて参りました。親狸が早速、

其處へ通りかゝつた親狸の百姓  
は馬を見失つてしまつたので、す  
つかり落膽してしまつて、呆然と  
何氣なく丸木橋を渡らうとします  
と、本當の橋でないから堪りませ  
ん。忽ちデヤボンとばかり川の中  
へ落つこちてしまひました。する  
と狸八は之を見てお腹をかゝへて  
笑ひながら、一目散に何處かへ逃  
げて行つてしまひました。

四

親狸は、頭から尻尾のさきまで  
びしょ濡れになつて小川から這ひ  
上り、ぶる〜震へながら家に歸



ごはんたべた  
うまかった。

がらす

福岡縣八女郡  
下妻校(尋常) 下川 マサヨ

まどのがらすに  
てん／＼うつた  
あまたれ  
しろうく  
あをく、うつくしい。

あじさい

山口縣熊毛郡  
鹽田校(高小) 河村 都

花立のあじさいが  
まどをあけたら  
さりと

こちらへむいた。

けむり

福岡縣八女郡  
下妻校(尋常) 井口 ハスエ

もみちのはのかげに  
ふろのけむり  
一ぱい  
かたまつてゐる。

夏の夜

新潟縣中蒲原郡  
早通校(高小) 小林 秀雄

涼風と、一しよに  
蚊の音が  
遠くなつたり  
近くなつたりする。

電車の中で

日本女子大學附  
屬女學校(二年) 中島 泰子  
(十三歳)

大きな人が  
居眠りをして  
隣の人にぶつかつたら  
目をさまして  
あやまつた。

八六  
『どうした、何か面白いことがあつたか。』ときくますと狸六は得意になつて答へました。

『え、私が途中で休んで居りますと向ふから百姓がやつて來ますので早速、鯀俵に化けてやりましたら、百姓の奴それとも知らず私をうんとこしよと擔いで……』

『馬鹿ッ、ボカリ。』

親狸は、之をきいてすつかり怒つてしまつて、いやと云ふ程狸六の頭を毆りとはしました。

『親を化かす奴があるかッ。勘當だ、出て行けッ。』

狸六は親狸のこの恐ろしい權威に吃驚してしまつて、早速家を飛び出して何處へか行つてしまひました。

そこへ間もなく狸七が歸つて來ました。

『只今ッ。』

『どうした。何か面白いことがあつたか。』

『え、私が途中で休んで居りますと、向ふから一人の百姓が汗だらけになつて鯀俵を擔いでやつて參りますので、私が早速馬に化けてやりましたら百姓の奴、それとも知らず鯀俵を私の背中に載せましたので』

私は早速それを擔いて林の中へ逃げ込んでやりました。』

『馬鹿ッ、ボカリ。親を化かす奴があるかッ。勘當だ、出て行けッ。』

狸七は這々の體で逃げて行つてしまひました。

すると其處へ間もなく狸八が歸つて參りました。狸八は狸六、狸七、何れも勘當になつたと聞いて、自分こそ後繼だと獨り決め込で大得意です。

『只今。』

『どうした。何か面白いことがあつたか。』

『え、私が小川で水を飲んで居りますと、向ふから一人の百姓がやつて參りますから、早速私の尻尾で橋をかけてやりましたら、百姓の奴それとも知らずに渡つて、川の中へ落つちてしまひました。今頃は屹度風邪でも引いて寝てゐる頃でせう。』

『馬鹿ッ、ボカリ。』

親狸は怒つたの怒らないのつてありません。

『親を化かす奴があるかッ。勘當だ、出て行けッ。』

かう言つて尙も毆らうとするので、狸八は吃驚して逃げて行つてしまひました。親狸は狸八の言つた通り、それから暫く風邪を引いて寝て居りました。

(をばり)

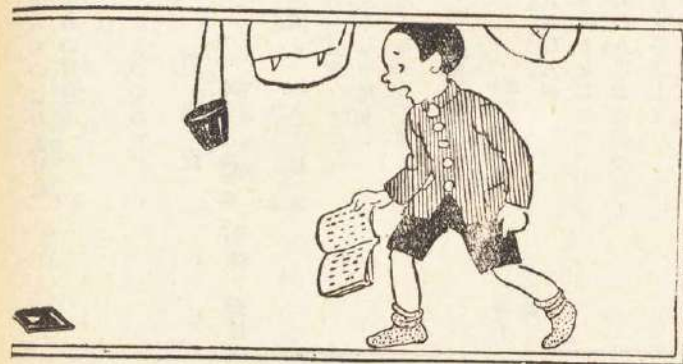
(作者住所 福岡縣郡山市清水臺)



# 三人眼鏡

久米 舷一

八八



人物

あま雄……小學生

から子……その姉(女學生)

父親

母親

下女

## 第一場 から子の勉強室

(幕開くと、女學生のから子。座敷の真中で、見物席の方を向いて字を習つてゐる。一壁には籠、ラケット、などの外に双眼鏡が一ツかゝつてゐる。)

から子「あーあ」(兩手を思ひ切り上へ舉げて大きな欠伸をする)「あ、厭になつちやつた。なんだつて又、世の中にはお習字なんて物があるんでせうねえ。こんな物、習つたつて何の役にも立たないのに……」

(獨り言を云ひながら又習ひ始める。右手より弟のあま雄が讀本を持つて出て来る。)

あま雄(姉の後ろに來て)「姉さん。」

から子(返事をしない)

あま雄「姉さんッ。」

から子「……………」



あま雄「姉さんと云つたらッ。」

から子(始めて氣が附いた様に)

「あ、吃驚した。なんだつてそんな大きな聲を出すの? 耳が破れてしまふぢやないの?」

あま雄「だつて、先刻から何遍呼んだつて返事をしないんだもの。」

(讀本を出して)

姉さん。この字なんて讀むの? 教へて……」

から子(知らん顔をして、又習字を始める)

あま雄「よオ、教へて。よオ。」

から子「うるさいわねえ。あつちへいらつしやいな」(腹を)

あま雄「教へて呉れないの? ……」

あ、分つた。姉さんは知らないんだネ。この字を。」

から子「知らない? まあ! そんな字位の讀めなくてどうするの

假りにも女學生ともあらうものか……………」

あま雄「ちやア、なに。なんて讀むの?」

から子「低いッて云ふ字よ。そんな易しい字が讀めないなんて、あま雄さんも随分、低脳ね。」

あま雄「ていのうッてなあに?」

から子「ていのうッて、つまりていのうだわ。英語で云ふと、チエターラン。割口の反對よ。お馬鹿ぢやんの事よ。」

あま雄「……………」

から子「まあ、なに、そんな氣のきかない顔をして、よけい低脳らしく見えるわ。」

あま雄「僕が低脳なんだつて!」

から子「お、怖い。お、怖い。叱ら



れない内にあつちへ行きませう。(ツイと立上つて、隣室へ出て行く)

(あま雄、姉の出て行つた方を見て)  
「馬鹿、馬鹿! 姉さんの馬鹿ツ」と口惜しそうに呟く。そして眼を輝やかで、姉の机の上や壁の方を見廻して居るが、やがて双眼鏡に目をつけると、何かい、事を思ひ付いたやうに、それを外して来る。

あま雄「さうだ。仕返しをしてやるんだ!」

(あたりを見廻して人の居ないのを確かめると、箆で、双眼鏡を覗くふちの所へ墨を塗り始める。)

あま雄「かうして、姉さんに覗かしてやるんだ。ハ、ハ、ハ、愉快、愉快。」

(から子が入つて来る)  
から子「何を笑つてゐるの。獨りで



げらくと。」  
あま雄「姉さん、姉さん、早く御出。とても素的! 三越が見えるんだよ。三越の旗が!」

から子「えッ。三越の旗? どれ、見せて頂戴。よオ。見せて頂戴ツたら。」  
(から子、無理に双眼鏡を引たくつて、眼にあてる。)

「何處? 何處に見えるの?」  
あま雄「もつと上だよ。あの松の木の上……」

から子「あゝ、見えた〜。  
たしかに三越の旗よ。アラ、何だか字が書いてあるわ。えーと、おーう、だ、し、あゝ大賣出しだわ。まア嬉しい!  
私、大賣出しの時に、お母様

から子「帯を買つて貰ふ約束よ。ああ嬉しい。直ぐ行かなくちゃ。」

(から子、双眼鏡を外すと、眼の廻りに黒く輪が附いてゐる。併し、ちつとも氣が附かない。あま雄は可笑しそうに口に手をあて、笑つてゐる。)

から子「まア、何を笑つてゐるの、この人は……どうしたの?」  
(時計を見て) あらもう一時だね。早く行きませう。」

(から子、大急ぎで出て行く。あま雄はその後を見送つて笑ふ。)

「姉さんの低脳やアい。」

## 第二場 茶の間にて

(舞臺の中央、見物席の方を向いて、から子の母親が縫物をしてゐる。その左には母親が、左手の方を向いて、机で縫物を讀んでゐる。)



から子「眼に黒輪をつけたまゝ、双眼鏡を持つて走つて来る。」  
から子「お母さん、お母さん!」  
(母親、縫物から眼を離さずに)  
「まア、から子。なんですなえ。お父様が勉強していらつしやるぢやありませんか。」  
から子「お母様。お母様。三越で、今日賣出しなんです。旗にさう書いてあるのよ。さ、これを見よ……あつちの方よ。」  
(見物席の方を指し示す。そして無理やりに双眼鏡を母親の顔に押しつける。)

母親「どれ……何も見えやしないぢやないの。」

から子「まア、あの塀の上に見えるぢやありませんか。」

母親「なんだか、ちつとも見えやしない。」



(双眼鏡を外す。同じやうに眼の廻りが黒くなつてゐる。)

から子「ひどいわ。お母様。あんな事云つて。大賣出しの時には、きつと連れてつて上げるツて仰しやつたぢやありませんか。ひどいわ。ひどいわ。あんな事云つて、連れて行かないつもりよ……いゝわ。お母様に見えないんなら、お父様に見て戴くから……」

(から子、父親の後ろへ寄つて行く)

母親「から子。お邪魔しちやいけませんよ！」

から子「お父様。お父様。一寸この眼鏡を覗いて下さいな。」

母親「いけませんよ。から子！お邪魔をしちや。」

ヒールな三ツ持つて来て、父親と母親の間の茶卓に置いて行く)

女中「あの……コーヒーを持つて参りました。」

母親「あゝ、さうかえ。」(父親の方を向いて)

「貴方、コーヒーが這入りましたさうです。」

父親「さうか。……ちや一休みしようか。」

おい、から子。お前、あま雄を呼んでおいで。そしてお茶が濟んだら、お母様と三人して三越へでも四越へでも行つておいで。その方がうるさくなくていい。お前達が居るとお父様はちツとも勉強が出来やしない。さア、早くあま雄を呼んでおい

から子「かま ないわね、お父様。」

(父親「うん、うん」と云ひながら、荷書物を調べてゐる。から子、無理に父親の眼に、双眼鏡を押しつける。)

父親「どれ、うるさいね。」(と云ひ双眼鏡を取り上げて、とんでもない方を見ながら)

「うん、なるほど。見える。見える。やア、見えるぞ。」

から子「あらお父様、そつちぢやないわ。こつちよ。」

父親「うん、こつちか。……なるほど見えるぞ。今度は本當に見えるぞ。ちゃんと大賣り出しと書いてある。」

から子「ね、さうでせう。やつぱりお父様は豪いわ。」

(父親、双眼鏡を外すと、これも眼の廻りが黒い。此時上手より、女中がコー

で。」

から子「いや！ あんなきかんぼ。

あま雄さんと一緒に行くのなら行かない方がいゝわ。」

父親「それ、またそんな事を云ふ。お前達姉弟は、どうしてそんなに……」

母親「貴方、コーヒーが冷めまゝすから、お早く……」

父親「今行きますよ。うるさい人達だね」

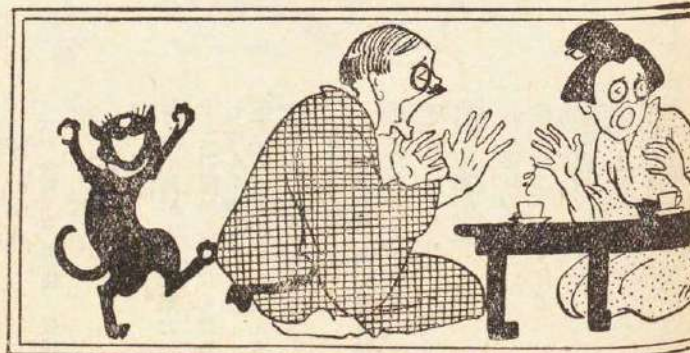
(茶卓の方へ寄つて来る。母親もから子も寄る。三人、フツ顔を見合せて)

「やッ。」

「あら。」

「あら。」

(静きの裡に静)







童謡

野口雨情選

(子供篇)

うさぎ

青森縣

石橋晋太郎

びよん／＼うさぎ

可愛い／＼な

笹つばお耳も

可愛い／＼な

南天お目々も

可愛い／＼な

びよん／＼うさぎ

可愛い／＼な

すべり道

千葉縣 吉原

平

この道すべり道

あぶないはい

すべるなころぶな

氣をつけはい

この道すべり道

ころぶなはい

どんどん通つて

かけてけはい

星

岐阜縣 岸田

繁夫

大きな親星

スートとんだ

かわいい子星を

だつこしに

島

京城 河野正三郎

海の向ふの

小島には

松の木一本

はえてゐる

かにもどつさり

あるだらう

角笛

秋田縣 岩谷

貞三

ちひさいあしの芽

角笛に似てる

あしの芽とつて

角笛つくろ

角笛ヒツヒ

みんなで吹こう

青い小鳥

神奈川縣 齋藤 辰雄

きのうお家の

うら山へ

青い小鳥がとんで来た

どこの國から来たのだろ

ちゆんちゆん／＼と

ないて どこかへとんで

行きました

ますだこ

たこたこ

足切れた

桐の小枝で

あし切れた

たこたこ

水を汲む

煙のまん中で

水をくむ

日ぐれ

香川縣

鎌田 俊子

日ぐれの細道

白い道

だれもお人が

とほらない

お舟

茨城縣

小倉 正大

お舟／＼

どこゆく

大川小川と

いくのだよ

ぎつちらく

雲

宇治山田

中西榮之助

入道雲 こわい

つかみにくるぞ

むぎ笛ふく

おつかけるぞ

あれあれ伸びた

スタコラ走れ

はよかへろ

はたる

山梨縣 小俣

せき

風のふく

さみしい晩

はたるはつかひに

行きました

ちやうちんつけて

行きました

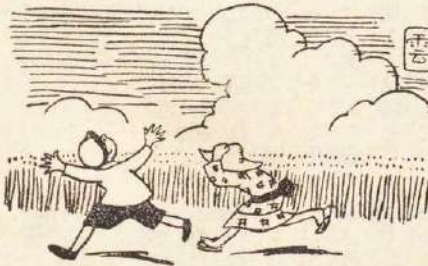
菊

甲府 豊島

泰

となりの菊が

のびて来た  
うちの庭へも  
のびて来た



ひばりこつばめ

神奈川縣 中里 政一

ひばりは何所で唄つて

畑の中の麦の上で

ビィツク／＼唄つて

麦笛吹き／＼唄つて

つばめは何所で

しゃべつて

人のお家の軒下で

ビチャ／＼ビチャクチャ

急しやうにしやべつて

急しやうにしやべつて

急しやうにしやべつて

急しやうにしやべつて

急しやうにしやべつて

急しやうにしやべつて

急しやうにしやべつて

急しやうにしやべつて

急しやうにしやべつて





## 一角仙人物語

西川 喜平

九六

### 王城の巻

南の方のある國に、一角仙人と云つて、額の真中に一本の角が生へてゐる、仙人がりました。  
この仙人の生れた時も所もわかりませんが、その頃のお爺さんお婆さん達の小さい時に、その又前のお祖父さんやお祖母さんから、『昔、天からこの國へ、仙人が落ちて来て、額を大地へ打ちつけ、

瘤のかはりに、一本の角が生へ、山奥の岩屋へ隠れたと云ふお話を、聴かせて貰つた。』と話されたのですから、仙人の歳は、もう何百年にもなるのでせう。今でも生きてゐると見へて、山奥へ入る者は、時々大きな、仙人の足跡を見つけたと云ふことであります。  
この國の王様に、一人のお姫さまがりました。このお姫さまはお顔は玉のやうに清らかに美しく

お姿は花のやうにやさしく、そのお聲は金の鈴をふるやうに、すみわたつてゐました。  
それにお姫さまのからだからはしぢう花のやうに、よい匂ひの香りが出て、その香りの高いことは遠くの方までも匂ひ渡りますのでお姫さまのお通りになつた後は、二日も三日も、よい匂ひが消へずにゐると云ふくらゐであります。

それでお姫さまのお側にゐるとまるで天國の花園に、遊んでゐるやうな心もちになるので、お姫さまは天女のお生れかわりであらうとの、噂でありました。

ある日、お姫さまは、御殿の高樓の窓によつて、四邊の景色を眺めておゐてになりました。すると遠くの山の方から、白い雲のやうな、煙りのやうなものが、ムクムクと立ち騰りました。そして、それがだん／＼、空高くひろがりますと、まるで大入道のやうな形になると見るまに、鬼のやうな顔が出来て、お姫さまの方を見て、ニタ／＼と笑ひながら、御殿の上へかぶさつて來ましたので、お姫さまはアツと叫んで、氣を失つてし

まひました。

お附きの人達が驚いて、大勢で介抱しましたので、お姫さまはヤツト氣がつきましたが、それから毎日その時刻が來ると、『雲の鬼が來る。』といつて、お姫様は泣き狂ひました。

それで、お父さまの王様も、お母さまのお妃も、大へんに御心配になつて、産土の神にお願ひをしました。

産土の神は、王様に向ひまして『姫の病氣は、惡魔に見込まれたのだ。この惡魔は中々強い者であるから、我々の力では、追ひ拂ふことは難かしい。今これに勝つ者は、この國の山奥に住む一角仙人の外にはあるまい。しかし仙人は

人間に逢ふのが嫌ひだから、國王自身に行つて、よくお頼みなさい。』と言ひました。

これを聴いた王様は喜んで、早速御家來を大勢お供に連れて、お迎ひの馬まで曳かせて、噂に聞いてゐる山奥へ分け入りました。そして、方々尋ね廻つて、三日目に漸く岩屋を見つけました。

岩屋の入り口は、王城の門より大いにくらゐですが、中は眞暗で少しも見えませんでした。

王様は、岩屋の口から聲をかけました。

『一角仙人はおいでになるか。産土の神の指圖により、お願ひに出ました。』と言ひますと、岩屋の奥から、



『國王が姫にたゞりをなす、惡魔を追ひ拂へとの、頼みに來たのであらう。人間と言葉を交すのも身の汚れになる。迷惑な頼みではあるが、産土の神の指圖とあれば是非もない。日の神のお咎もあるまいによつて、今直ぐに行つてやらう。』と言ふ聲がしましたが、その



聲がまるで雷の鳴り渡るやうでしたので、王様も御家來も、驚いて耳を塞いでしまひました。王様は又岩屋の中へ向つて、『仙人のお言葉は誠に有難いことです。では馬を曳かせましたからこれへお召し下さいまし。』と言ひますと、岩屋の奥からカラ／＼と笑ひ聲が聞えました。『そんな小さなものに乗れるか。乗り物の心配はいらぬぞ。』と怒鳴りました。やがて岩屋の奥から出て來た仙人を見ると、王様も御家來も、アツと驚いて、あまりの恐ろしさに顔を上げる者もありませんでした。

一角仙人は、身の丈は何丈あるか、まるで小山の動き出したやうで、眼は日月のやうに光り、赤い髪を振り亂して、額の真中に一本の角が生えてゐます。人とも獸ともわからない、恐ろしい姿でありました。

一角仙人が空へ向つて、手を上げて招きますと、一むらの黒雲が舞ひ下つて、仙人も、王様も、御家來も、馬もみんな包んでしまひました。そして、忽ち空へ上つてゴーツと強い、烈しい風に吹き送られると、一時の間も立たない中にまた黒雲が大地へ下りて來て、四邊が明るくなつたのを見ると、いつか王城の門の前へ來てゐました。



王様は、お迎ひして來た一角仙人を、王城の中へ請じ入れました。一角仙人は丈が高いので、王城の家根へ手をかけ、脇をついて待

つてゐますと、やがていつもの時刻になつて、遠くの空から、白いムク／＼した雲が、お姫さまの御殿へかぶさりました。すると、御殿の内ではお姫さまのお聲で、『あゝ雲の鬼が來た／＼。』と泣くのが聞えました。一角仙人は雲に向ひ、呪文を唱へ、大きな手を振りました。と、雲は忽ちチヤレ雲となつて、散り／＼に消へて無くなりました。不思議にも、お姫さまの、今まで艶もなく曇つてゐたお顔は、もとの玉のやうに晴れやかに照り輝いて、萎れてゐたお姿は、咲きかへつた花のやうに生き／＼としてお身體の香りは一層高く匂ひました。

### 岩屋の巻

王様も、お妃も、御家來達もみんな喜んで、一角仙人にお禮を申上げてゐました。する中に前に送つて來た黒雲が、又舞ひ下つて來て、一角仙人を包むと見る間に強い風が吹き出して來て、一團の黒雲は、遙に遠く山奥の方へと飛んで行つてしまひました。

下界に住んでゐる龍王があらました。海や川にゐる時は水の神となり、天へ上つては、雲や雨の神になります。それに飛行自在の通力があつて、天上にも下界にも自由に住むことが出来るので、天の日の神さまの仰を受けて、一角仙人の見張り役になつてゐました。



龍王が、一角仙人の見張り役になるについての、一つのお話があります。

一角仙人は、もと天上界に住んでゐた大きな星の神でありました。ある日雲の裂け目から下界を覗きますと、人間の男や女が、遊び戯れてゐる有様の面白さに、見惚れてしまつて、夢中になつて眺めてゐる中、つひ足を踏み込まして、雲から下界へ落ちてしまひました。

下界では、天から小山のやうな岩が降つて來たので、大騒ぎをしました。が、天上界でも、一と騒ぎがもち上りました。

天上界で、神々が寄り合ひまして、これまで小さい星共が、過つ

て下界へ落ちることは度々あるが星の神が、しかも下界の有様に見惚れて、落ちるとは何事だ、そんな者は、天上界の仲間には入れて置かれぬと云ふので、いろ／＼評定がありました。が、慈悲深い日の神さまは、星の神に向つて、かういふお言ひ渡しをなさいました。

『星の神は、下界へ落ちた罰として、一千年の間、天上界へ立ち歸ることはならぬ。そしてその間は人間との交際を斷つて慎んで居れ。一千年の目が満ちれば、再び天上界の神となれるが、もしこの言葉に背く時は、一生天上へは歸さず、その上、厳しい罰を與へるぞ。』

とのことでありました。

それで龍王を見張り役として、

一〇〇  
尚その上に人間と交際させぬ爲に額に一本の角を生へさせたのでした。

一角仙人は、お姫さまの爲に、惡魔を追ひ拂つてから、お姫さまとお話しがしたくなりました。黒雲に包まれて、無理に連れ歸られてからは、もう一度王城へ行きた。いと、雲を呼びましたが、雲は中々出て來ません。一角仙人は、苛ら立つてゐました。ところへ、龍王が、岩屋へ入つて來ました。そして仙人に向つて、

『一角仙人、この間は姫を救ふ爲であるから、日の神のお許しを得て、雲へ乗せてやつたが、いつか日の神の誠を忘れ、人間と交際が



したいとは何事だ。下界へ落ちてから、今日迄九百九十九年を過ぎ

もう一年で天上界へ歸れる時が來たのに、また日の神のお怒りに觸

れては、もう一生天上界へ歸れぬばかりでなく、どんな厳しい罰を受けるかもしれぬぞ。』と諭しました。しかし一角仙人は中々きゝません。

『よし／＼雲をよこさねば、自身で姫に逢つて來るぞ。』と、立ち上りましたので、龍王はカッ

ト怒つて、

『見張り役の言ふことをきかぬ仙人。氣の毒ながら、天上界へ上り日の神さまへ申上げねばならぬ。』

と、言ひ棄て、天へ上らうとしましたので仙人は驚いて、龍王を引きとめました。こゝでとう／＼仙人と龍王との争ひがはじまりました。さすがの龍王も、力づくでは、仙人に敵ひませんで、仙人の爲に、つひに岩屋の奥へ閉ち籠められてしまひました。

王城では、お姫さまの御病氣が治つたので、王様やお妃をはじめ御家來達も喜んでゐました。しかし、こゝに困つたことが出來たのは、その頃から、この國に雨が一滴も降らないことでした。



この國はしぢう夏ばかりの暑い所なので、今まで一日に二度や三度は、かならず雨が降つて、土や草木を害してゐたのに、バツタリ雨がなくなりまして、木や草は枯れる、呑む水はなくなる、國中に病人が出来るといふ、大變な騒ぎになりました。

そこで王様は心配して、産土の神にお願ひをしますと、産土の神のいはれますには、

『この頃、この國に雨の降らぬのは、雨の神の龍王が、一角仙人のために、岩屋へ閉ぢ籠められた爲だ。いま龍王を救ひ出すには、一角仙人の通力を失くすより外はない。それには、姫を岩屋へやるか又は姫の代りに、姫の衣を贈り、

その上に酒をすゝめれば、仙人の心が亂れて通力を失ふであらう。』と言はれました。

王様はこれをお聴きになつて、『一角仙人は、姫の命を助けてくれた恩人である。その仙人の通力を失くさせるのは、恩を仇で返すやうなものだ。』と、いろ／＼お考へになりましたが、しかし、

『一角仙人には氣の毒であるが、國中の難儀には替へられぬ。』と心を決めまして、いよ／＼、産土の神の言ふ通りに、やることに極めました。

しかし大切な姫を、やることは出来ませんので、美しい侍女を一人、撰みまして、これに一角仙人への口上を言ひ含め、姫の身に着

けてゐた衣を持たせ、大きな酒壺へ、一ぱいに酒を入れて、美しく飾つた馬に乗せ、道案内を知つた御家來をつけて、仙人の岩屋へやりました。

一角仙人は、龍王を岩屋の奥へ閉ぢ籠めて、番をしてゐる所へなるとも云へぬよい香りが、何所ともなく匂つて來ました。

『ハテ不思議なことだ。花も咲かぬこの山奥に、このやうな香りのする筈はない。さて／＼この匂ひには覺へがあるぞ。オ、これは王城の姫の身の香りだ。さては姫がこゝまで來てくれるのか。』と、もう有頂天になつて、岩屋を出ようとしたが、閉ぢ籠めてある龍王の事が氣になるので、岩屋の口



を出たり、入つたりしながら、『姫には早く逢ひたいが、龍王を逃がしては大變だ。かう云ふ時こそ分身の術がほしい』と、身悶へ

をしてゐる所へ、よい香りが、ま／＼匂つて來るので、たまらなくなつて、『一角仙人はこゝに待つてゐる

ぞ。』と、大きな聲で呼びました。

やがてシャン／＼、シャン／＼と鈴の音が聞えて、向ふの山路から出て來たのは、美しい一人の女と、大きな酒壺を乗せて、首の廻りに澤山の鈴をつけ、美しく飾つた馬でありました。

これに大勢の御家來がついて來たのを見た仙人は、小踊りして喜びましたが、だん／＼近づくに従ひ、よく見るとお姫さまでないので、急に不機嫌になつて、『姫はどういたした。』と尋ねました。

すると侍女は馬から下りて、美しい愛嬌のある顔に笑ひを含んでニコ／＼しながら仙人の前へ進出しました。



「これはお姫さまが肌へおつけになつた衣物でこれはお姫さまのお好みになるお酒で御座います。」と言つて衣と酒壺をさし上りました。

一角仙人は、これまで人の心を見透す通力をもつてゐたのですがもうスツカリ心が汚れました爲に通力を失つて、騙されることがわかりませんので、喜んでその衣と酒壺を受け取りました。

侍女は一角仙人のやうすを見て安心をして、お姫さまの衣を仙人に着せ、酒壺から酒を酌み出して吞せました。すると、仙人の恐ろしい顔が和らいで、身に浸むやうなよい香りと、酒の酔ひ心地で丸い目を細くして、大きな鼻をビョコ／＼動かして喜びました。酒

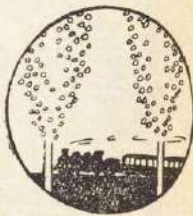
壺の酒も呑み干し、はては侍女を抱き上げて踊りまわる中、酒の酔ひが身體中へ廻つて、まるで夢のやうな、なんとも云へぬよい心もちで、グタ／＼とそのまゝにそこへ倒れ伏してしまひました。

スルト岩屋の奥で、物凄く大きな音がして、跳り出したのは龍王でありました。

目を覺ました一角仙人は、この有様に大そう怒りまして、岩屋の外へ跳り出して、煙のやうな息をついて龍王へ飛びかかりました。ところが、人間と交際をした爲めに身は汚れ、心が亂れて、スツカリ通力を失つた一角仙人は、かへつて龍王の爲に、岩屋の中へ投げ込まれてしまひました。

すると天から、金色と紫色の電光りが、ビカビカツと射して岩屋の中がバツト明るくなりました。

一角仙人が唸りながら、狂ひ廻る妻が、恐ろしく見えましたが、それと一緒に、天地も覆へるかと、思ふほどの恐ろしい音がして、岩屋はコナ微塵に打ち砕かれ、あと形もなく、飛び散つてしまひました。



(幼年詩)

ポブラ(推薦)

海達公子

汽車の音

汽車の音が

雨の音にまじつて

停車場に着いた。

雨上り

雨が上つた

母ちや

おえん

ふいてゐる。

犬

田うゑに

ついてきた犬

なへを

かざんでゐる。

犬

あせ道通る犬

田にうつつてゐる。

ポブラ

ポブラの葉が

白い

あたまふりふり

白い。

ポブラ

ポブラの音がする

汽車が

だまつて着いた。

なんてんの花

なんてんの花

はちが

おとしてゐる。

かへる

小さいかへる

浮草に

のらうとした。

すずめ

すずめが

麥わら

くわへてとんだ。

には鳥

一番鳥が鳴いた

ポブラの葉が白い。

なはしろ

なはしろが

青い

子どもが

見て通る。

みぞの水

雨が上つた

みぞの水

つまらずに

流れていく。

しそ

二かいから

おりた

しそのにはひの

してきた。





## ゴロツキと虎

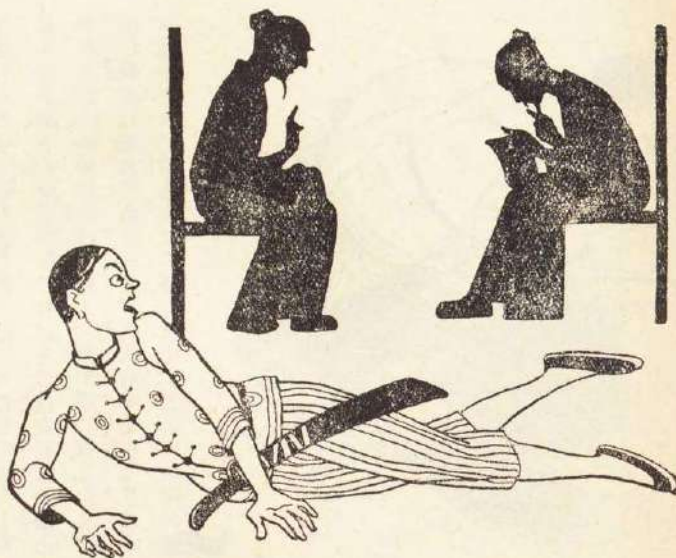
水島爾保布

一〇六

支那のゴロツキで老虎と綽名を取つた男があらま  
した。腕力が強く膽つ玉が太いので同じゴロツキ仲  
間からは親分とも兄分とも立てられて大さう幅を利  
かして居りました。

ある晩、同じゴロツキ仲間の寄り合ひで無闇と荒  
れ飲みをした上句足もしどろに酔つばらつて歸つて  
來ました。歸るといふ氣はあつてももう人の家自分  
の家の見さかひもなく、たま／＼行き當つた門の中  
へのめり込んで、その儘地面にころがるが早いか忽  
に蟬のやうな鼾で寝込んで了ひました。  
夜露のしとりが身に泌みじみとするのでさしもの

酒の酔ひも殆ど醒めて了ひましたが、夢こゝちは全  
く去り切らない。まだ薄暗い中にぼんやりと起きも  
やらずにゐると、頭の上の方からひそ／＼とさ／＼や  
き合ふ聲が聞えて來ました。  
「あの男はどこに何をしてゐるんだらう。」  
「大石洞の中に――多分まだ寝て居るんだらうよ。」  
「で今度首を取らうといふ惡人は、君の帳簿では誰  
と誰になつてゐるかね。」  
といはれて對手は帳面をくつてゐるらしくさうし  
て初めに數へ上げた人の名は同じ村の某といふ札つ  
きの親不孝者でありました。次に擧げたのは某とい



ふ金持の墓を暴いて棺に收めてあつた財物を盗み出  
した隣村の某で、何れも老虎の仲間のゴロツキ達で  
ありました。それこれの仲間を五人程並べた一ばん  
後で、今度は老虎の本名が數へあげられました。  
「これは大變な事になつた。なる程俺は博奕も打つ  
し喧嘩もする。親達にも相應苦勞をさせ親類仲間  
にはかなり迷惑もかけたには違ひないが、しかし母親  
をいぢめ散らしたり人の墓を暴いたり神様の寶もの  
を盗んだりするやうなそんな大それた惡事は一度だ  
つてした事はない。一體何の罪でこの首を斬られる  
んだか？……そしてこゝはどくだらう？」  
と、流石に老虎といふ綽名まで持つてゐる暴れ者  
でも一つしかない首を取られたり殺されたりする事  
には餘り興味がなかつたのでありました。おづ／＼  
と頭を持ちあげて聲のするあたりを透して見ると、  
てうと夜明けの薄明りの下に、何を祀つたものかは  
判りませんが少さなお宮が一つ星のやうなお燈明を



ちらちらさせて居りました。話してゐるのはたしかにそのお宮の中か、でなければその後ろにでも潜んでゐる何ものに違ひないと、氣がついたとたんに話し聲はばつたりと止んで、同時にお燈明も吹き消されるやうに消え失せて了ひました。



「一體あんな事をいつてゐた奴は何ものだらう。」  
と、老虎は立あがつてそのお宮の内外の隅々から縁の下まで残らず探して見ましたが、人つ子一人はさておき虫けら一疋の影すらありませんでした。  
「と、……待てよ、あの話しては大石洞の中に誰か寝てゐるといふ事だつたが、大石洞ならば直ぐ目と鼻の間だ。よしこれから一走り行つて様子を見てくれやう。」

と、老虎はそのお宮を飛び出して、まだ薄暗い路をその大石洞といふ洞穴の前までやつて來ました。と、その洞穴の中からは洞穴一杯にこだまするやうな凄じい大鼾の聲がゴーゴーと渦を巻いて絶え間もなく響き出して居りました。

「何て恐ろしい鼾なんだらう。まるで雷だ。化物かそれとも魔物か。」

と、老虎の鼾だつて並大體の猛烈さではないのですが、誰しも自分の鼾を知つてゐる者はありません。



で、こはいもの見たさの抜き足さし足でその鼾の聲をたよりに洞穴の奥の方を透して見ますと、そこには毛だらけ髭だらけの大男が一人、大の字なりに手足を踏み延ばして岩石のさか／＼になつた地面の上に臥つころがつてゐました。

「こいつだな。一體こいつは何ものだらう。」  
と、老虎は嚴重な身がまへでじつとその男の臥姿を見てゐましたが、その顔つきの恐ろしさ手や足の逞しさ丈でもとても自分一人では手におへさうには思はれませんでした。下手に起してもしたら兎角の話の間も許さず、いきなりに取つて抑へられて了ひさうだ。——と老虎は氣がついたので、直ぐさま持つてゐた刀を引き抜いてその男の咽喉に押し當てざま、胸元へ馬乗りになつて了ひました。さうして、  
「おい起きろ。」  
と、怒鳴りました。

大男はびつくりして飛び起きやうとすると咽喉笛には分厚なさうして巾の廣い鉈のやうな刀がびつたり押しつけられてゐる。胸の上には峻しい顔をした男が體を重しにしつかりと踏ん跨つて居る。——といふ有様なので俄に暴れ出すわけには行きませんでした。



「お前は何者だ。泥棒か。」

「さういふお前は何かの化物だらう。」

「いや、俺は旅の者だ。」

「旅の者が何だつて宿屋にも行かすこんな洞穴の中に寝てゐるのだ。何うも怪しい。本當のことを云へ。俺は神様の話しを立ち聞きして來たんだ。何も彼も知つてゐる。お前は誰かに頼まれてこの村へ人殺しに入り込んで來た者だらう。」

「さうだ。してそれを知てゐるお前は一體何者だ。」

「俺はお前が殺しに來た五人の中の一人で老虎といふ者だ。」

「何に、老虎だ。老虎なら一番先に捉へるやう云いつけられてる男だ。」

と、大男は大きな眼をギラ／＼させて下から睨と

老虎の顔を見上げました。

「俺はお前に捉へられたり殺されたりするやうな大罪は犯してはゐない。聞けば今お前の捉へに來た者

俺の胸にかゝつてゐる札の中にお前の名前を記したのがある。それへお前は自分で自分の指を咬んでその血を塗りつけばいいのだ。さうしてお前は名前を更へて、遠い所へ立ち退いて了へば一時の急場を逃れる事は出来る。」

「よく教へてくれた。俺はもうお前を殺すとはいはない。」

と、老虎は刀の手を引きました。むつくりと起き上つた大男は老虎と約束した通り胸にかけてゐる名札の中から老虎の名札を取り出して、それへ老虎の指の血を塗らせました。

「それでよろしい。それから名を更へると一しよにお前はふだんの行ひを慎む事を忘れてはいけない。了簡を入れ代へて生れ代つたやうになる事が出来れば、お前は或は長命でこの世を送る事が出来るかも知れない。」

と、さういつて立ちあがつてブル／＼と體を震は

はみんな首を斬られるんださうだが、俺は一體何の咎でそんな慘い罰を受けなければならないんだ。」

「それは俺には判らない。俺は只お上から捉へて首を斬つて了へと云ひつけられた者丈を捉へればいいのだ。」

「どうだ。お前の命と釣り代への相談だが、お前は

この俺を見逃してはくれまいか。」

「いや、それは駄目だ。お前の命数は前々からさうなる事がちやんと定つてゐるんだから、今俺が見逃したつてどこかでさういふ事になるに違ひない。」

「よし、さうと判れば俺はこの刀でお前の咽喉を一抉りにして了ふ。お前をこゝで釋してもどうでも俺は殺されなければならぬんだから、どうで殺されるのなら殺しに來たお前も序に殺してやる。」

と、老虎は刀の手へ力を加へてその男の咽喉を一突きに突き通しさうにしました。

「待て待て、俺は今お前を助ける手段を思ひ出した。

せました。

と、今迄の大男の姿は忽に大きな虎になつて空に向つて一聲フオーと吼えたかと思ふと、その儘洞穴を飛び出して側の谷を一跳びに跳び越え、まるで風のやうにどこかへ消え失せて了ひました。

老虎は家へも歸らずその儘生れ故郷の村を立ち退いて或る城の近くに引き移り名前を更へると一しよに、今迄の亂暴な行もすつかり悔ひ改めて几帳面な稼ぎ人になりました。さうして七十近く迄無事に暮らして居りました。

ある年、親友の一人が重い病に罹りました。

その全快の御祈禱をするといふので親しい人達がめい／＼自分の名前を書いてそれを星に捧げることになりました。

老虎も亦その中に交つてゐたのでしたが、その祈禱をする人に自分の今の名前を書いたものを渡した後で、ふとそれは本當の自分の名前ではないことに



気がつきました。

『天に向つて嘘をつくのはどうも気が済まない。』

と、気が咎めてたまらなくなつたので、一たん戻

りかけたのを又引返へしてさうして前に書きしるし

た假の名前を本名に書き改めました。さうしてその

お宮の門を出るとどうしたものか體中が、急に刺だ

らけになつたやうな、只

もう無聞と腹立しい氣持

ちになつて來ました。

『何て氣色の悪きなんだ

らう。……こんな時には

酒でも飲んでやれ。』

と、老虎は早速に近所

の酒屋へ這つてそこにあ

り合せた大きなコップへ

なみ／＼と酒をつがせま

した。



老虎はその名前を更へると一しよに亂暴を止める  
といふ誓ひのしるしに先第一に酒を斷つたのであり  
ました。  
『五十年振りの酒だ。相變らず天下無敵のうまい味  
だ。俺はどうしてこのうまい味を今日迄忘れてゐた  
んだらう。』

と、杯に向つてそんな事  
をいひ／＼飲む程に酔ふ程  
に老虎の心はだんだんと峻  
しくなるばかりでありまし  
た。あたりの人の顔がどれ  
もこれもみんな自分を見て  
笑つてゐるやうにも思はれ  
て、無聞と腹が立つて來ま  
した。

『お前達は俺のどこがを  
かしいといふのだ。何といふ

失禮な奴等だ。』

と、破れ鐘のやうな聲

で鳴り立てました。

『俺は今日こそ本名を名

乗つてやる。本當の素性

を云つてやるぞ。俺は昔

老虎と云つて天下に知ら

れた暴れ者だつたのだ。

對手にならうといふ者は

外へ出ろ。』

と、さういつて一座を睨み廻しました。

すると、その酒屋の表から、

『老虎ならば、この俺を覚えてゐるだらう。』

といつてのそ／＼と這入つて來た者があました。

見ると、昔大石洞の中で出會つた虎の化した大男で

ありました。

老虎は驚いて酒の酔ひも一時に醒めたやうになつ



て了ひました。

『お前は天に嘘がつけなか

つたやうに自分にも嘘がつ

き切れなかつたんだ。その

證據にはお前は自分でつけ

た自分の名前を本當の名前

だと思ひ切れなかつた。さ

うして到頭自分の運命を自

分で處致する事が出來なか

つた。——俺は役目だから

お前を捉へなければならぬ。』

と、大男はさういつて直ぐさま老虎の腕をつかん

で引き立て、行きました。

さうして城の門を出ると忽にその大男の姿は大き

な虎になつて、老虎をくはへたまゝるで宙を飛ぶ

やうに遙かの山へ走つて行つて了ひました。

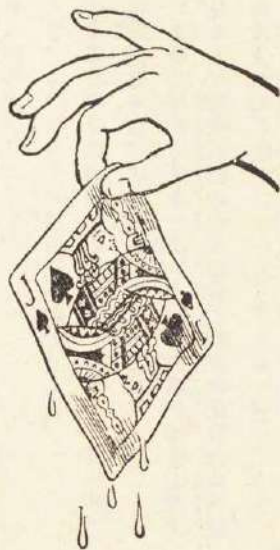
(をはり)



## スペードの

## ジャック

片平喜一郎



幾日も、降り続いた雨が、からりと晴れて、雲の間から、きら／＼と、太陽が輝きだしました。

街の子供等は、すつかり、家の中で退屈しきつて居りました時ですから、みんな、喜んで外へ出て、空を眺めました。

薄黒い雨雲は、みんな、北の方へ北の方へと、流れて行つて、ほんとうに、良いお天気になりました。

と、ある町はづれの、溝河に添つた——其處にも

大勢の子供等が、寄り集つて、嬉しうに、ちやばちやばと溝河をこぎながら、玩具の水車を廻したり、お船を走しらせたりして、遊んで居りました。

「ね、正ちゃん。僕の水車の廻ること。御覧よく、ほうらね。」

「うん、僕のお船も、君、こんなに走るよ。軍艦だ、軍艦！ 早いね。君。」

子供等は、ほんとうに嬉しうでありました。

その時、みんなの群から離れてゐた、一人の子供

が、頓狂な聲を出して、

「やあ、こんな所に、トランプの札が落つちてゐらあ。」と、云つて、泥の中から、ぐち／＼になつた、一枚のトランプの札を拾ひあげました。そして、も一度、大きな聲で「おーい。みんな、面白いものが落つちてたよ。トランプだ、トランプ。スペードのジャックなんだ。」と、云つて、子供は、友達を呼びました。

「なんだえ、スペードのジャック？」

「どんな、顔の奴だえ？」

子供等は、みんな集つて来て、指の先で、摘みあげられた、汚たないトランプの札を、覗きこみました。

摘みあげられたトランプの札からは、ぼたり／＼と、涙のやうな水滴がたれてゐます。

「なんだえ、君。このトランプの奴、泣いてるよ。ほーら、あんな大きな涙を落してる。」

「あゝ、スペードのジャックの癖に意氣地がないな。」

「ジャックつて、兵隊さんぢやないか、泣くなんて、馬鹿だね。」

「ほんとだ、ほんとだ。」

子供等は、盛んに、そのトランプについて、批評をはじめました。

摘みあげられた、スペードのジャックは、それを聞きながら、

「おやおやッ、この小僧つ子共、俺を馬鹿にしてゐるな。兵隊さんのくせに泣くなんて、をかしいつて、ちえッ、俺は、ちつとも泣いてなんかゐるもんか、馬鹿な。着物がぐち／＼なんで、それから落ちる水滴を見て、俺が泣いてると思つてやがる、餘計なお世話だよ。濟まないが俺は、泣いてなんかいないんだぞ。」と、大きな聲を出して、嗚鳴りつけたかつたのですが、トランプの悲しさで、口をきくことが



出来ません。口惜しいけれど我慢してやれ、と、思  
つて、知らぬ顔をしてゐますと、子供等は面白がつ  
て、

「ほんとに、弱蟲ジャックだね。僕の兄さんのトラ  
ンプのジャックの方が、餘つ程、強いや。ちつとも、  
泣きやしないからな。」

「あゝ、こいつは、きつと戦に負けて、捨てられた  
んで、泣いてるんだ。顔が泥で眞つ黒けぢやない  
か。」

「こんな、ジャック、役にたつもんか。」

と、口々に、スベートのジャックの悪口を云ひま  
した。

スベートのジャックは、ほんとうに口惜しくつて  
なりませんでした。悪い子供等に捕つたものだ、と  
思つても、逃げる事が出来ません。指の先で、し  
つかり捕へられてゐるので、身動き一つ出来ないの  
です。ジャックは、なんだか、急に心細くなつて來

ました。

「それにしても、をかきな事があるものだ。確かに、  
昨夜までは、お屋敷の坊ちゃん達と、ツーテン  
ジャックの戯びをしてゐたのだつてが——こんな水  
溜りに投げ込まれてゐるなんて、どうも解らない。」  
と、ジャックは、過ぎ去つたことを考へてみました  
が、何一つ、これと云つて、思ひあたる事があり  
ません。

「あゝ、何が何だか、解らない解らない。」

ジャックは、悲しくなつて來ました。

しかし、根が、氣丈夫なジャックのことです  
から、それがために、決して、をめぐりと泣き出すや  
うなことはしませんでした。

ジャックは、心の中で、

「世が世なら、こんな子供等に、馬鹿にされるやう  
なことはないんだが、今となつては仕方のないこと  
だ。」と、云ひました。そして

「これは、きつと、運命とか、  
云ふものに違ひない。」

と、思ひました。

が、しかし、子供等は、ジャックが、自分の身の





不幸せなことを考へて、嘆いてゐるなど、云ふことは知りませんから、各自に、勝手なことを云つて、ジャックの悪口を云ひ合つて、喜んで居りました。そのうちに、一人の子供が、何を考へてか、大きな聲を出して、

『ウワツハツハ。』と、笑ひ出しました。

その聲で、他の子供等は、吃驚りして、ジャックの悪口を云ふのをやめて、

『どうした。』と、笑つてゐる子供に向つて云ひました。子供は、さも得意さうな顔をして、

『何かに、君達、何でもないんだ。實は、このジャックを、一つひどい目にあはしてやらうと思つたんだ。』と、云ひました。

『あ、それは面白い。』と、他の子供等は、口を揃へて、賛成しました。

『ほんとうに、スベートと云ふ奴は、トランプの中で、禍ひの札と云つて、一番に悪いことをする奴だ

ました。

『やあ、上つた。』随分高く上つた。』

『おーつと、危い。今度は、宙返りだ。くるく廻つて落ちて來た。』

『あつとつと、とう／＼、川の中へ落つこちやあがつた。』

と、子供等は、スベートのジャックの方を見て、みんな、面白がつて、囁きました。

ジャックは、それどこではありません。空に投げあげられると共に氣絶して了つて、川の中へ落つちて了つてからも、何にも知らずに、浮いたり、沈んだりして、川下の方へと流れて行きました。

子供等は、それを見て、みんな、嬉しうに、手をたゝいて、喜びました。

それから、暫くたつてからでありました。

ジャックは、何か、自分の背中にドンと、突きあたつたやうな氣がして、ひよつと、正氣付きまし

からね。』と、子供は、話を續けました。『だから、僕達は、こ奴には、うんと恨みがあるんだ。トランプをすると、いつもこのスベートにいちめられて、負かされつちもふんだ。それに、こ奴は、ジャックだ、兵隊さんだ。だから、僕は、その日頃の恨みを、今日こそは、晴らしてみせるよ。』と云ふと、他の子供等は、

『賛成だ、賛成だ。』と、手をたゝいて、騒ぎたてました。そこで、子供は

『では、みんな。これから、スベートのジャックの奴の目をくるく／＼舞ひに廻はしてやらう。』と、云つて、ジャックを捕へて、力のあらん限り、天に向けて、投げ飛ばしました。

スベートのジャックは、これは困つたことになつた。と、思つてゐるうちに、もう、身體が、くるくる廻つて、ぐん／＼と上の方へと上つて行くのです。が、そのうちに、何が何だか、解らなくなつて了ひ

た。

『お、痛いッ。誰だ。俺に打つ突つたのは。』

と、思はず、ジャックは、喚鳴りました。そして、ひよいと顔をあげて見ると、それは、岸邊に、何かへ込んで立つて居た、枯れた柳の根株でありました。

『氣をつけろい。何だえ、やせつこけ柳め。こんな所に足を出してゐやがつて。』と、ジャックは、何のわけなく、腹立ちまぎれに、横柄な顔をして言ひました。すると、

『何をお言ひなんだえ。自分で勝手に打つ突つてゐながら、乞食奴が。』と、その時、岸邊の枯れた柳のお婆のさんがぶつ／＼云ひました。

『何を。乞食だつて、馬鹿にするねえ。この老いぼれ奴が。』と、ジャックも、負けずに云ひました。

するとまた、

『餘計なお世話様だよ。お前さんこそ老いぼれちや



ないか。汚ない様子を、恥しくもなく、ぼろぼろの服に、毛のぬけた帽子で、錆びた劔を持つて、それでも、赤い髯があると思つて、あんまり偉張りなさんな。」

と、今度は、柳のお婆あさんは、息をもつかずに、べら／＼と喋りました。

ジャックは「おや／＼、この婆あさん、自分が汚ない様子を、してゐるのも解らないで、いゝ氣になつてゐる。葉っぱ一つなくなつて、痩せつこけ枝ばかりの癖に——こんな強つく婆あさんにはかなはない。何を云つても無駄なことだ。」と、思つて、黙つて了ひました。そして、ばんやりと考へ込みました。

『いつたい、俺は、何と云ふ不運者だらう。スベートのジャックに生れたばかりに、水溜りに捨てられたり、子供達には馬鹿にされたり、その上、川の中へ投げ込まれて、こんな老いばれ婆あにまで、乞食あつかひにされて——あゝ、情けない。やつぱり、

これも運命かな。』

と、ジャックは、いろ／＼な事を考へてゐるうちに、いつのまにか、うつら／＼となつて、つひに、こくり／＼と居眠りをしてすひました。

ジャックは、身體が、へと／＼に疲れてゐるものですから、何となく、いゝ心持ちに眠つて居るのです。

してゐるうちに、ジャックの耳もとで、何か、そこそ話をしてゐるのが聞えて來ました。

何でも、其處は、廣いお城の庭らしいのです。そして戦さに勝つた、兵隊達が、功名話をしてゐるらしいのです。

『うん、俺は、最後の夜襲の時だ。敵のお城の近くまで行つた時に、敵軍の彈丸が、ビュウ／＼俺の頭をかすめて行くのだ。しかし、俺は、ちつとも恐くなくつた。この通り、傷一つうけなかつた。』と、一人の兵隊が云ふと、その後から



『さうだ、俺にも、愉快な事がある。馬に乗つて川を渡る時だ。その時、不運にも、俺の馬は、敵弾にやられたんだ。しかし、俺の馬はいゝ馬だつた。とうとう川を渡り切つたからなあ。』と、得意さうに言ひました。すると、その後から、年を取つた兵隊が、『あゝ、さう言へば、あの川の戦ひだ。あの戦では、大分戦死者を出したが、それにしても、ジャックが行方不明になつた事は、實に残念な事だ。スベート軍での強者だからな。』

と、一段、聲を落して云ひました。

『ほんとに、惜しいことをした。』

『王様も、嘆いてゐられるだらう。』

『あゝいふ、強者は、またと得られない。』

と、みんなは、口を揃へて、ジャックの戦死を嘆きました。

と、そのうちに、お城の庭が、だん／＼騒々しくなつて來て、やがて、戦に勝つた、お祝ひの酒宴が



始まりました。

王様は、高い所に坐つて、兵隊を見わたしてうれしさに、

『今度の戦は、みんなの働きでとう／＼スベート軍の勝となつた。私は、心から、この勝ち戦をお祝ひ致したい。さあ、みんな。スベート軍の爲にお祝ひをして呉れ。』

と、云つて、盃をあげました。

澤山の兵士達も、喜んで、盃をあげて、

『スベート軍、萬歳！』

と、叫びました。

兵士達の、お祝ひの叫びは、天もとどろけとばかり響き渡りました。

と、その叫び聲に、ジャックは、ひよいと眼を覺ました。

『何だ、夢か。』

ジャックは、いつのまにか、また、浮いたり、沈

一二三

んだりして、流れて居ました。そしてそれに、氣が付くと、

『あゝ、こんなことなら、いつまでも、夢を見て居た方が、餘つ程、いゝ。』と、思ひました。

ジャックは、もう、さつきの子供達の事や、柳のお婆さんの事なんかは、すっかり忘れて了つて、今、見た夢の事ばかり、一生懸命に考へながら、何處まで流れて行くものやら、浮いたり沈んだりして、流れて行つて了ひました。

柳のお婆さんは、ジャックの流れて行く、その姿をみて、

『あゝ、ほんとう、可哀さうに。あのジャックも、もう、救かるまい。氣の毒に、ぼろ／＼の服に、毛のぬけた帽子で、錆びた剣を持つて、それでも、何だか、嬉しさうな顔をしてゐたが……』

と、獨言を言つて、ぼとり／＼と大きな涙をこぼしました。

(をばり)

## 特別附録 ナイガイラ瀑布奇談





# ナイヤガラ瀑布奇談

三宅房子



## 綱渡りの放れ業

もう大分だいぶ前のお話ですが、ナイヤガラへ、背の低い、髪の毛のきれいな一人の佛蘭西人フランスじんがやつて来ました。その佛蘭西人は、ナイヤガラの瀧たきの様子をいろ／＼と調べてゐましたが、間もなく、その男の姿は、土地の役場に現れました。

「私は、ブロンデンといふ佛蘭西の綱渡りをする男です。是非、瀧の下谷に綱を渡して綱渡りをやつ



て見たいと思ひますが、その御許可をなすつて下さい。」

佛蘭西人はかういつて役人に頼みました。

綱渡りの名人、ブロンデンの名は、ナイヤガラの地方にも知れ渡つてゐる位に有名で



した。しかし、この冒険ぼうけんだけでは誰も目を見張みはりませんでした。それで、役場でも最初は、なかなか許可を與へませんでしたが、餘り度々ブロンデンが頼むものですから、とう／＼許可をする事になりました。選ばれた場所といふのは釣橋のある少し下流で、非常に深い谷の上でありました。

綱の太さは直經二インチ程もありました。そしてしつかりと谷から谷へと曳き渡されました。この綱の上で、しかも、固唾を吞んで觀てゐる何萬人といふ見物の前で、ブロンデンは例の素晴らしい藝當を演じたのです。

丁度土曜日の午後の事であります。ブロンデンはこのめまひのしきうな一本綱の上を渡りました。しかも、たゞ渡るだけで満足しないで、彼の最も得意とする、驚く可き藝當を演じたのです。ブロンデンは綱の上でしやつちよこ立ちをやつたり、手だけで千仞の谷の上にブラ下つた

りしたのです。彼は時々、わざと今にも落ちさうな様子をしました。そして、見物の膽を冷やせて置いて、すぐと、やす／＼と又もと通りの位置に戻りました。



ブロンデンは背中の人に一人おぶつて、綱を渡つたりした事もあります。丁度、彼がこの不思議な藝當を演じてゐる時の事です、中途まで進んだ時、



「君、ちつとしてゐないと、こゝへ下すよ。」といひ  
すると、ブロンデンが、  
背中の中の男が急に怖がつて、ぶる／＼顔へ出しました。

ました。

さういふので、背中の男は、それから渡り終るまで、ちつと静かにしてゐたさうです。

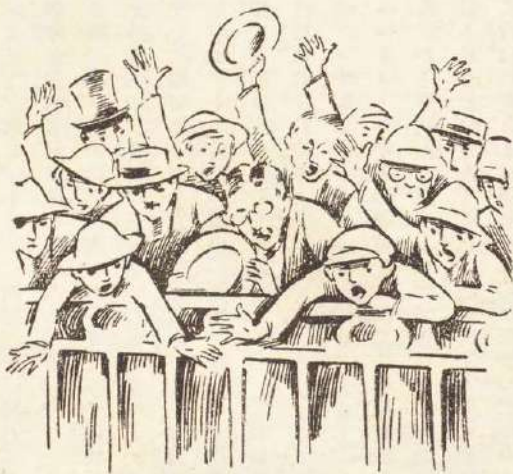
ブロンデンはそれから三年間もナイヤガラにをりました。そして、膽をつぶしてゐる公衆の前で、あらゆる面白い藝當を演じて見せてゐました。

或る時、それは今の英國皇帝が皇太子様の頃でしたが、折よくナイヤガラへ御見物にお出でになつたので、ブロンデンはその御前で、得意の藝を御覽に入れました。皇太子様は、大層お喜びになつて、わざわざブロンデンをお招ぎになつて握手を賜りました。すると、ブロンデンは、大得意で、皇太子様に向つて、

「殿下、私の背中でナイヤガラの谷をお渡りになつては如何で御座いますか。」と、申上げました。

しかし、殿下は、それだけは勘辨してくれと仰つたさうです。

## ウエツプ中尉の運命



ウエツプ中尉は、英國のシエロツプシヤヤといふ處で生れた有名な水泳家ですが、ナイヤガラ瀑布の下で、哀れな最期を遂げるやうな運命に出遇ひました。

ウエツプ中尉が有名になつたのは、二十七歳の時に、英佛海峡を泳ぎ切つた爲めで、それ以來、海の勇士として非常な名聲を博しました。

しかし、中尉がこんなに有名になつたについてはまだ外に偉い働きをした事があるのです。それは、その二年前ですが、汽船のロシヤ號が大西洋の真中を航海してゐた際に、汽船の甲板から飛込んで、海へ落ちた男を救はうとしました。

その企は失敗に歸しました。しかし、中尉はその勇氣に對して、政府から金メダルを贈られて、表賞されました。

英佛海峡横斷後、ウエツプ中尉の名は英國中に知れわたつたばかりでなく、全世界にその評判が傳へ



られましたので、中尉もいくらか調子に乗つて來ました。そこで、遂に、あまりに無謀だといはれる最後の冒險を演じて見る氣になつたのです。

ある時、アメリカの鐵道會社がナイヤガラ瀑布の渦巻を泳ぎ切つた者に、一萬弗の賞金を出すといふ廣告をした事がありました。鐵道會社がこんな發表をしたのは、その場處へ澤山の見物を集めて、汽車賃を儲ける積りだつたのですが、しかし、これは實際には行はれずに終りました。

ウエブツ中尉は、さういふ話を聞いてゐましたので、ニューヨーク中央鐵道會社へ向つて、懸賞金を出さないかと申込んで見ましたが、遂にその申込みは受け入れられませんでした。誰も、そんな計劃が實際に行はれやうとは思はるものがなかつたからでもあります。

しかしウエブツ中尉は、この計劃を放棄しませんでした。中尉の奥さんも夫に向つていろ／＼意見を

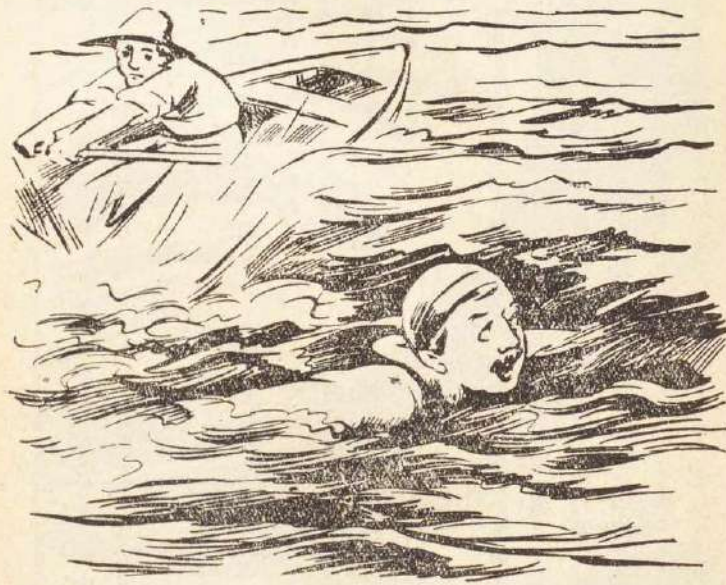
しましたが、それも無駄でした。中尉はいよ／＼決心をして、奥さんや、子供をボストンに置いて出發する事になりました。

中尉がナイヤガラに到着したのは、大冒險を行つた日の午後一時頃でした。それから直ぐに、溪流の様子を調べに行きました。

中尉は、ニューヨーク・ヘラルドといふ大新聞に自分の計劃を次の通りに發表しました。

『流れの速さは一時間三十九哩、川の深さは九十五ヒートあるといはれてゐる。流れは瀑布の下が廣く溪流となつてから俄かに狭くなつてゐる。私が恐れてゐるのは、兩岸から渦巻に向つて突出してゐる二つの岩のあることである。沸き返るやうな水は、岩の上で轟々となつてゐる。私はそれ等の岩を避けるやうにしなければならぬ。もしも、渦巻の中心に引き込まれたら、死ぬより外ないから、さうされないやうに試みなければならぬ。』

私は小さいボートに乗つて、釣橋の上流の川の真中まで進む積りである。尚、私は英佛海峡を横斷した時に着た絹の股引をはくであらう。豫定の時間に私は川へ飛込む。そして瀬の中へ入る。勿論、私は特に泳がうとは思はない。水の恐るべき速力で、自然と私の身體は前へ送られるであらう。いよ／＼水が危険になつて來た時には、私は水へもぐる。そして、息をするために浮び上



らねばならぬまで、さうしてゐる。多分、さういふ事を度々やらなければならぬであらう。

さて、いよ／＼渦巻にぶつかつた時には、私は全力を盡して、それから脱け出て、渦の中心に引き込まれないやうに試みる。その場合、私の生命は、私の力と私の水泳の熟達とに懸つてゐる。渦巻から脱れるにはその長さが四五丁もあるから、二三時間はかかるかも知れない。で、いよ／＼それを突破した時には、私は英國領であるカナダの岸に



上陸する積りである。

ウェツプ中尉がいよいよナイヤガラへ現れると、大勢の新聞記者に取巻かれました。その時、中尉は次のやうな話しを記者達にしました。

「私は必ずやり遂げられと信じてゐます。恐らく急流のために水の下へ流されて了ふかも知れませんが、私は、必要とあれば、一分と三十秒間位は、息を吐かずにゐる事も出来ます。私は競走の水泳をやるのには、身體が肥りすぎてゐますが、しかし、これは競走ではありませんからね。」

以上の談話によつて、中尉が十分に自信を持つてゐた事がわかります。

その日の三時半になると、中尉は再び川へ行きました。そして、ボートに乗り込みました。ボートはジエームス・アクロイといふ渡守りの男が漕ぎました。中尉はやがて流の真中まで運ばれました。そこ

は、釣橋から三百ヤードの上流でした。

さうしてゐる間に、中尉の友人フランキルといふ人が、馬車を走らせて渦巻のある方へ先廻りをして行きました。

何千人といふ見物は、兩岸に列をつくつたり、釣橋の上に乘つたりして、固唾をのんで見つめてゐました。

四時になると、中尉はいよいよ、着物を脱ぎました。中尉は水泳用の股引だけになりました。

中尉は見物の大喝采のうちに水の中へ飛び込みました。

中尉は急速力の溪流を流れ下つて、六分間後には、もう釣橋を通り過ぎてしまひました。

釣橋の下へ来た時には、中尉の速力はますます加りました。水は中尉をめがけてぶつかるので、丁度ブランコにでも乗つてゐるやうに、上になつたり下になつたりしました。





それからの中尉は、どんな危険に出遇つたでせうか。その時の見物の一人が書いたものを、こゝに掲げませう。

『中尉は波の間に間に見えがくれしてゐました。でも、中尉は悠々と泳いで、如何にも安心して泳いでゐるやうでした。丁度釣橋の下流へ四五丁程も来た頃でせうか。そこから川は急に狭くなつて、急流になります。こゝから渦巻のある處までの水の激しさは、到底記すことが出来ません。』

時々ウエツプ中尉は波に襲はれて、見えなくなつて了ひました。

しかし、中尉はまた易々と水面上に浮んで來るので、見物人達はホツとしました。

やがて中尉は、急流のために水底へ引き込まれて了ひました。それから再び浮び上つた時には、沈んだ場處から百五十ヤードも下流に來てゐました。

中尉の速力は刻々に加つて行きました。そして、恐るべき速さで押し流されてゐました。

渦巻の上流四五丁のところで、川は急に曲つてゐます。

こゝは最も危険な處で、水は恐ろしい力を持つて岸を打つてゐるので、全く地獄のやうな物凄さです。

こゝから、渦の吸引力がはじまつて來るのです。

こゝまで來ると、中尉は沈んでしまひましたので見物達から絶望の叫びが舉りました。しかし、中尉は再び浮び上りました。そして、次第に恐ろしい渦巻に向つて近寄つてゐました。

とう／＼中尉は、巨大な渦巻のきわどい處まで運ばれて來ました。中尉は一番高い波の嶺に乘上げられたのです。

中尉は兩手を高く舉げました。それから、大きな口を開けてゐる淵の中へと、抛り込まれてしまひました。

一瞬間、中尉の頭が水の上に見えてゐました。しかし、もう身動きをしませんでした。

たゞ、たけり狂ふ水のなすがまゝになつてゐました。

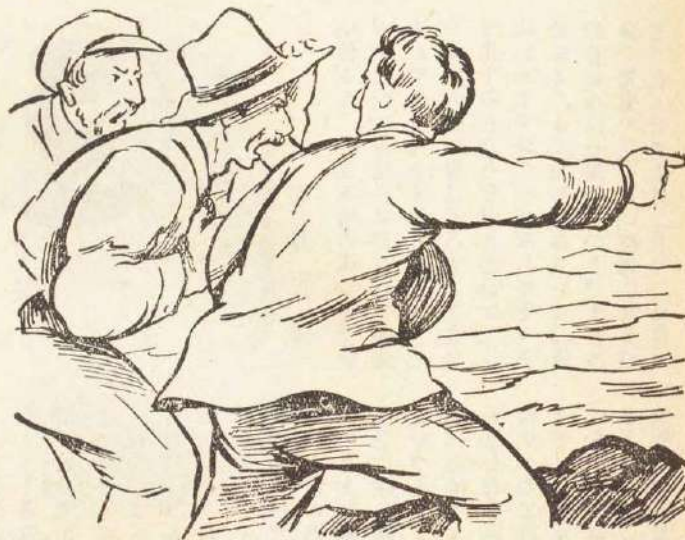
これが、遂に、中尉の最期でありました。一瞬間の内に、水底深く吸ひ込まれて了ひました。そしてその後はもう、姿が見えませんでした。』

× × × × ×

中尉の死體はその後発見されて、レウイストンといつて渦巻から四哩も下流で引き揚げられました。

頭蓋骨が碎けてゐました。しかし、それは死後に起つた事のやうに見えました。大勢の醫師が死體を調べた結果、死んだ原因は水に溺れたためではなく、非常に水壓のために、神経の痙攣を起した爲めだと診断されました。

(をばり)







# 綴方

齊藤佐次郎選

## 先生の指先(賞)

山口縣熊毛郡鹽田校高一  
加藤正子

「皆さん、わきの所の四つ止。むづかしいから見に來なさい。今先生がやつて見ますから。」

先生の聲に皆はぞろ／＼と立つて先生のしうろを取りまいた。

「いゝですか。一べんしかやりませんよ、よく見てゐなさいよ。」皆のしせんは一樣にじつと、まめに動く先生の美しい指先に集まつた。私もじつと見てゐた。面白い

／＼。先生の白い指は面白く／＼と着物にまつわる。そして時々針の先がちくりと光る。私はうつとりしてしまつた。

「ほら、よくなつたでせう。あゝすればいゝんですよ。わかりましたか。」かう言う聲と共に、面白くまめ／＼しく動いてゐた先生の手が、急にびたりと止つた。私は、はつと我に返つた。ゆめからさめたやうな氣がする。見ると先生の手持たれた着物のわきは、糸もかつこうよく止められてゐる。

私はあはて、皆を見ると、皆わかりましたと言ふ顔で各々自分の席にかへつて行く。私はます／＼あはて、そ／＼と自分の席にすはると、さあ必配でした。あゝ、どうしよう。私はわからない。皆は皆わかつたのに。私が先生の指

先ばかりに心をうつしてゐたからだ。でもこれは私が悪いのではない。先生の指が美しいのが悪いのだ。先生の指が面白く動くのが悪いのだ。でも私がそれに心を止めるのがまちがひだ。あゝ、やつぱり私が悪いのだ。私は何がなんだかわからなくなつた。

## この間のじしん(賞)

福井縣三國尋常小學校四年  
龍口孝子

この間の日曜に日曜學校へいったら、人喰鬼といふ大そうおそろしい話をきいた。私はそれから毎日々々この話を思ひ出しては、おそろしくてならなかつた。ちやうどそれから五日たつた夜であつた私はその話のゆめを見た。私は鬼に追つかけて、一しやうけん



植木(賞) 東郷本  
東京元町 中坂石次郎

「木植」なひどのだからさのさきや、たまにひどいでせう」といはれた。私は「あはら(蘆原)がおんせんだから、いつじしんがいくかしらん」といつた。ねえさ

んは「あんなあはらは三國のそばにできないで、もつとあつちへできればいゝのに」といふと、おばあさんが「そんなこといつたつてしかたがない」といひなかつた。お父さんはしんばいさうなほをして「またいまのようなじしんがいくとあぶないからおきてあよ」とおつしやつた。皆は大ぶんおきてゐたが、いくらたつてもじしんがいかないの、あんじ／＼とこにはいつた。私はそこにはいつても中々むれない。おもてで荷車をひいてゆく音がした。そばにあつた時計を見ると四時半をさしてゐた。私は「もう夜あけかな」と思つた。しばらくするとおばあさんがおきてきたので、やつとあんしんしてねむつてしまつた。





## 燕の子

新潟縣中蒲原郡鏡田校尋六  
村山良英

『ビエ、ビエ』と小さなつばめが大きな口をあけた。大きな燕が餌をやつてゐる。そしてまた風をきつてとんでいった。

スー、スー身がるさうにとぶ。立木にあたるかと思ふと、ひらり

「花」(賞) 東京東本  
中坂常雄

と左にまはつてとぶ。日のかん／＼つてゐるところに、とんぼがそつととまつた。おやと思ふうちにつばめはもう口にくはいてとんでゐた。かうして親つばめは子供に順々に口に入れてやつてゐる。一羽のつばめが、長いものをくはいて、のめこめないで目を白黒させてゐたがとう／＼すの外へおとしてしまつた。僕はひろつてなげてやつた。子燕は皆で六羽、すの中におしたりおされたりして食べてゐる中に夕暮れになつた。おや燕もかへつてきた。そして皆かたまつてしづかにねむつてゐる。

## 夕立

東京市外代々木町笹塚  
村山吟子

『いゝお天気ねえ』『え、此の頃



「富士見温泉」

甲府市七二 田中省二郎

れどなまぬるい風でもつとも氣持が好く無い。その時私は遠くに雷の音を聞いた。『あゝ雷ね』私は姉に言つた『え、きつと雷位にはなるだらうと思つていたわ。又こんなに暑くてはやりきれない』姉はいかにもだるそうにこう答へた。母も縫物の手をやめて空を見ていらつしやつたが、やがて私達に『今にぎしつと來ますよ』といつていらつしやつた。南風に吹かれて雲はどん／＼青い空を埋て行く。何といふすさまじさだらう。やがてぼつ／＼と雨が降つて來た。そして雷はだん／＼ひどくなつていつた。あゝもうあの美しい青空も見えなくなつた。外を通る人が驚いて裾をまくつて走つて行く。『あつ、また光つた』誰かが叫んだ。弟が『恐い』と言つて私のそば

にかけて來た。ごみ／＼／＼／＼雷はものすごい音でなつてゐる。私達はあまり恐いので、弟をつれのすみにかたまつてしまつた。それから雷はしばらく大きくなつてゐたが、やがて少しは遠くなつた様だつた。そして雨もだん／＼小降りになつて來た。私はえんがわのガラス戸を開けた。戸道の所には雨がいつばいたまつて、青い空の雲の間から少し見えてゐるのがうつ／＼た。それから十分位の後だつた。雨はもうすつかり上つてさつきの美しい空に歸へつてゐた。

お庭の木々は皆緑の色を競つて美しくなつてゐる。日光はよみがへつた様に光りながら世界の生物を照らして居る。あゝ何んと云ふ好い氣持なんだらう。けれどもま



「川原」

香川県水上校 川田 仁



だ雷が遠くになつて居た。お向ふのき下に雨やどりをしておた人が喜んで走しつていった。すべてのものが生きかへつた様で、私

はなんともいれない好い氣持になつた。そうしてもうさつきの様にむし暑つくはなく、机の上の百合の花は今いつそう輝やかしく見えた。

水 泳

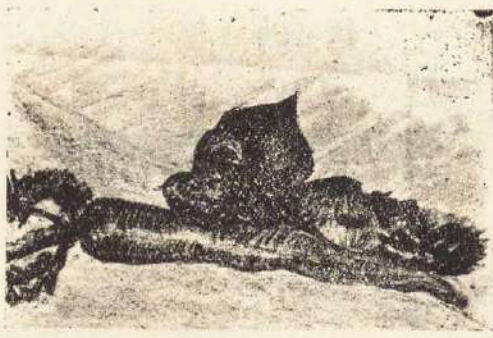
日本女子大學附屬高女一

中 島 泰 子

今日四年の春子さんと、春子さんの弟さんと、従兄と、一年の文子さんと私と五人で、去年よく泳ぎに行つた井之頭のプールに泳ぎに行つた。プールの水は去年とかはりなく美しくすんでゐた。私はたゞ水を見たゞけで、何だか寒いやうな氣がしたが、勇氣を出して浅い所から段々深い方へ行つた。そして水の中のくいにつかまつて「泳ごうかしら。何だかつめない

な」と思つたが、思ひ切つてザブンと泳ぎ出した。浅い所にゐた春子さんと文子さんは「ゆうかんゆうかん」と手をたゝいたので、はづかしくなつて、あわてゝ上つてしまつた。お日様も段々烈しく照るし、暖くなつたので、五人はカッパのやうに泳ぎ廻つた。泳ぎつかれて五人は大人の泳ぐ方へ見に行つたら、高い所から飛び込む音大人の頭が方々にボカリ／＼と浮いたやうになつてゐたので、おかしくなつてしまつた。泳いでは上り、泳いでは上つて、時間のたつのもわからず、おなかゞすいたので、五人は森の中へ行つてお辨當を開き、色々なお話をしながら食べた。井之頭の森は静かでたゞ蟬の鳴く聲だけが静けさを破り、水蓮の咲いてゐる池に、森がさか

さまにうつゝゐた。お辨當がすんでから又泳いだ。お晝からする分人が来て、水のはねかる音、笑ひ聲、飛び込む音、人の呼びかは



「野菜」

甲府市佐度 豊島 泰

す聲がいよ／＼烈しくなつた。カ／＼照す日の下で私達は元氣よく泳ぎ廻り、何事も忘れてしまつた。そうして三時頃家に歸へつた。たつた一日で日に焼けた肩がピリ／＼し出した。

かしわ餅

和歌山縣伊都郡橋本校尋五

上 田 フ ミ

私が松井さん所のかどにゐると松井さんが出て来た。私はヒョツと松井さんの腹を見ると、大きな腹をしてゐるので、

「アレおまはん。腹がだいぶ大きなア。」

と、云ふと松井さんは、

「フシ！こう」

と云つて、じゆばんをぬいで見せてくれた。見ると腹は青すじを立

てゐる。そして横つ腹もふくれゐる。私はびつくりして走つて歸つておちやんに「お母ちゃん清太さん、だいぶ腹大ききわッ」といふと「そうか」といつて、笑つてゐた。そして、其の時はそれですんだ。私は一時間程たつてから、外へ出たら、清太さんのお父様が井戸の端でラツキヨを洗つてゐた私は又、

「おいやん。おまはん所の清太さん、だいぶ腹大きなア。」といふと「大きなろな。かしわ餅十もくたんでトウ！」と、云つたから、私はびつくりして家へ歸つて来て、お母ちゃんに「清太さん。かしはもち十もたべたんでトウ」と、云つた。お母ちゃんも又笑ひながら「かしわ餅の十も食たら胃が悪くなさ。」と、云つた。私は又飛んで



「演」

秋田縣荒川村 岩谷 貞三



出て、『ホイテ清太さんわいヨ?』と、云ふと、おいやんは『畑へ運動しに行てこいつて云ふと、行たわ。』と、いふた。私はそれから、

清太さんがどんな腹をして歸つて来るやろと思つて、待つて居た。

### 金の星がついて

秋田縣仙北郡荒川村上荒川

岩谷 貞三

(十三歳)

朝机へ向つて手紙を書いてゐると、『バサリ』『ハイ』と父は返事をせられた。

『金の星』がついたらうか? 僕の胸が一度におどつた。お母さんは廣間の方へ行かれた。僕はペンを机の上へ置いて、走るやうに茶の間へ出て行つた。お父さんに『金の星ですか』といふと『おさうだ』と答へられた。其の時はもうお母さんが手にもつて居た。受取つて外を見ると、郵便屋さんは知らん風をして向ふへ歩いて行かれた。さつそくよるへる手で封を切

つた。

見ると表紙があつさりとして氣に入つた。

父は『さあ田圃へ行こう』と立たれた。僕はもう少しと思つたけれど『ハイ』と返事をした。母も『よしよに行かんと人に笑はれる』と言はれた。

が一寸見て行かうと、僕はしよけんめいに頁をかへした。『では田圃へ持つて行つて、休みの中に見なさい』と母に言はれたので、僕もそれがよいとおもつて、よしと立つたが父にしかられはしないかと又思ひながらすわつた。

一通り見て行こうと急いで頁をかへした。

しばらくして惜しかつたが、机の上へ金の星を上げて、歟をもつて田圃へ行つた。

### えんぴつ

桃岡小学校尋二

安藤 朝吉

あるひ、ぼくはお母さんのおつかひをたのまれて、道があるいてゐると、ぼくの前にゐた男の子がなにかひろつて、そばのかきねのところにおいておきました。ぼくはなんだらうと思ひまして、いつて見ると、えんぴつが置いてありました。ぼくはその時かんしんしました。たつた七つぐらゐの子が正しきにもそこへおいておいたのがえらいと思つて、道々かんがへて行きました。うちへかえつてお母さんにそのことをいふと、お母さんは『まあ、なんといふ正しきなおこさんでせう』といはれました。おまへもこれからさき、なに

かおちてゐたら、けつしてそれをもつてきてはならない。ちやんとそばの人目にたつやうなところへのせておかなければならないといはれました。

### 雀の子

大阪府泉北郡尾花校尋四

北口 照子

かど口に立つてゐると『チュンチュン』三四へん鳴いたので『雀が子生んだのかわからひん。』と思つて、とゆの所を見つめてゐた。

一羽の親雀は、えさを食はへて飛んできたが、私を見てなか／＼すへはいらない。又『チュン／＼』ないたがはいらない。私はかはいそうであるから、家へはいつて障子のやぶれからのぞいてゐると、親雀はよろこんで、すの中へはい

つた。

中ではうれしさうな子雀の鳴きこえがきこえる。

### カケクラベ

佐賀縣東松浦郡鬼塚校尋二

中村 トシノ

私ドモノガクカウハ、サクランオキガ七本アリマス。私ドモノタイサウノトキ、トホキヨサウガアリマスカラ、サクランオキヲマハルノデス。一年セイハ一カイデ、二年セイハ二カイデスカラ、タイヘンキツウゴザイマス。タイサウガスンデジギヤウスルトキニハ、タイソウアツウゴザイマス。スズシイカゼガフイテクルト、私ドモハタイヘンヨイココロモチガシマス。コレハ私ノウチノオカアサンニハナシテクルトコロデス。







新らしく出た本

■童話 讀本 金の釣瓶 (沖野岩三郎先生著)

お待ち使の童話讀本、金の釣瓶がいよいよ發行になりました。日本に於ける最初の童話讀本を作つたのが沖野先生であるだけに、他から發行されてゐる同種類の本とは全く比較にならない程立派なものです。幾度讀んでも面白く、そして讀む程お話の中からは、金、釣瓶の値打があります。まだ御讀みにならない方は第一編の「赤い猫」と共に是非早くごらん下さい。四六判箱入美本一五〇頁、定價金壹圓、金の星社發行。

■日本童話集 (一九二五年版)

本集は、日本に於ける最初の童話年刊として、童話詩人會より發行されたものである。現代童話詩人三十三名家の代表的作品を網羅しただけであつて、種々皆實玉の如き輝きを持つてゐる。讀後は北原白秋氏の如き力を認めなければならぬ。四六判三九〇頁、定價貳圓貳拾錢、牛込區矢野町 新潮社發行。

■黒船物語 (沖野岩三郎先生著)

幕内、久藏、忠之と云ふ三人のチヨンマ

自由畫掲載外佳作

吉田 年春(香川) 福島 實治(埼玉)  
宮坂 邦典(長野) 小久保 久(埼玉)  
森本 康雄(熊本) 長谷川 正造(千葉)  
深野 小太郎(東京) 出水 清重(香川)  
金子 一義(福岡) 吉田 シツカ(福岡)  
高西 虎夫(香川) 市川 六郎(埼玉)  
阿部 治助(秋田) 長崎 晴子(静岡)  
淺原 精次(山口) 石橋 晋太郎(香森)  
加藤 亮巳(和歌山) 前田 清之助(愛知)  
榎山 吟子(東京) 安藤 榮(山梨)

幼年詩掲載外佳作

吉田 シツカ(福岡) 吉原 平(千葉)  
松澤 スミ(千葉) 吉田 貞夫(福岡)  
高野 ヤノ(福岡) 青柳 保江(千葉)  
齋藤 淺吉(千葉) 久保田 曉藏(東京)  
前田 佑(山口) 秋風 小夜子(東京)  
深野 小太郎(東京) 北安 西港(香川)  
出水 清重(香川) 木村 勇(山口)  
吉田 茂隆(埼玉) 西村 ハツセ(福岡)

綴方掲載外佳作

小口 壽満子(長野) 設樂 ハル(東京)  
海達 公子(熊本) 藤井 靜代(新潟)  
福田 ひで子(山梨) 藤澤 茂子(山梨)  
小澤 正代(山梨) 河内 春夫(三重)  
山口 包子(山梨) 森野 慶次(和歌山)

童話掲載外佳作

神代 好美(茨城) 和泉 幸一郎(青森)  
橋田 かつみ(高知) 麻生 天翼(東京)  
石崎 青花(茨城) 西山 よしかづ(神奈川)  
北原 一果(神奈川) 森本 康雄(熊本)  
淺原 守一(東京) 生川 併介(長野)  
秋山 夕鐵(熊本) 岡村 勝(長崎)  
大島 和雄(北海道) 川内 孝(東京)  
おがむら 実(長崎) 川上 健路(東京)  
増田 實(茨城) 湊 一朗(東京)  
永原 銀星(鳥取) 島本 夫二(愛知)  
福永 幸次郎(京都) 河内 春夫(三重)  
松岡 城峰(山口) 若井 ひろし(大阪)  
三島 定市(島根) 寺田 蒼児(大島)  
森 ぼたる(愛知) 平岡 巖(東京)  
松村 秀南(和歌山) 山口 菊造(三重)  
山田 志路(東京) 天野 貞三郎(北海道)  
青柳 和夫(神奈川) 田井 英春(大阪)

上沼 イトエ(長野) 大井 弘(福井)  
清水 ツヤ(千葉) 青柳 健二(大阪)  
石川 愛子(千葉) 小島 二郎(福井)  
荒木 いな(福井) 淺原 精次(山口)  
山村 加枝子(不明) 深沢 定良(和歌山)  
山田 静(新潟) 山崎 千代治(神奈川)  
小林 崇文(香川) 竹井 治郎(福井)

童話掲載外佳作

橋爪 白川(長野) 江口 白菊(熊本)  
大庭 良美(鳥根) 橋本 静雨(千葉)  
茶本 七郎(神奈川) 大島 尚子(兵庫)  
吉川 行雄(山梨) 長谷川 好延(東京)  
松井 興(東京) 川井 牧朗(秋田)  
石川 保武(東京) 藤倉 治(東京)  
小倉 元一(大阪) 久木田 義雄(鹿児島)  
伊藤 香平(愛知) 片山 結美(大阪)  
松村 秀南(和歌山) 安藤 ひろ子(東京)  
酒井 正利(静岡) 青柳 和夫(神奈川)  
長谷川 白泉(千葉) 新 幸雄(徳島)  
出口 清(東京) 池田 正博(高松)  
長谷川 行雄(東京) 太田 貞夫(愛知)  
森 ぼたる(愛知) 中野 豊(東京)

小人篇

深野 小太郎(東京) 坂口 生芽(長野)  
野村 詩模(臺灣) 原 まさる(長野)  
藤城 あき(愛知) 小清水 文夫(千葉)  
佐藤 錠二(北海道) 岩谷 貞三(秋田)  
福永 ハル(福井) 川村 花子(岩手)  
飯島 守夫(長野) 若林 喜美(東京)  
三井 登久三郎(東京) 荒木 ハナ(福井)  
生川 兼子(長野) 山崎 博(長野)  
小林 崇文(香川) 湯淺 清(千葉)  
小清水 文夫(千葉) 丸山 正男(埼玉)  
島田 源治(群馬) 清田 啓一(千葉)  
中山 俊(山梨) 久保田 曉藏(東京)  
塩垣 太郎(京都) 中村 連生(大阪)  
小暮 ちの(群馬) 宮脇 潤(岡山)  
村岡 繁(山口) 三橋 延江(朝鮮)  
小野 一男(盛岡) 石橋 晋太郎(香森)  
井原 盛樹(鳥根) 大井 澄子(朝鮮)  
青木 ヨシノ(山口) 戸島 勲(山口)  
南保 三津男(東京) 大村 隆(福井)

新誌友名簿

坂井 誠次(長野) 末廣 幸世(山口)  
上總 健之(岡山) 入江 敬治(埼玉)  
沖津 清瑛(東京) 栗澤 涉(長野)  
田口 やす子(熊本) 田賀 一男(東京)  
三ヶ山 小枝(第五六學年福岡)  
宮嶋 エイ(群馬) 松田 孝(宮城)

(以下次號)

水の子物語 (高崎能樹氏譯)

「原著者、チャールズ・キングスレー」  
「皆さん、この不思議な物語の中から、  
どうか善い知恵を導き出して下さい。私は、  
この物語の中から、人間は誰でも、正しい心の  
幸福な人にならなければならない事や、又キツさ  
う成れる事を学びました。皆さんは如何でせ  
うか？」(譯者序文の一節より)

(四六判箱入美本一九〇頁、定價金壹圓、  
日本橋區 金町三 橋本書店發行)

少年の頃(上巻) (小野誠悟氏編)

本書は明治から大正へかけての文壇の大家  
貳拾貳名士の少年時代の生活を記したもので  
ある。それが皆、作家各自の自叙傳から採  
集した所に非常な面白味がある。編者は特に、  
其等の自叙傳の中から、明るい場面、少年の  
思想に共感する叫び、清らかな場面を選んだ  
と云つてゐる。何人にも一讀を薦めたい良  
書である。四六判二〇〇頁、定價金貳圓、  
價九五錢、町田區四番町七 第一出版協會發行)





### 讀者だより

▼うれしい「金の星」九月號も、今日私の手に到着しました。御禮申し上げます。表紙と口繪は、近頃になり傑作なと思ひます。夏休が終ると涼しい秋風が吹いて来て又涼つた氣持で自然に接するにいいです。私は秋が一番好きなのでそればかり待つてゐます。(秋田 木下孝)

▼齋藤先生 私は綴方を出しましたから、どうかよろしく。金の星八月の讀物は、波の上を歩く人、四つの幽霊、二人兄弟、まだその外たくさんあります。(愛讀者)▼沖野先生 鳥澤校で開かれた、童心 術語演會には、罷り出て色々御指導を戴いた事を感謝致します。夏休には私も是非子供達の爲に、いいものを書きたいと今から期待してゐます。本當にいつか

したものを書く心算です。どうぞ御指導の程をお願いいたします。▼野口先生 私達の主眼で、先生の御講演をお願ひすることを得ました事を厚くお禮いたします。先生のお話には涙ぐみました。現代の人間には美しい涙がなさすぎます。現代の教育は子供から涙を奪つてしまひます。私達はもう理屈を言ふてゐる時ではありません。子供達と一緒に進んで行くのです。御教導の程をお願ひ申します。(山梨縣 廣瀬まさみ)

▼「金の星」は来ないのかしら」と、毎日言つて居た金の星が、今日来ました。うれしくてしょうがありません。すぐに讀みかかつて、大い讀んでしまひました。「小金は空に」や「四つの幽霊」がだん／＼おもしろくなつて来ます。「風流む満洲の夜」のつぎが早く見たらうございませう。私が繪を出したのが賞に入らなかつたのでがっかりしました。これからどう入／＼投書しますから、どうか賞に加枝子)▼今月は推薦作「二つの岩の麓」「蜚塵」がめだつてよく存じました。

若山先生の「郭公」。秋が近づきました旅行思ひ出されます。三名所めぐり「出版の日」を待ちます。暑い折から、編輯局諸先生の御健康を祈ります。(東京 小林重義)▼僕も美しい金の星の愛讀者の一人となりました。これから童話欄に振ひたいと思ひます。雨情先生及投書家諸兄姉どうぞよろしくお願ひ致します。(須磨 瀧口曙風)▼葉山へ行つてゐるとひまなで毎日本屋へ行きます。「金の星」は十日の夜まで十四日には全部賣れてしまひました。ボスターがあつたら一枚本屋へ持つて行つてやらうと思ひますが如何でせう。(葉山 松井純)▼いい、ボスターが無くて困ります。何か立派なものをお作りになつて見せて下さい。(保里)

▼私は多くの星の中から漸く昨日金の星を見出した様子を新来月、暑い太陽が去ると、金の星は月に劣らず輝き出してゐるります。私はその星と住家を共にしたいのです。皆様よろしく御願ひ致します。(鳥取縣 坂口友吉)▼出目助さん道中記は如何致されましたか。私は「出目助さん」を

今月又今月か待つて居るのに少しも金の星へ出ませんので、一寸お慰め致します。新巻物の様に面白く「出目助さん」の出ないのを私はうれしくありません。ぜひひ出して下さいませう。切にお願ひ致します。(長野 生川併介)▼お待たせの「出目助さん」が出来ました。どうぞ御愛讀下さい。(保里)▼記者様。金の星の九月號、なんと言ふまでです。金の星は私のいつ／＼までものお友達です。九月號で面白かつたのは「愛夫リツキ」「土庫の句讀」「歸つて来た奥書」「オデッセイ物語」「二人兄弟」あら／＼、書いてゐるとみんな。ただ一つきりひなののは、没か。前に立つてゐる人一人。でも没にしなければなりませんわ。(愛知 山田さだ子)▼もう三ヶ月もたつのに一寸も出ない没ばかりだ。私は何も言はない。かへつて自己を反省するだけだ。尚一層力めるだけだ。(大阪 寺田若児)

▼編輯局皆様へ。山の木野の草履の植木鉢も深緑に包まれ、蟬の聲さへも聞えて来ました。新巻御社

では如何に此の暑さをお過ごし遊ばされたか。此の暑さに一點の隙もない名篇描びに完成して下さいました事は、私等に取りまして誠に感謝の至りで御座います。

(京都 火星會)▼名古屋のみ「金の星」の催しなされな。それが随分私等に取りつて不平で御座います。勿論、愛知はどうした事が、愛讀者が少なう御座います。そして、それ程までに努力して下さる人もない様です。それ故かと思ひますが、なつかしい先生のお顔を一度なりとも見たい御座います。名古屋の愛讀者諸氏よ、ふるはれよ！(名古屋 太田貞夫)

【地方文藝雑誌名簿】(入社希望の方は直接發行所へ御照會下さい)聖路 岩手縣一關町八幡街三〇西野 虹兒ときはぎ東京市本所區外手町八四愛國婦人會隣保館内理想 京都市衣笠南道町是野 清一郎櫻んぼ 岐阜縣關町萬屋町登白薔薇 高知縣幡多郡具村

具同 橋田かつみ札幌市山鼻町一七九中野 孝緒

緑の丘 札幌市山鼻町一七九中野 孝緒

▼ほんとうに自分の不熱心を恥かしく存じます。童話壇の諸兄の不風な精勵をうらやましく思ひます。ますますより以上に自身を鞭撻して行かなければならないとつく／＼點頭されます。忘れ勝たの童話の投稿を再び永続的にさせていたゞきます。ではこれで失禮。(台北市 野村詩樸)

▼快い夏が来した。私たちの二見ヶ浦にも、まづくろな人たちが澤山集つて来ました。一度先生で来て下さい。そして一緒に遊んで下さい。それはいい、景色の處です。名物の赤福でも御ちそう致しますから。(三重 中西榮之助)

▼赤福ツてなんですか。(給仕)▼私は當地の本城で金の星を買つて愛讀してゐる讀者です。今月の懸賞募集に親方及び童話を投書したからお受取下さい。(三重縣 河内泰夫)▼毎號美しい金の星をおみせ下さい。ありがとうございます。本當にんていいのでせう。うらの芒を

みてはうたつて居ります。

それから「歸へて来た奥書」も海から歸へてきてくれございませう。みな様おからだお大切に遊ばして下さい。返子 河津さみ

▼皆さん、淋しい子に、お暇の時にお便り下さいませ。山里にも夏が来ました。廣島縣 若井安二)▼金の星をお遊りになる先生、お變りありませんか。金の星も月を追ふて發達してお目度ございませう。暑くもなつて参りましたからお體を大切に。そして先生達と一緒に盆々金の星の發達を御祈致しませう。(千葉 北川政一)

▼八月號でうれしかった事がありません。僕の幼年詩が初めて出て居た事であります。これからもうんと出そうと思ひます。記者先生にあつてかんとやします。(北海道 佐藤鏡二)▼この頃、讀者だよりに面白いのが無くて困ります。どうか、目新しい、奇抜なのをお送り下さい。(保里)▼御免下さい。七月上旬に童話を投書致しましたからよろしく。私

は便りなたび／＼出しますが路上に出ません何故ですか。これからどうして／＼投書致しますからよろしく。(聴友 武部政一)

▼記者様お變りはありませんか。僕は眞に野口雨情先生のお顔を拜見しました。僕の學校(甲府相生學校)へおいでくださいませう。童心のお話を聞きました。僕は今度は力一ぱいの童話を出しますから見てください。さながら、甲府相生小學校)

▼大變、暑くなりました。編輯局諸先生の御健康と御奮勵を御祈ります。皆さんはよく金の星をほめて下さいます。童話欄のみなさんのお仲間、いつかは入れていただくでございませう。よろしく御指導下さい。雨情先生、齋藤先生の御健康を祈つて筆を握ります。(福岡 松井雅夫)







# 懸賞創作募集

【意注】童童【意注】綴幼自

自由畫年詩方編輯部選  
 山本鼎先生選  
 若山牧水先生選  
 野口雨情先生選  
 齋藤佐次郎先生選  
 寶島は十五行以内、童話に二十字詰二百行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として発表いたします。推薦の場合は童話には五回、童話には二回づつ、特選の場合は童話には拾回、童話には五回づつ、賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして「入選」の場合は「金の星賞」を呈します。締切発表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所氏名を記して下さい。原稿はお返ししません。

定価壹冊金四拾錢送料壹錢五厘  
 三ヶ月分三冊(送料共)壹圓二拾錢  
 半年分六冊(送料共)貳圓四拾錢  
 一年分十二冊(送料共)四圓八十錢  
 但し新年號は特別號で五十錢ですから、御注文の際は分だけ必ず加へてお拂込み下さい。  
 振替口座東京五九五九六番  
 【送】御注文は必ず前金で御拂込み下さい。  
 【金】送金は振替が一番便利で御座います。  
 【注】切手代用は(壹錢切手)一割増しです。  
 【意】第何巻第何號よりと書いてください。  
 【意】住所氏名は必ず書き添えてください。  
 廣告料は御照會次第お答へ致します  
 大正十四年九月九日印刷納本(毎月一回)  
 大正十四年十月一日發行(一日發行)  
 編輯兼發行人 齋藤 佐次郎  
 印刷人 小 端 安 之 助  
 印刷所 安 進 堂  
 東京市本郷區動坂町三五九  
 發行所 金の星社  
 電話 小石川五三三八七番

# 沖野岩三郎先生の五大名著

父戀し  
 森の祈り  
 労働の少年  
 赤い猫  
 金の釣瓶

この本は、沖野先生の童話集で、各巻に五回づつ、計二十五回の物語が収められています。内容は、労働の少年、赤い猫、金の釣瓶、森の祈り、父戀しと題して、それぞれが独立した物語として描かれています。沖野先生の童話は、子供たちの心を捉え、感動を与える力作が多く、大人も読む価値のある作品です。

東 京 本 郷 區 動 坂 町 三 五 九  
 金 星 社  
 振 替 帳 番 五 九 五 九 六  
 電 話 番 五 三 八 七 番  
 東 京 市 本 郷 區 動 坂 町 三 五 九  
 石 小 川 五 三 八 七 番





わたしの好きな歯磨は、

朝はライオン煉歯磨  
夜はライオン水歯磨

この二つを使ふので

わたしの歯はびかびか光ります。